大泉村埋蔵文化財調査報告書　6集

山梨県北巨摩郡大泉村

方城第1遺跡

HOUJÔ NO.1 SITE

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1988・3

大泉村教育委員会

峡北土地改良事務所

大泉村埋蔵文化財調査報告書　6集

山梨県北巨摩郡大泉村

方城第1遺跡

HOUJÔ NO.1 SITE

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1988・3

大泉村教育委員会

峡北土地改良事務所

序

近年，北巨摩地域では圃場整備事業が急速に進められています。この大泉村でも昭和54年以降毎年20万平米にも及ぶ規模で事業が進められてきました。この大規模な圃場整備事業は農業の生産性を向上させ，私達の生活に潤いを持たらしてくれるものです。しかしその反面，私達が祖先より受け継ぎ，また子孫に受け継いでゆかねばならない大きな文化遺産である遺跡の破壊という代償を支払わなくてはならないという現実があります。この様な中で我々は開発に際して事前に発掘調査を行い，これらの遺跡の記録保存に努めてきました。その成果として寺所，城下，金生，天神，姥神等の遺跡が調査され，県内はもとより全国的にも知られるようになったのです。

この方城第１遺跡も同様の経過で昭和62年度に調査されました。この遺跡は今から4500～3500年前の縄文時代の家がたった７軒あっただけの小さな集落で，姥神遺跡などの周りの大きな集落から分かれた人々が住んでいたものと思われます。また，この集落ではあまり石器が使われておらず，人々は周辺の大きな集落とは異った生活をしていたと思われます。ともすると私達はどれだけ多くの土器や石器が出たか，どれだけ特殊なものがそこから出たかだけでその遺跡の価値を判断しがちになりますが，多くの家や墓，たくさんの土器，石器が出土した遺跡と同じ時代のこのような小さな集落も同じように日本の歴史の中に正しく位置付けていかなくてはなりません。たまたまこのような小さな集落がほぼ完全に調査された例は山梨県内でもほとんどありません。地域の歴史を解明する上で非常に大きな成果であったと言えるでしょう。ここに上梓されれ運びとなったこの調査報告書が村民の方々にひろく活用されることを望むと共に，考古学，郷土研究の参考に供していただければ幸いと思います。

最後に調査及び整理に関わった皆様，関係諸機関の皆様に対して厚く御礼を申し上げます。

昭和63年３月

大泉村教育委員会

教育長　**浅　川　義　彦**

例　言

1　本書は昭和62年度県営圃場整備事業に伴う方城第１遺跡の調査報告書である。

2　本調査は峡北土地改良事務所との負担協定により，文化庁・山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。

3　遺跡は山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3228他に所在する。

4　調査面積　2660㎡

5　発掘調査期間　昭和62年８月３日～10月２日

整理作業期間　昭和62年10月２日～昭和63年３月31日

6　調査事務局　大泉村教育委員会

浅川義彦（教育長）・浅川哲男（課長）・斉藤功文（係長）・斉藤正一・原かつみ

調査担当　伊藤公明

7　発掘調査参加者（敬称略）

浅川晃治　浅川達子　浅川日出子　浅川美代　浅川三代子　浅川よし子　小池き代司

小池けさぢ　中島荘六　中島ねのえ　平井仁志

整理作業参加者（敬称略）

浅川晃治　浅川達子　浅川日出子　石井三恵子　丸山あや子

8　本書の執筆、編集は伊藤が行った。

9　発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御助言，御教示を賜わった。記して謝意を表したい。（敬称略　五十音順）

雨宮正樹　大島慎一　大森隆志　櫛原功一　近藤英夫　桜井真貴　佐野勝広　清水博

諏訪間順　諏訪間新　関根孝夫　塚田順正　新津健　米田明訓

10　本調査の出土品，諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。

11　本調査にあたり，山梨県教育庁文化課，峡地土地改良事務所，村土地改良区，村立泉小学校，長坂消防署，地権者の皆様に御指導，御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

12　本書使用地図は，国土地理院発行の１／50000 八ケ岳，韮崎，１／25000 谷戸，山梨県発行の県営圃場整備計画図１／1000である。

13　遺構平面図の方位は磁北による。ピットの深さは一をつけてcmで表わす。焼土，礫の被熱部分はドットのスクリーン・トーンで示す。またセクション図，エレベーション図の礫の輪廓の入っていないものは調査がその下まで及んでいないことを表し，基準線の下の数字はその標高を示している。

14　遺物実測図のうち斜線は破損部分を表し，ドットのスクリーン・トーンは被熱範囲を表わす。また，他の使用法で用いたものについてはその脇に明記してある。

目　　次

序……i
例　　言……ii
目　　次……iii
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　調査の方法と経過……4
Ⅳ　層　　序……5
Ⅴ　発見された遺構と遺物……6
　1　住居址とその遺物……7
　2　配石遺構とその遺物……35
　3　集石遺構とその遺物……45
　4　土壙とその遺物……46
　5　遺構外出土の遺物……66
Ⅵ　ま　と　め……67
引用・参考文献……69
図　　版

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和62年度県営圃場整備事業に伴い村内では大和田工区15万㎡が開発される予定となった。この地区内では地番3228―１・２を中心に方城第１遺跡が所在しており，村教育委員会では昭和61年12月に試掘調査を行いその範囲と遺跡の内容の把握に努めた。その結果縄文土器，土師器，石囲い炉状の遺構が検出され，該期の集落の埋没が予想された。この結果より，山梨県教育庁文化課，峡北土地改良事務所と協議を行い本調査を行うこととなった。調査対象面積は5000㎡で，調査主体は村教育委員会があたることとなった。

昭和62年１月５日，昭和62年度文化財関係国庫補助事業として県教育委員会に計画書を提出，昭和62年４月23日交付内定を受ける。同５月８日補助金交付申請書を提出する。また昭和62年６月１日に峡北土地改良事務所と大泉村との間で県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定を取り交し，埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

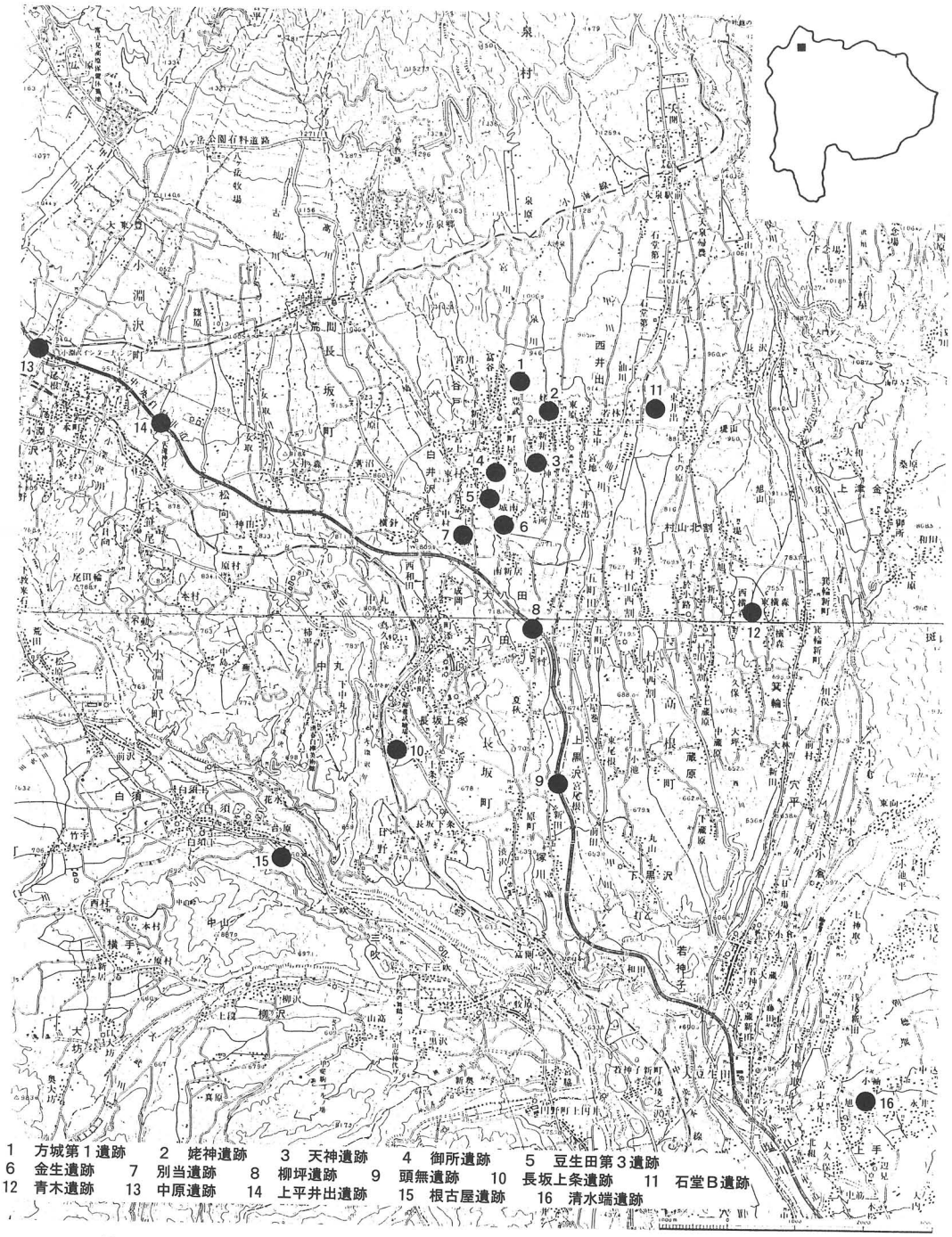
大泉村は北限で長野県と接し，その境界には標高2899ｍの赤岳を主峰とする八ケ岳連山が連なる。大泉村はこの八ケ岳から南に延びる斜面上のほぼ中心に位置する。この斜面は西を釜無川，東を塩川によって開析された独立した半島状に延びる台地として見ることも出きる。また微視的に見ると標高1000ｍ～1500ｍの地点に端を発する多数の湧水によって開析された南北に延びる多数の痩せ尾根が連続している。

今回調査された方城第１遺跡もこの様な尾根上に立地した遺跡で，標高は905ｍ～910ｍを測る。地形を細かく見ていくと集落は尾根の西側斜面を中心に展開しており，周辺の地形の観察から西側の谷部，東側の尾根筋によって割された単一の集落として想定できる。

近年大泉村を含めた北巨摩地域は中央自動車道関係の他，毎年圃場整備に伴う大規模開発が進んでいる。大泉村でも毎年15万～20万㎡に及ぶ面積で圃場整備が進められており煙滅の危機に瀕した遺跡が多い。またこれら一連の開発に伴いこの地域の発掘調査の件数も増え，次第にこの地域の歴史が明らかにされつつあるのも確かである。

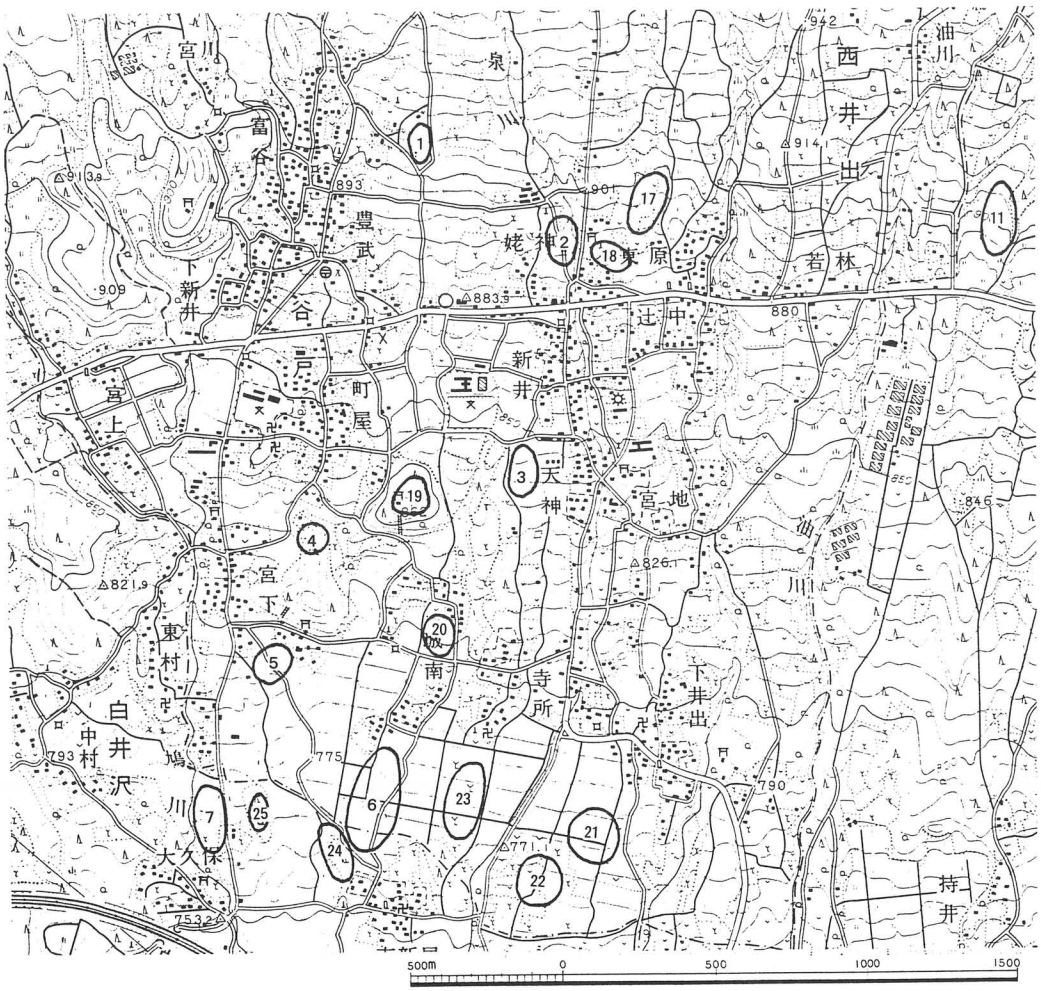
第１図は発掘調査により明らかにされた北巨摩地域の縄文時代の主な遺跡である。縄文時代前期後葉からこの地域には天神遺跡のような拠点的な大規模集落が営なまれている。これらは若干の断絶を経て中期後葉には遺跡数は最大となる。そして後晩期に至ると全国的にも類例の少ない石棺や配石を伴った大規模な集落，金生，青木，石堂B等の遺跡が出現するようになるのである。

第２図は大泉村近隣で発掘調査等が行われた遺跡の分布を表す。縄文時代後晩期を界いにこの地域の遺跡数は極端に減少し，再びピークを迎えるのは平安時代以降のことである。特に注



第１図　周辺の地形と遺跡の分布（１／100,000）

目されるのは緑釉、灰釉陶器を多量に出土した城下遺跡，寺所遺跡等である。また東姥神B遺跡では「安曇」の墨書のある土器が出土しており古代氏族を考える上で貴重な資料といえる。図中には記されていないが近隣では高根町下黒沢に官牧の一つである柏前牧に比定されている湯沢遺跡があり，これらの遺跡と密接な関係を持っていたと推定される。これら平安時代の遺



17　東原遺跡　18　東姥神B遺跡　19　谷戸城址　20　城下遺跡　21　原田遺跡
22　木ノ下・大坪遺跡　23　寺所遺跡　24　深草館址　25　別当十三塚

第２図　遺跡位置図（１／25,000）

跡は若干の衰退，隆盛を経て谷戸城，深草館址を支えるような中世の集落に継続されていく。中世の遺跡で調査された例を見ると金生遺跡B区の墓域を伴なった集落址、東姥神B遺跡の土壙墓，別当十三塚遺跡，図中には記していないが長坂町大八田には小和田館跡がある。これは三次に亘る調査によって多大な成果を上げている。また，調査はされていないが村内の前林には遺存状態の良い十三塚がある。

これらの遺跡は時間的にも空間的にも互いに交流を持ちながら今日の村の母胎となる集落を形成していくのである。

Ⅲ　調査の方法と経過

土地改良事務所から示された圃場整備地区内の切り盛り図をもとに，地表面から50 cm以上1m以下の盛り土箇所以外を調査の対象とする変則的な方法で調査地点が選定された。その面積は約4500㎡である。

調査の方法は重機による表土除去後，真北を基準とした10mグリッドを設定（北から南へA～G，東から西へ1～7）し鋤簾等により確認精査し各遺構の調査を進める方法を採った。また測量は主に平板を使用し，各遺構を1／20で測量していった。遺構の種類によっては，より精度を求められるものについては簡易遣り方を採用し調査を進めた。

調査は62年8月3日から着手し，重機により表土の除去を行った。これは作業道路の取り付けの都合上調査地点の東半部分から行われた。表土除去の結果，調査予定地の南側の圃場部分約2000㎡は田譜請時の削平がひどく遺構の残存しないことが確認され，この部分に排土して調査を進めた。

確認作業は表土除去と平行して行われた。遺物の出土は全体に少なく，作業は順調に進み，これの済んだ面から各遺構の調査に着手した。

8月27日，作業道路取り付け部分にかかるSB01，SB02，2号配石の各遺構の調査を完了，そのまま継続して残りの部分の調査を進めた。

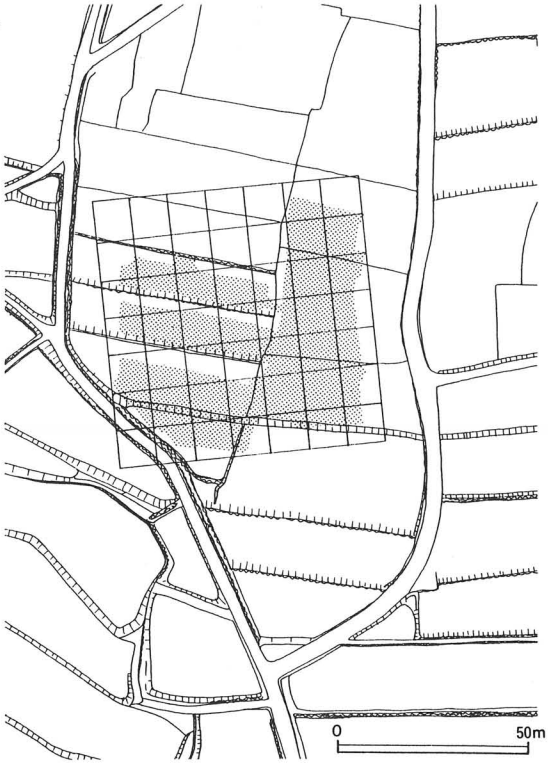
調査区東半の調査が順調に進む中，9月7日から再び重機を投入して調査区西半の表土除去を行い調査を進めた。

調査はほぼ順調に進み，10月2日全ての作業を終了し調査を終えた。

また，一部立合い調査を必要とする部分があり，これについては工事の日程に合わせて10月14日に実施した。この立合い調査の際住居址1軒とピット数基が確認されたが，調査の性格上住居址に限定して調査せざるをえなかった。

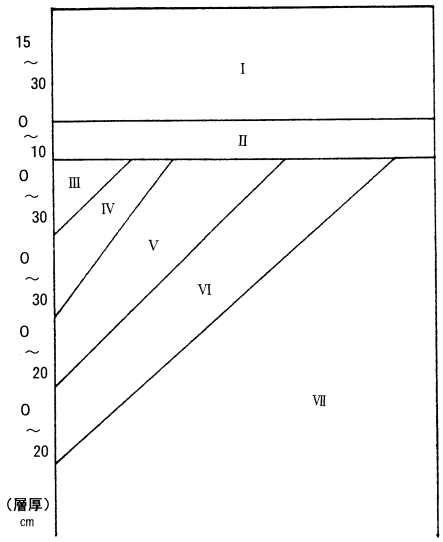
立合い調査分を含めた調査総面積は2660㎡に及んだ。

整理作業は発掘調査終了後すぐ着手し，63年3月31日全ての作業が終了した。



第3図　調査地点とグリット配置（1／2000）

Ⅳ 層　　序



第４図　土層模式図

今回調査された方城第１遺跡は南北に延びる痩せ尾根の西側の斜面に立地しており，現況も水田と畑になっているため，土層は地点により必ずしも一致しなかった。斜面上部では表土の下がハードローム層まで削平されていたり，斜面南西部では表土下の黒褐色土層が20 cm～30 cmを越す層厚を見せている。ここではこの遺跡で見られた土層を模式的に説明していく。

Ⅰ層―表土・耕作土層　田圃部分では暗灰褐色，畑部分では黒褐色を呈する。

Ⅱ層―黄褐色土層　田圃の止水層（苦土）に相当する。ローム粒子・小砂利を多く含み，しまりは極めて強い。

Ⅲ層―黒色土層　旧耕作土層に相当する。しまり，粘性共に弱い。直経３mm前後のスコリアを含む。

Ⅳ層―黒褐色土層　炭化物粒子を微量含む。粘性は普通で，しまりはやや弱い。直経５mm弱のスコリアを含む。

Ⅴ層―暗褐色土層　ローム粒子を多く含む。粘性やや強く，しまりは普通である。直経５mm前後のスコリアを含む。

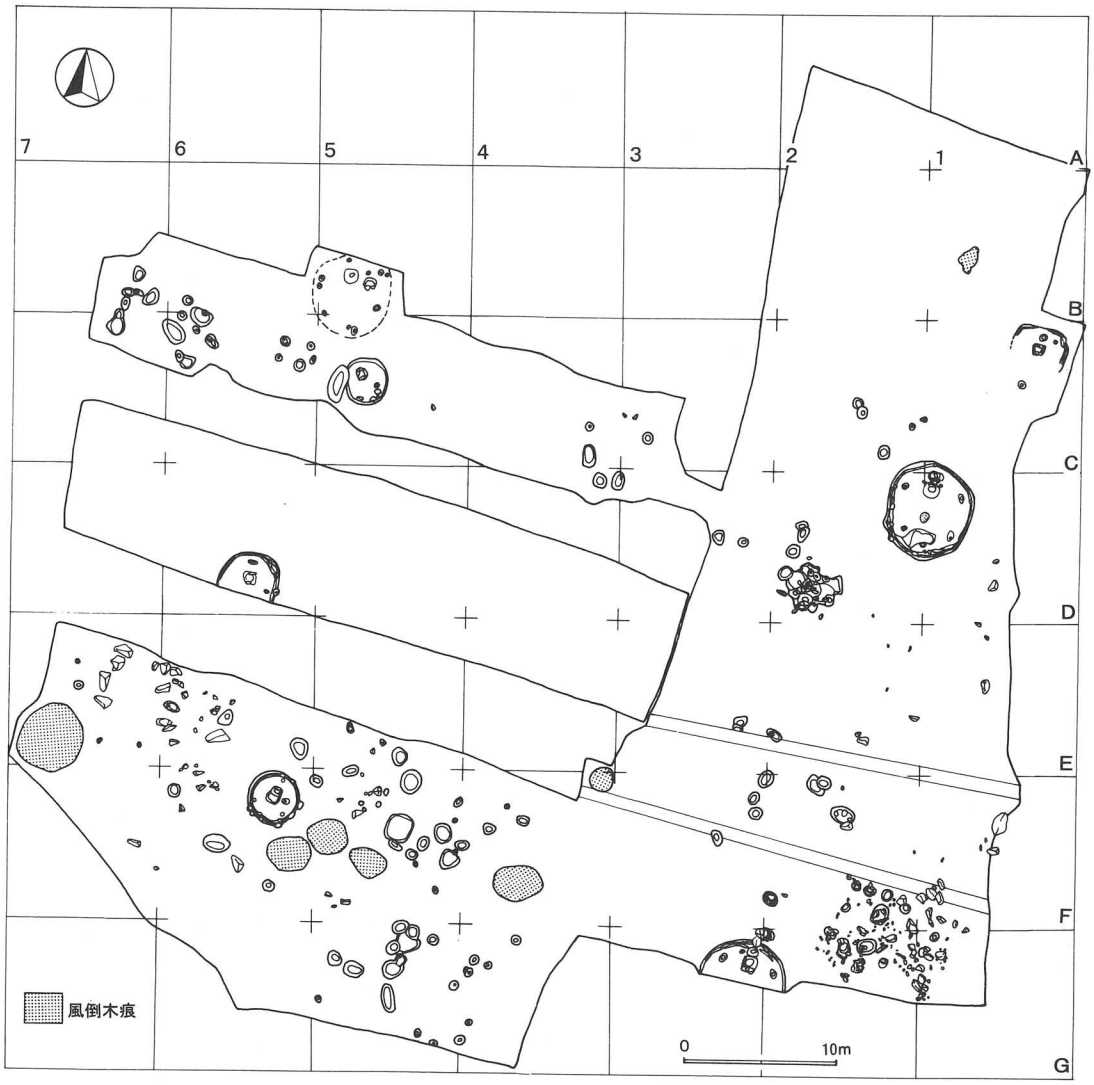
Ⅵ層―暗黄褐色土層　ソフトローム層に相当するしまりはやや強く，粘性も強い。

Ⅶ層―暗黄褐色土層　ハードローム層に相当する。しまりは強く，粘性やや強い。直経10 mm前後のスコリアをよく含む。

以上が本遺跡で確認された層序である。この内Ⅰ層からⅤ層までが遺物包層となる。遺構プランはⅤ層中位以下で確認され，深いものはⅦ層のハードローム層まで切り込んでいる。遺構の掘り込み面は，地形的な特性もあり地点によって異っていたと思われるが，遺物の出土状況を考えるとⅤ層の中位よりも高い位置から掘り込まれていたものと考えられる。

V　発見された遺構と遺物

方城第１遺跡の調査で発見された遺構は縄文時代中期住居址７軒，配石遺構３ヶ所，集石遺構３基，土壙 106基である。遺物は縄文土器（中期後葉～後期前葉），石器（打製石斧，磨製石斧，凹石，磨石，石皿，石匙，投弾状石器，石棒，石鏃，石錘），石核，石製装飾品，中・近世陶器片であり，その量は整理箱に20箱程度である。



第５図　全　測　図（１／500）

1　住居址とその遺物

ここでは調査時の番号順に記述を進める。

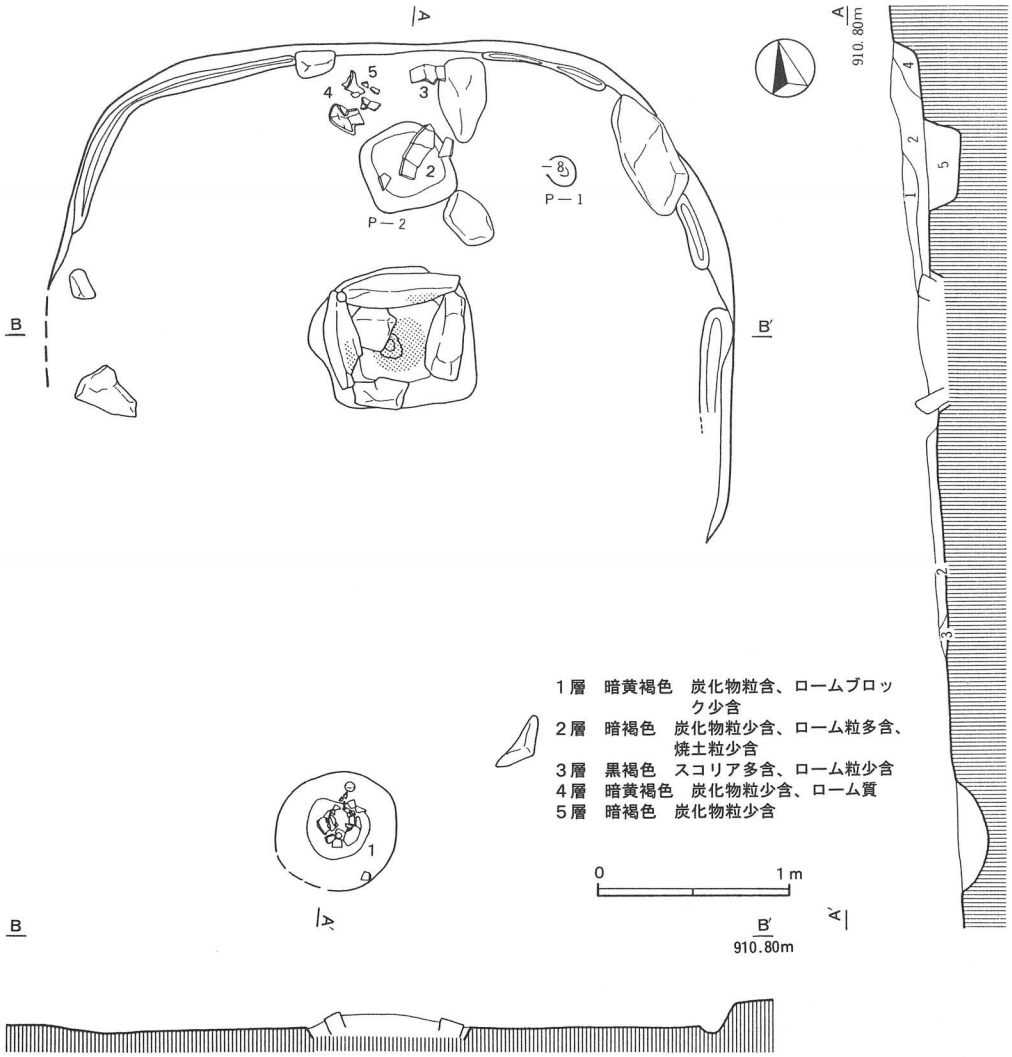
SB01（第６～８図）

C－１区に位置し，南西９ｍにSB02が存在する。重機による表土除去の際，表土直下から直径３ｍ程の円形の落ち込みを確認、精査の結果，落ち込み中央に偏平な石を検出，焼土の分布等から住居址の炉址と認定し，この落ち込みをSB01として調査を開始した。

形態　後世の削平がひどく住居址南半が流出しており不明な点が多いが，埋甕を本址帰属として認定すると炉址の位置関係から柄境形のプランとなる可能性が大きい。　**規模**　現存長で長軸4.47m，短軸3.61mを測る。壁高は北側で12 cmを測るだけである。　**主軸**　N－23°－W

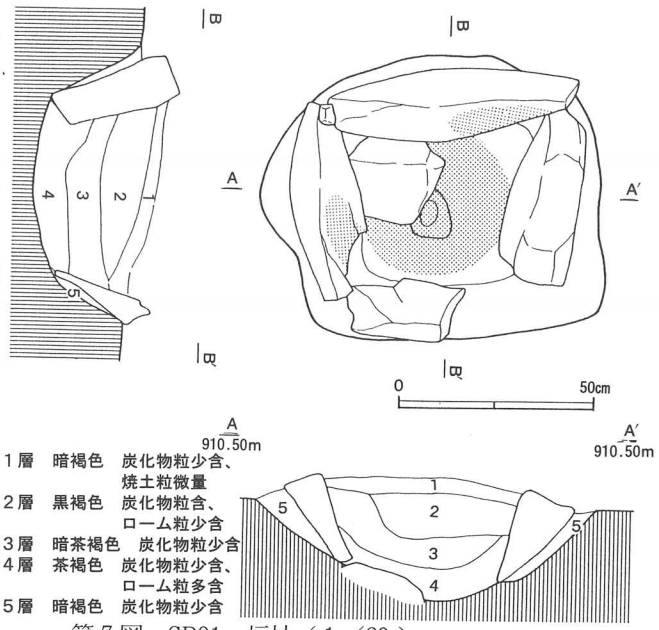
床面　ハードローム中に構築される。斜面に沿って北から南に傾斜する。凹凸が多く軟弱。

周溝　住居壁に沿って断続的に巡る。住居南半は流出しており不明。　**炉**　住居中心軸上北



第６図　SB01（１／40）

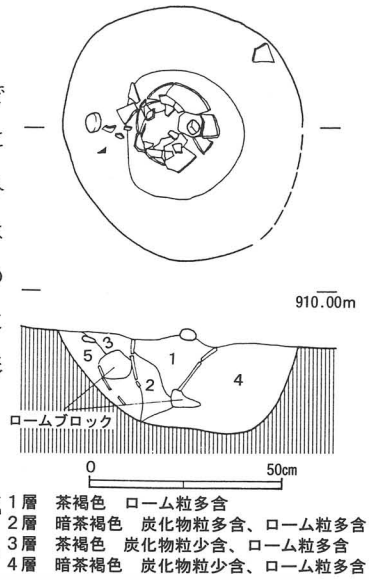
寄りにある。規模は80 cm×70 cm，深さは25 cmを測る方形の石囲い炉である。炉址底部に浅い小ピットが穿たれている。　**ピット**　2本検出されている。形態，規模，配置から共に主柱穴とは考え難い。　**埋甕**　住居址中心軸より若干西側に偏在している。正位に設置されており，胴下半～底部は破片が散乱していた。また，このピット内からは石鏃（20）が出土している。　**遺物出土状況**　住居址北東部から比較的まとまって出土している。何れも使用状態を示すものではなく，住居廃絶後に投棄されたものである。



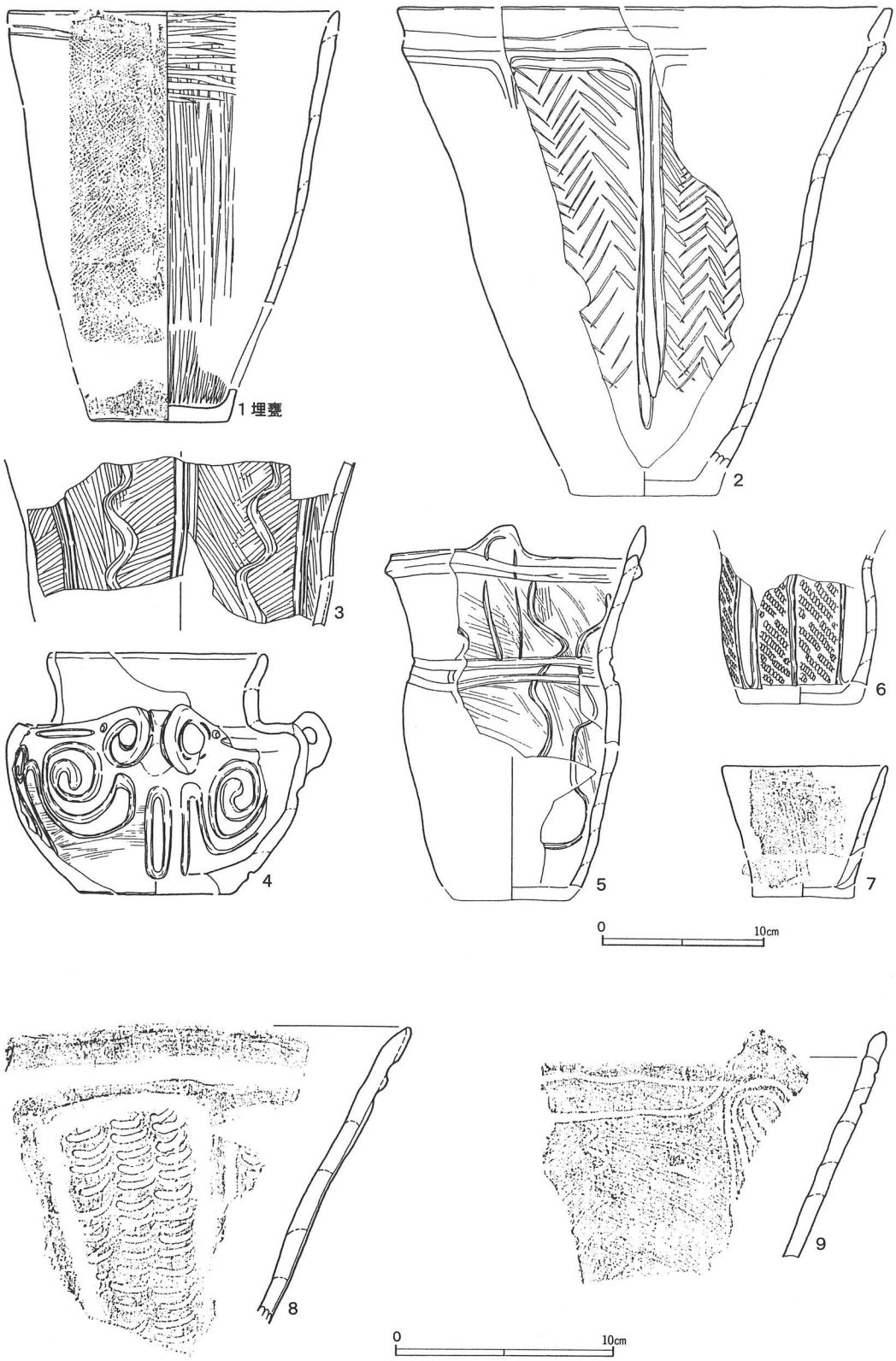
第7図　SB01　炉址（1／20）

遺物（第9～10図）

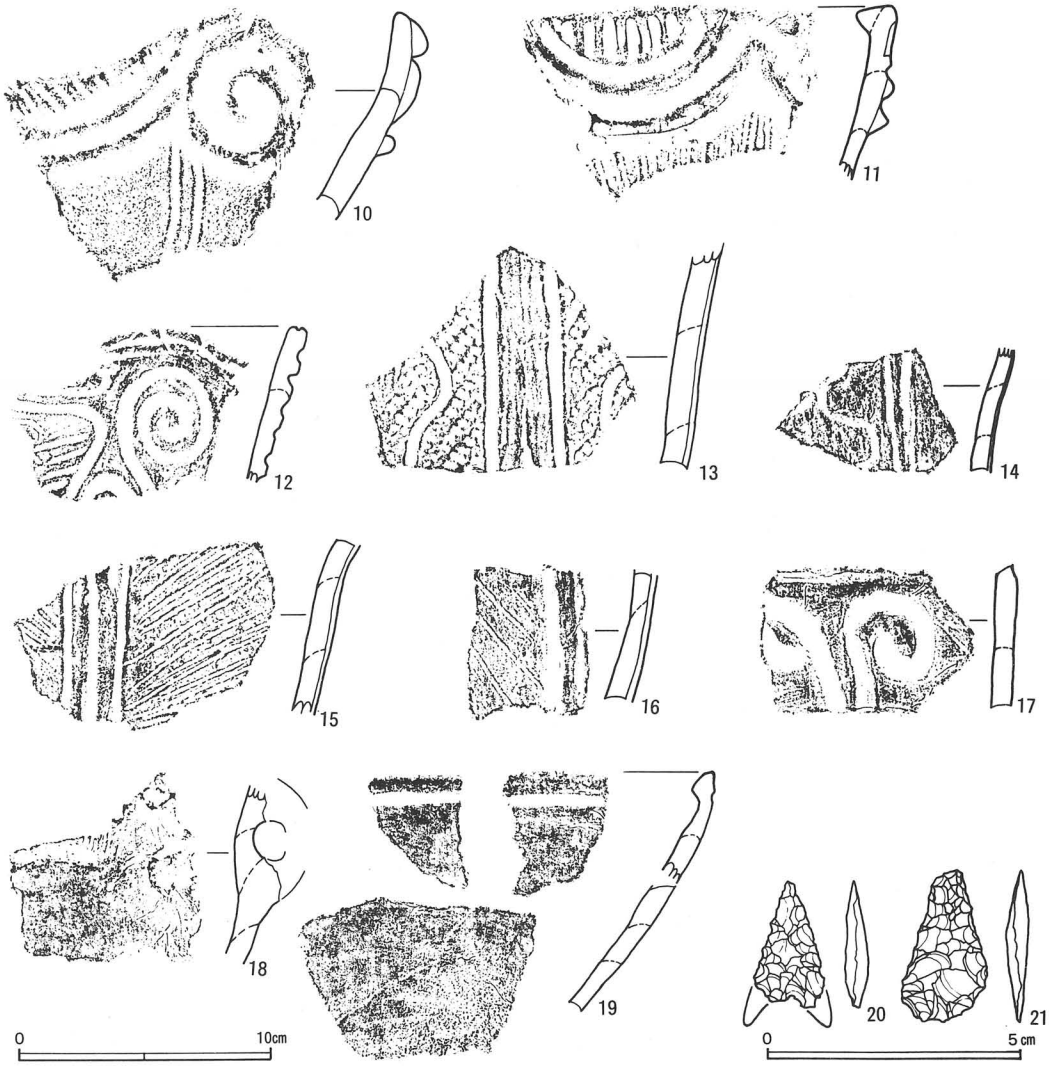
1～3は中型の深鉢形土器（以下深鉢）である。1は埋甕で外面は細かい斜格子の条線が施される。口線直下にユビナデによる沈線を巡らす。内面はヘラミガキを丁寧に施す。また器外面には煮沸により炭化物の付着（煮こぼれ）が見られる。2は外面にハの字文が施される大型の破片である。3は縦の羽状の条線を平行沈線（棒状工具、2本1単位）の中に充塡した後にユビナデによる蛇行懸垂文を施したものである。4は広口壷形土器（以下広口壷）の大型破片である。把手は2単位であろう。胴部に一部横位に施された条線（一次調整痕）が残る。5，6は小型の深鉢である。5は頸部に2条の沈線が巡る。二次焼成のため器形に歪みを生じており，底径は図より若干小さくなるであろう。6の地文は単節RLで，蛇行懸垂文は退化しており部分的に直線的になる。7はコップ形の小型土器である。外面は斜行する細かい条線を沈線（ささら状の工具）で区割したものである。推定口径10.2 cmを測る。8は隆帯で区割された中に棒状工具による弧状文を充塡したものである。9は波状口線の見られる中型の深鉢である。地文は羽状の斜行細条線である。10は波状口線の深鉢である。波状部には過巻つなぎ文が見られる。11は口線部に粘土紐を弧状に2本貼りつけたものである。地文は縦位の粗い条線である。10，11は混入であろう。13は地文単節LR施文後，縦位沈線，蛇行懸垂文を施したものである。



第8図　SB01　埋甕(1／20)



第９図　SB01　出土遺物(1)（１～７は１／４、８・９は１／３）



第10図　SB01　出土遺物(2)（10～19は１／３、20・21は２／３）

18は鉢形土器（以下鉢）である。胴中位には縦位の条線が見られる。また胴下半及び器内面は雑にヘラミガキがされている。19は浅鉢形土器（以下浅鉢）である。口縁下に沈線が１条巡る。器面は内外面ともヘラミガキされるが，被熱のため器面が荒れている。20，21は石鏃である。共に黒曜石製である。重量は20が 1.1ｇ，21が 1.4ｇを計る。

SB02（第11，12図）

C，D－1，2区に位置し，北東9mにSB01，南西27mにSB03が存在する。

重機による表土除去に際して直径5m程の落ち込みを検出。遺物が落ち込み上面から多量に出土した。ベルトを設定して調査を進めると南側から多量の土器が出土，またベルト中央部床で地山の被熱赤変部を検出，地床炉であることを確認しSB02の名称をつけ以下調査を進めた。

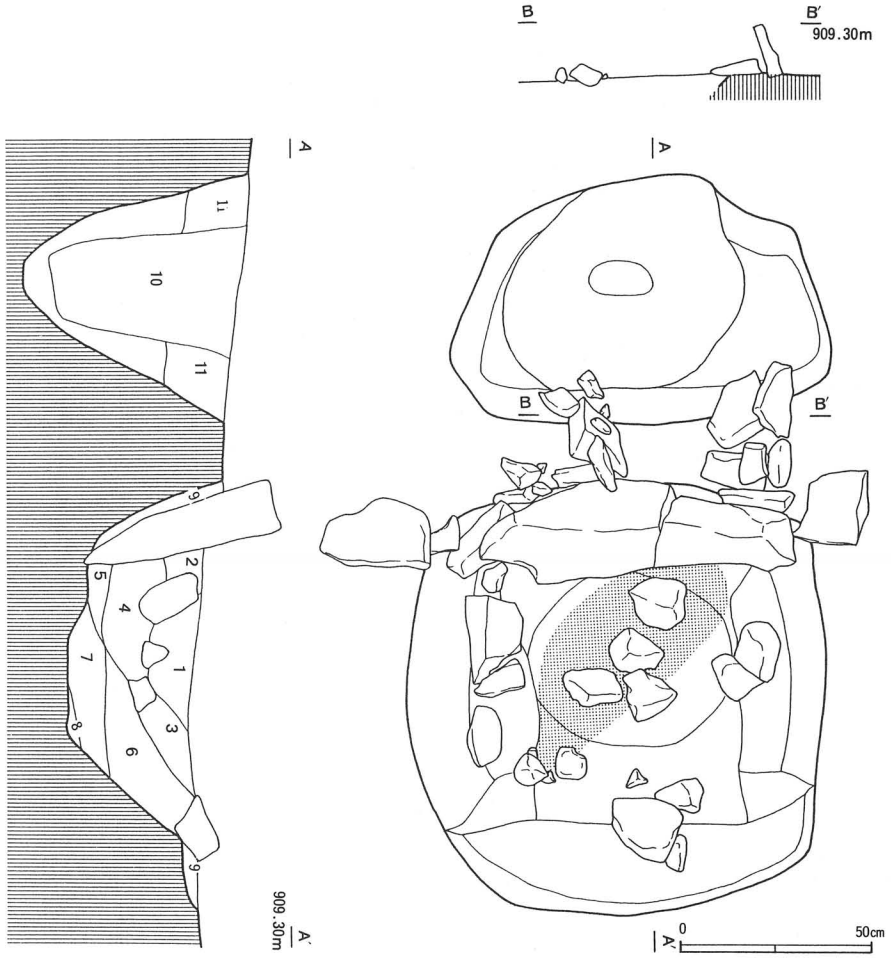
形態　六角形に近い楕円形のプラン。　**規模**　長軸6.66m，短軸5.80mを測る。壁高は26～29cmを測る。　**主軸**　N－16°－E。　**床面**　ハードローム中に構築される。住居南側の埋甕周辺で軟弱になるが，地は堅緻である。特に炉の北側は非常に堅緻である。斜面に沿って北から南に緩やかに傾斜する。　**周溝**　ほぼ全周する。住居址西側～南半で周溝が交錯する形で改修されている。新しい周溝中に8本，古い周溝中に6本の小ピットが穿たれていた。　**炉**　住居北側に偏して110cm×115cm，深さ33cmを測る方形の石囲い炉が検出された。炉石は北側の石以外全て抜き取られている。また石抜き取り後，北側に残された石を利用して新炉が構築される。これは掘り込みのやや西側に偏し，拳大～小児頭大の礫を方形に配列した石囲い炉で，その規模は55cm×50cmを測る。また，住居中央やや南寄りに地床炉が検出されている。規模は75cm×70cmを測り，掘り込みは存在しない。　**ピット**　5本検出されている。主柱穴はP－1～4である。プランは長軸50～70cmを測る楕円形の掘り込みで，深さは50cm前後を測る。覆土は根押えに小砂利を多量に含んだしまりの特に強い土層が見られた他，中央部は炭化物を含んだ黒褐色の土層が見られた。　**埋甕**　住居南側に1個検出されている。正位で口縁部と胴下半は打ち欠かれている。　**その他の施設**　炉の北側の石を利用して石組遺構が作られている。石組の礫の大きさはバラバラで3～5cmのものから小児頭大のものまで含まれていた。また石器の利用は1点もなく，自然礫に赤色の顔料を塗布したものが1点出土している。またこの石組は炉址北側のピット（P－5）中にまで延び，石組が原形を保っていることを考えると，このピット中には木質の柱状のものが埋設されていたと思われる。ただしこのピットは形態・規模共に他の主柱穴とは異なり別の機能を有したものである蓋然性が大きい。また，このピットの中から黒曜石の剥片が数点出土しているが，土層中に混入していたもので，埋納とは考えられない。他に置物は出土していない。　**遺物出土状況**　住居南半からまとまって出土しているが，これらはいずれも住居廃絶後の二次堆積中のものである。また，使用状態を示した資料として炉周辺出土の3，21が想定できよう。

遺物（第13～18図）

1，2は大型の深鉢である。多数の破片となって出土している。共に頸部にX字状の把手を4単位もつ。1は頸部破断面を磨られており，破損後も継続して使用されていたであろう。施文の順位は概ね隆帯貼り付け→ユビナデによる沈線→条線充塡である。また，1，2共煮沸の痕跡が見られる。3～5・17・18は小型の深鉢である。3は口径15.5cm，残存高15.2cmを測る。底部が剥落している他ほぼ完存。炉の中央やや西寄り（新炉のほぼ中央）から正位で出土している。

1層　茶褐色　ローム粒子少含、ロームブロック少含
2層　茶褐色　炭化物粒少含、ローム粒少含
3層　暗褐色　炭化物粒含、ローム粒含
4層　暗茶褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
5層　暗褐色　ローム粒含、ロームブロック含
6層　暗茶褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
7層　暗褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
8層　暗褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
9層　黒褐色　炭化物粒多含、ローム粒少含
10層　暗褐色　炭化物粒少含、ローム粒少含
11層　黒褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
12層　暗茶褐色　焼土粒子含、炭化物粒少含
13層　暗褐色　ローム粒多含、ロームブロック含

第11図　SB02（1／40）

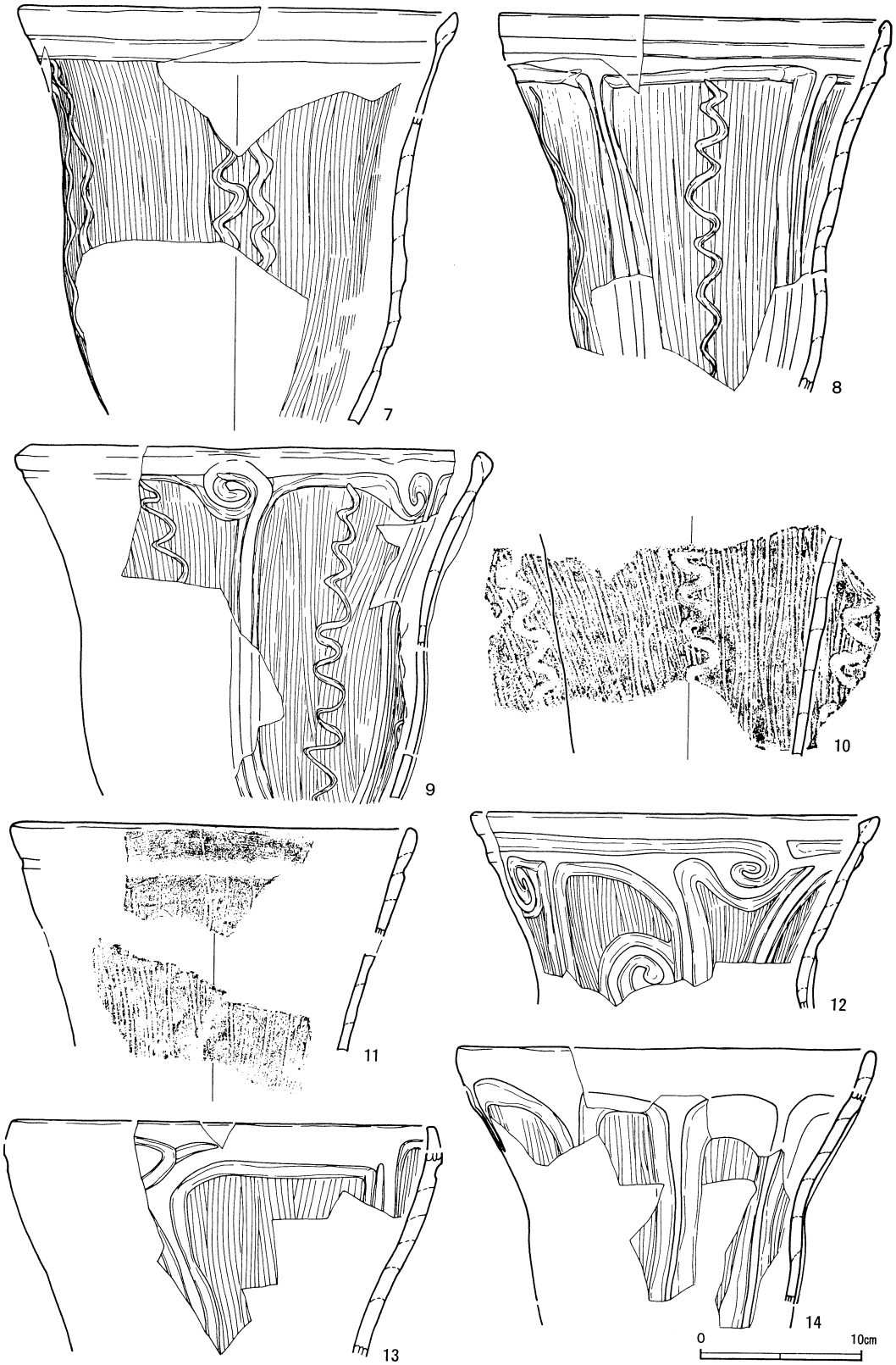


1層　黒褐色　焼土粒少含、炭化物粒含、ローム粒少含
2層　暗茶褐色　炭化物少含、ローム粒少含
3層　暗茶褐色　焼土粒少含、炭化物粒少含
4層　暗茶褐色　炭化物粒含、ローム粒少含
5層　赤褐色　焼土層、炭化物粒少含
6層　暗茶褐色　焼土粒少含、炭化物粒少含
7層　暗褐色　炭化物粒少含
8層　暗黄褐色　ローム崩落土層
9層　暗褐色　焼土粒少含、炭化物粒少含
10層　黒褐色　焼土粒少含、炭化物粒少含、ローム粒含
11層　暗褐色　ローム粒含、小石多含
12層　淡黄褐色　炭化物粒含、しまり極めて強

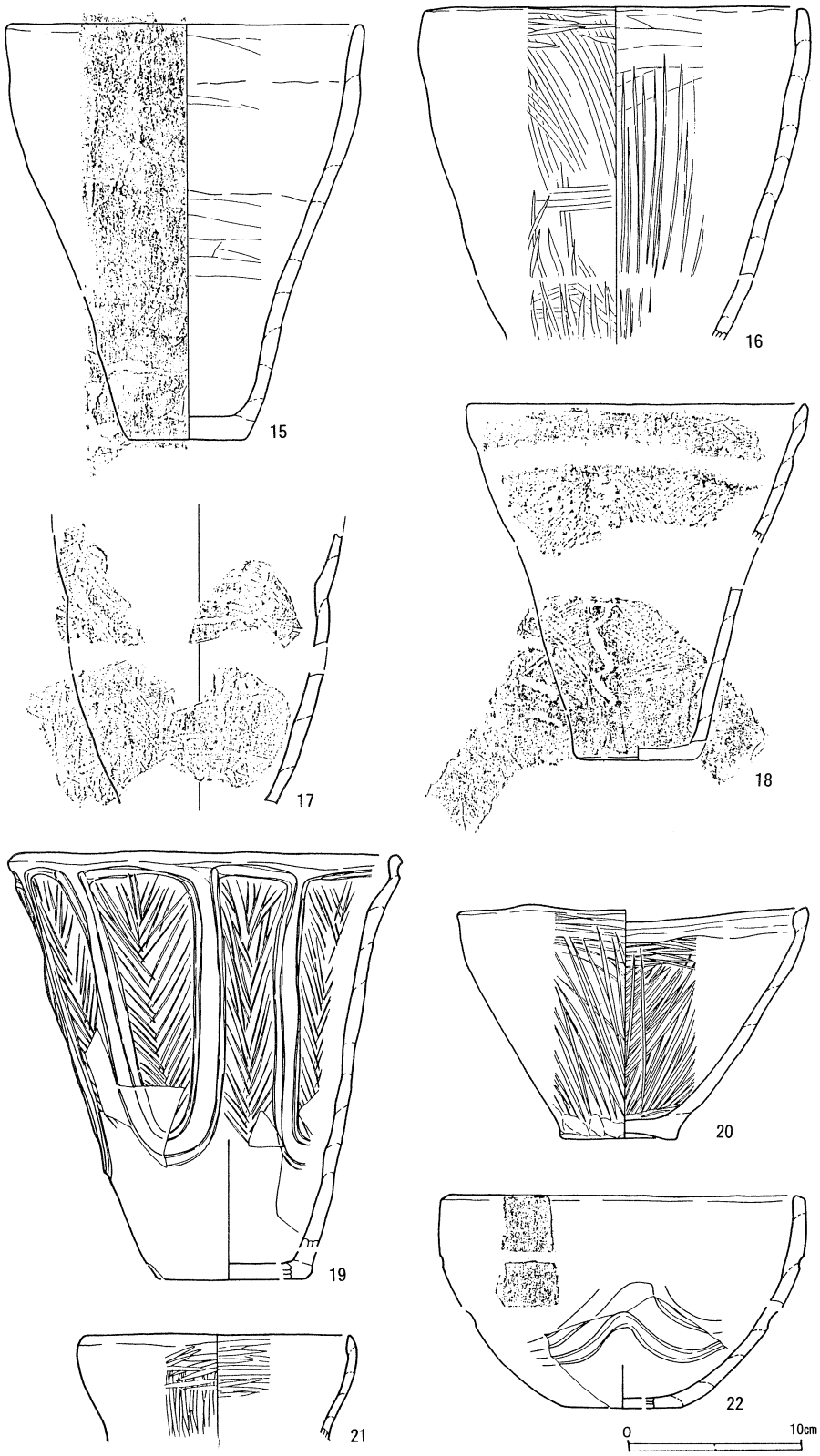
第12図　SB02　炉（1／20）

隆帯は5単位で，懸垂文の波長は短い。内面はヘラミガキが丁寧に施されている。5の降帯は口縁部のものがやや幅広で明らかに粘土紐が貼り付けられているのに対し，胴部以下では幅が狭く，断面観察でも明確な貼り付けが見られず、ユビナデにより降帯をつまみ出しているものと思われる。6は口縁部と胴部下半を打ち欠かれた埋甕である。頸部径が27.4 cmを測るやや大型の深鉢である。口縁部は複合口縁になるもので，口頸部無文帯となる土器であろう。また外面は強く被熱し赤変している部分もある。煮こぼれによる炭化物の附着も観察される。7～16，18は中型の深鉢である。7は口縁部3／4，胴部2／5を欠損する。胴部は2本の蛇行懸垂文によって区割される（5単位）。 8は口縁1／2，胴部1／5を欠損する。胴部は隆帯で区割

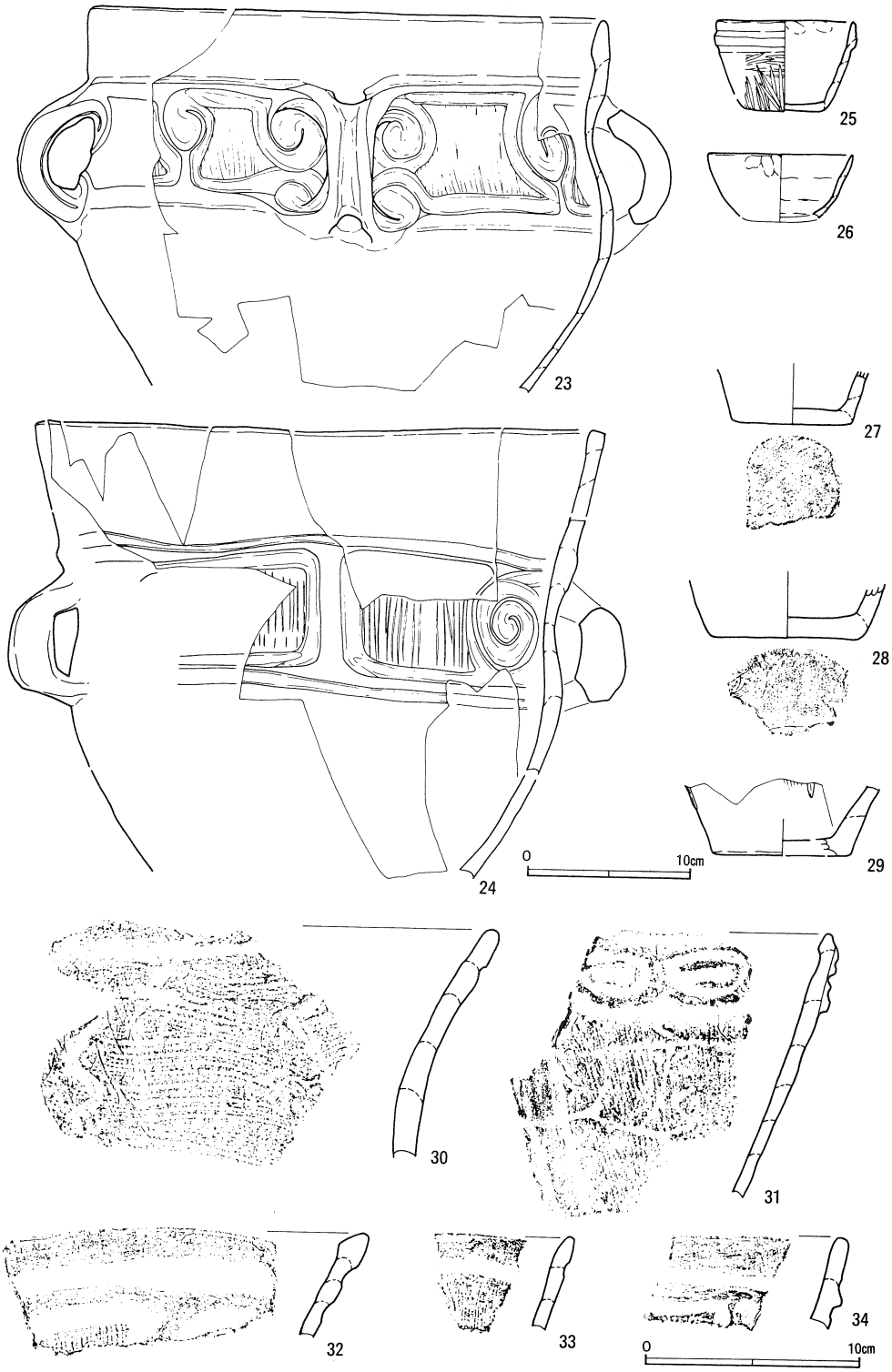
第13図　SB02　出土遺物(1)（１・２は１／６、３～６は１／４）



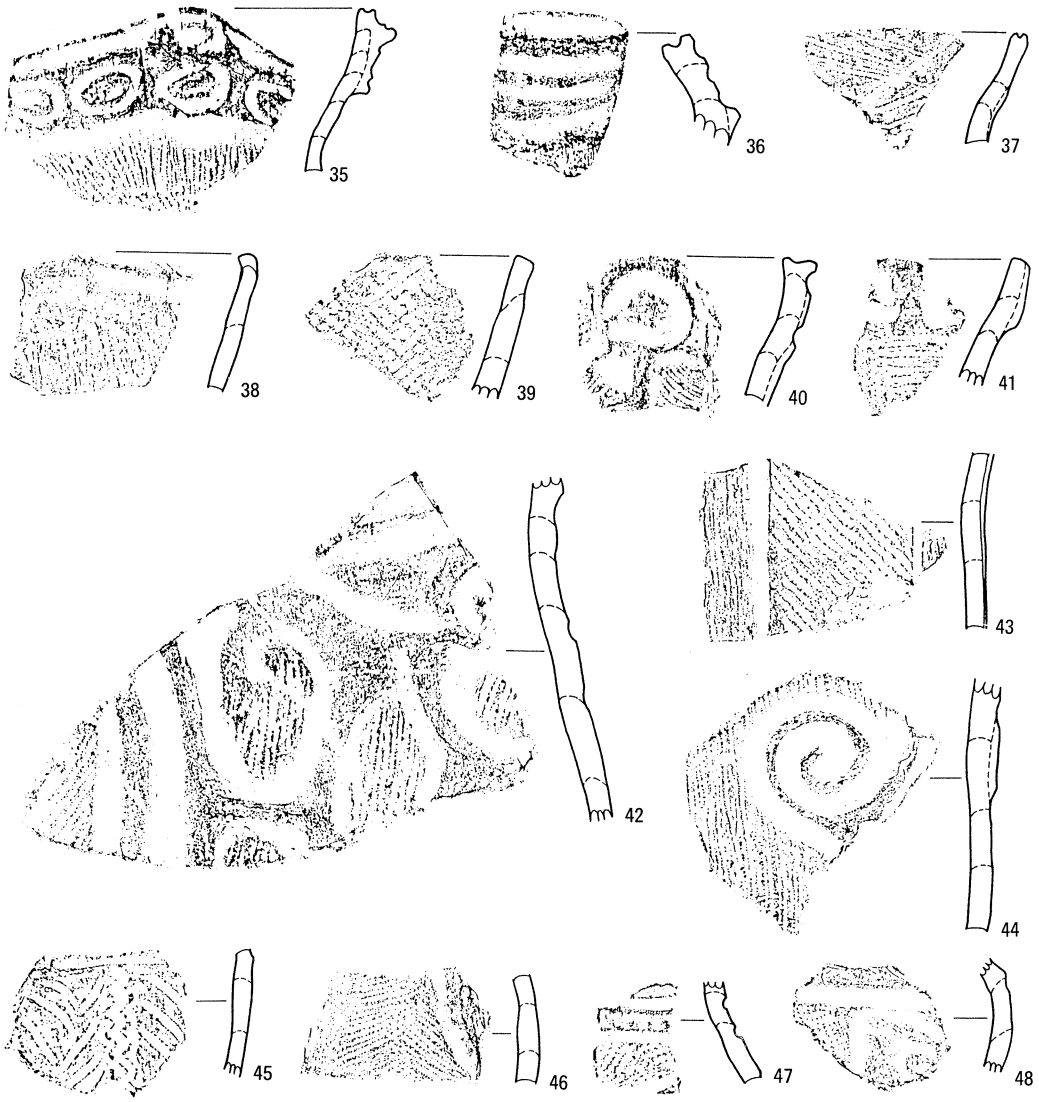
第14図　SB02　出土遺物(2)（１／４）



第15図　SB02　出土遺物(3)（1／4）



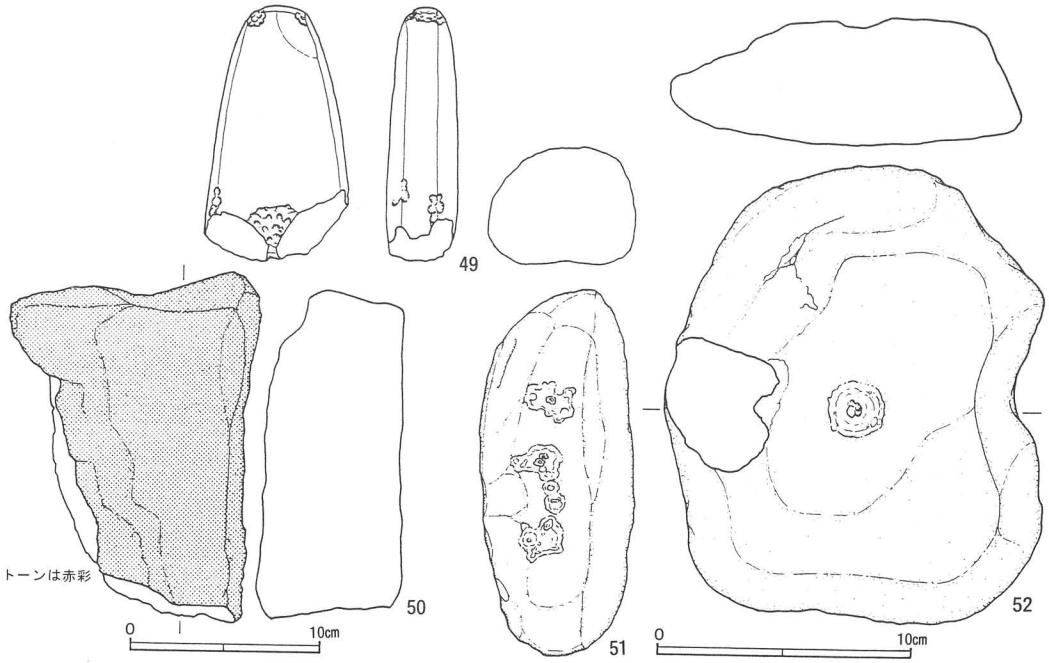
第16図　SB02　出土遺物(4)（23～29は１／４、30～34は１／３）



第17図　SB02　出土遺物(5)（１／３）

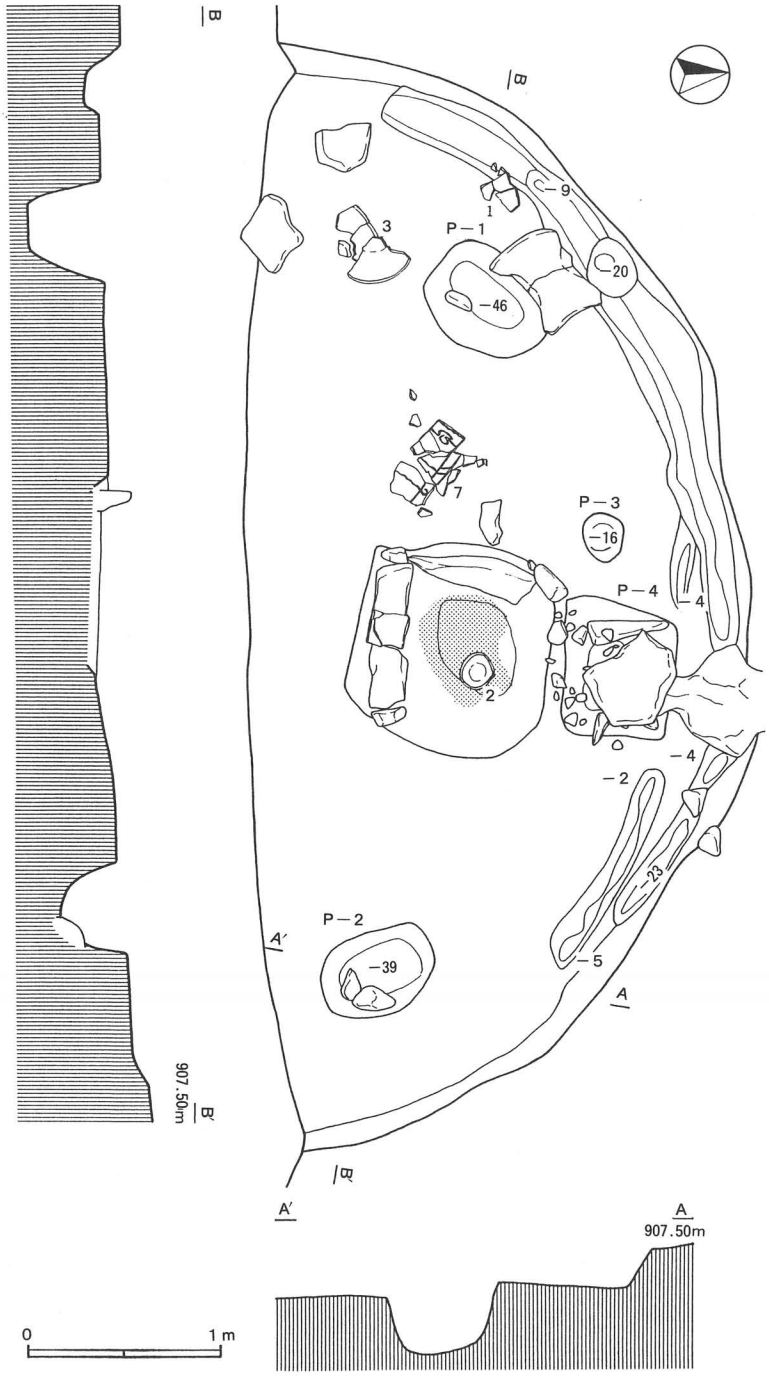
0　10cm

された中に蛇行懸垂文が見られる（５単位）。 15は口縁～胴上半を１／２欠損する。胴下半以外は単節LRを施文するが施文後にユビナデにより撫で消されている。19は胴部１／５と底部をほとんど欠損する。隆帯によるU字状の区割が５単位見られる。地文には２本１単位の条線が施されている。他は大型の破片である。11，14には縦の区割が見られない。20は広口壺の口縁部１／８の破片である。内外面共ヘラミガキされる。21，22は浅鉢である。21は炉の東側床直から横転して出土している。胴部を若干欠損する他は完存。22は破片資料である。胴部に山形沈線が見られる。23，24は鉢の大型破片である。把手は共に２単位と思われる。23は胴下半が被熱している。内面胴下半に炭化物の附着が若干見られる。25，26は小型の土器である。25は口縁部～胴部を２／３欠損する。胴部下半は雑にヘラミガキされている。26は破片資料であ



第18図　SB02　出土遺物(6)（49・51・52は１／３、50は１／４）

る。炉址上面から出土している。30は蛇行懸垂文のみで区割する中型の深鉢である。地文の条線は横位に施されている。31は複合口縁の小型の深鉢である。35も複合口縁の小型の深鉢であるが，器形はいわゆるキャリパー形となるものである。40，41は同一個体である。43は加曽利E系の土器で地文は単節RLである。49は磨製石斧である。刃部を欠損する。 245ｇを計る。52は凹石である。1945ｇを計る。住居南側から多量の土器と共に検出された。50，51は炉北側石組遺構中の礫である。共に使用痕は認められなかった。また，50は破断面以外赤色の顔料が塗布されたものである。



第19図　SB03（1／40）

G－2，3区に位置する。西29mにSB05，北東27mにSB02が存在する。

表土除去後の確認作業中にG－2，3区の調査区境界付近で半月形の落ち込みを検出。ベルトを設定して調査を進めた。中央部から方形の落ち込みと偏平な石を検出，焼土の分布と合わせて炉址と認定。SB03として調査を進めた。

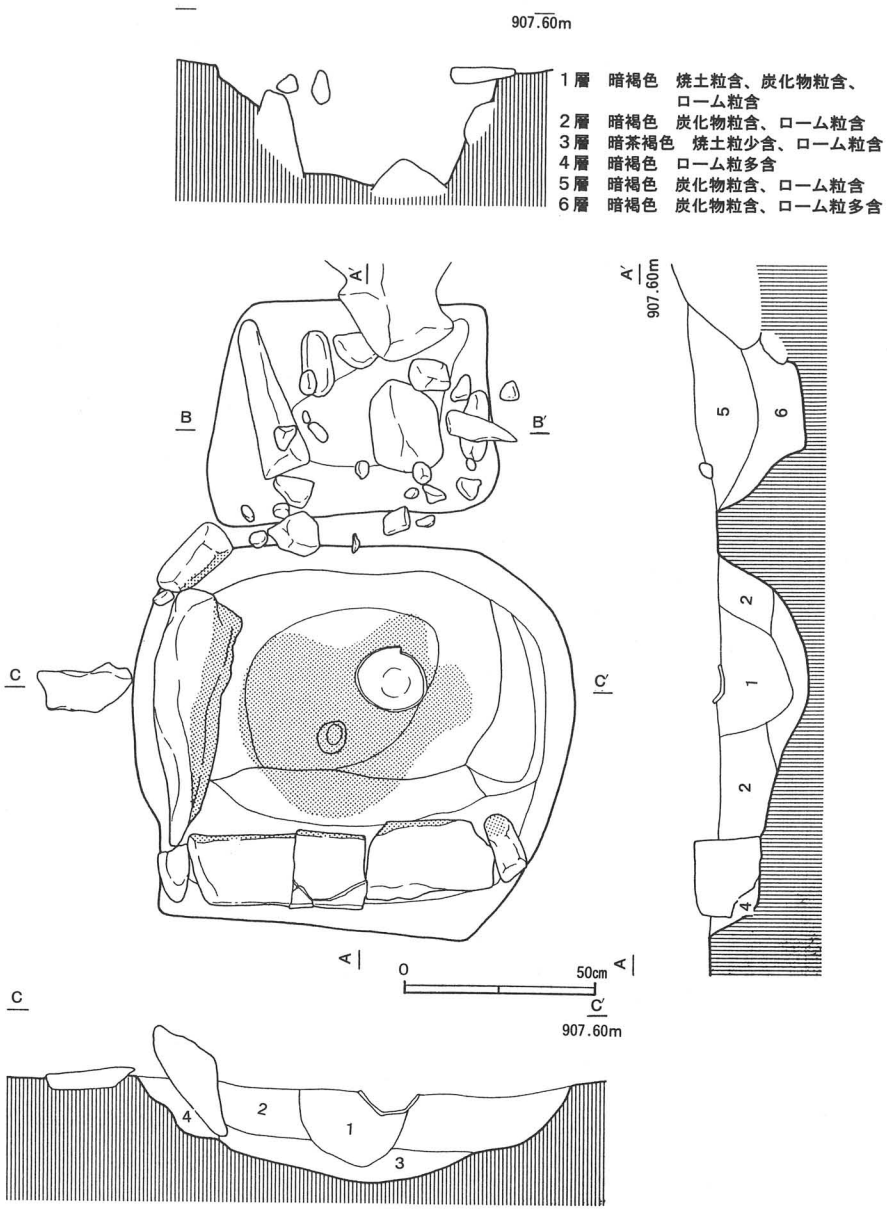
形態　田普請時の段切りにより住居址南半を削平されているが，SB02同様楕円形プランを呈するものであろう。　**規模**　現存部で長軸5.78m短軸2.62mを測る。壁高は一番残りの良い北側でも20cmを測るだけである。

主軸　N－23°－W。

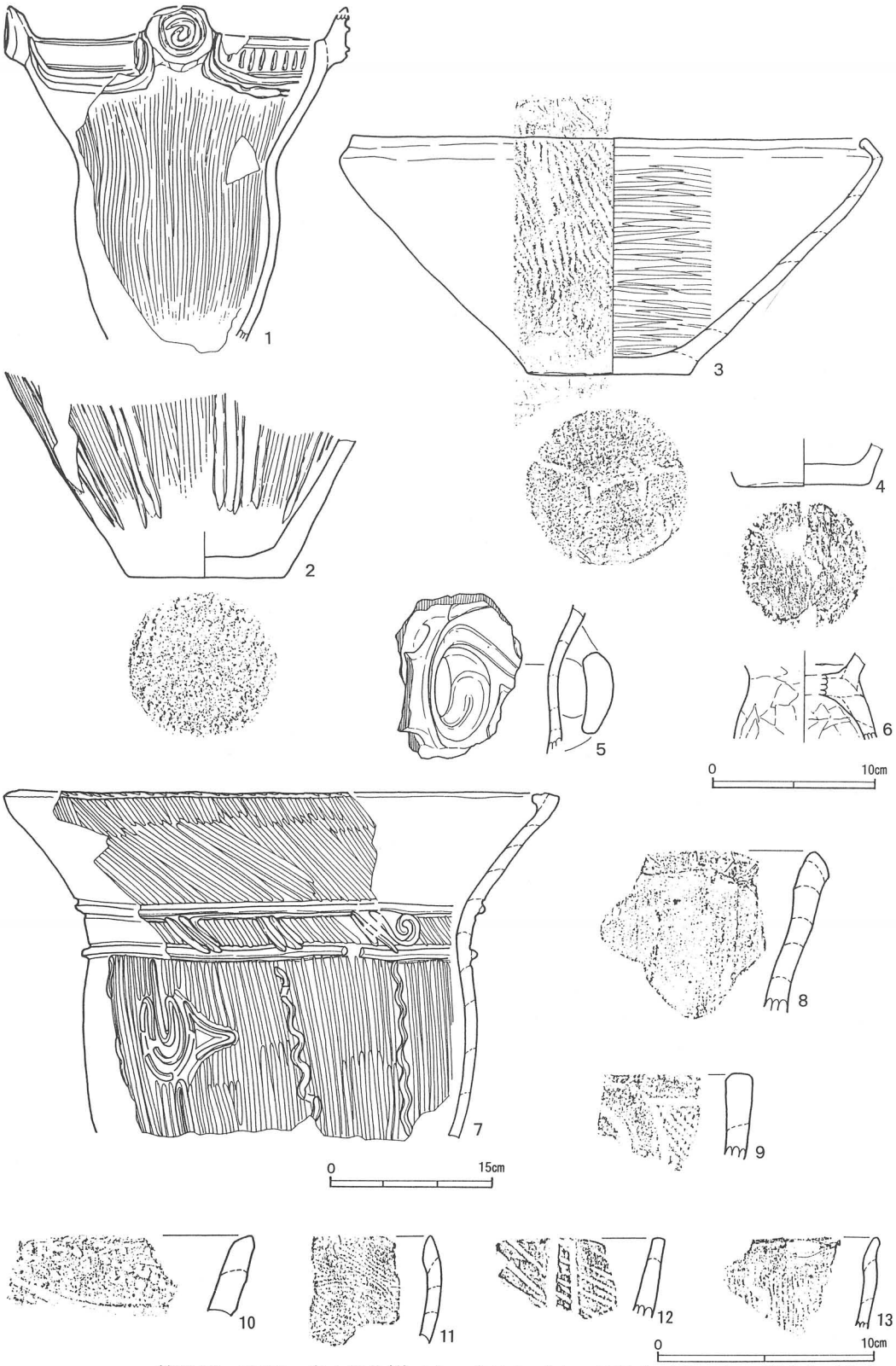
覆土　住居址壁付近の三角堆積以外はプライマリーな水平堆積が見られただけである。混入物はローム粒子と炭化物，炉址周辺の焼土粒子が見られる程度である。暗褐色を呈し全体にしまりが弱い。　**床面**　ハードローム中に構築されている。全体に軟弱で，特に住居址東半では撹乱のため凹凸が多かった。　**周溝**　住居址西側～北側で検出された。部分的ではあるが北側では2本確認されており，改修されたことが窺える。周溝

中から１本小ピットが検出されている。　**炉**　住居北側に偏して 102 cm×115 cm，深さ25 cmを測る方形の石囲い炉が検出された。炉石は南側と西側の石が残っており，他は抜き取られている。炉石が残っている部分のコーナーからは拳大の礫が出土している。また底部には小ピットが１本穿たれている。

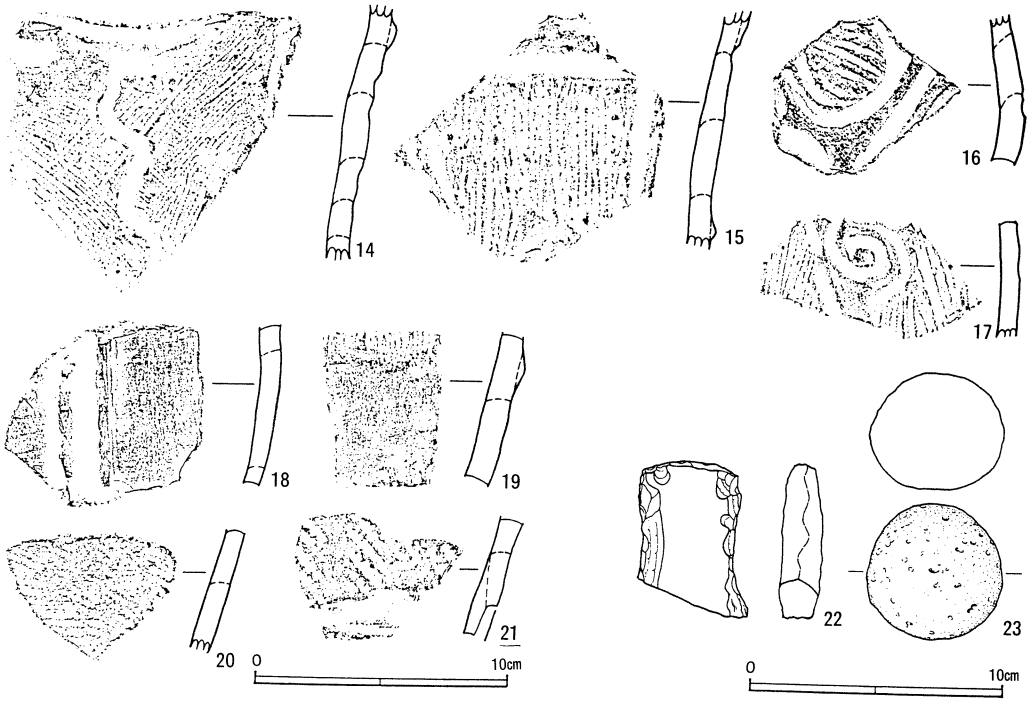
ピット　４本検出されている。主柱穴はＰ－１，２で，共に規模は約65 cm×50 cm，深さは30～40 cmを測る。覆土は炭化物を少量含んだ暗褐色土であり，プライマリーな自然堆積を示していた。　**埋甕**　不明。　**その他の施設**　炉の北側に近接して70 cm×55 cmの方形のピットが検出されている（Ｐ－４）。これに伴って礫が多数出土している。これらの礫の大きさはバラバラで数cmから小児頭大のものまである。中には被熱した礫も含まれていた。礫はこのピットの上面から覆土上層にかけて出土している。ピットの底部は地山の礫のため不整形になっている。また覆土はレンズ状の自然堆積を示している。ここで注目されるのがSB02の炉の北側の石組遺構とピット（Ｐ－５）との類似性である。仮りにこの住居の炉の北側にもSB02同様の石組遺構があったとすると，柱状のものの埋設を想定して，これが抜き取られることによっ



SB03　炉址（１／20）



第21図　SB03　出土遺物(1)（1～6は1／4、7は1／6、8～13は1／3）



第22図　SB03　出土遺物(2)（1／3　）

てレンズ状の覆土の堆積と礫の散乱が結果として見られたことも考えられる。またこの住居では主柱穴の抜き取りが見られたのに対し，SB02では主柱穴も覆土の観察から根押さえの土層がはっきり残っており，住居廃絶に際しても柱が抜き取られなかったと考えられる。住居の規模，形態，これらの施設の類似性を考えるとSB03→SB02の集落内での移動の可能性もあるのではなかろうか。　**遺物出土状況**　住居西半から比較的まとまって出土しているが確実に使用状態を示すものはなかった。1，3，7，は床面から5～15cm浮いて出土した。2は炉址上面からの出土であるが，破片が散乱しており必ずしも使用状態を示しているとは考えらない。他は覆土中の出土である。また作業の台石であろうか，偏平な礫が出土している。

遺物（第21，22図）

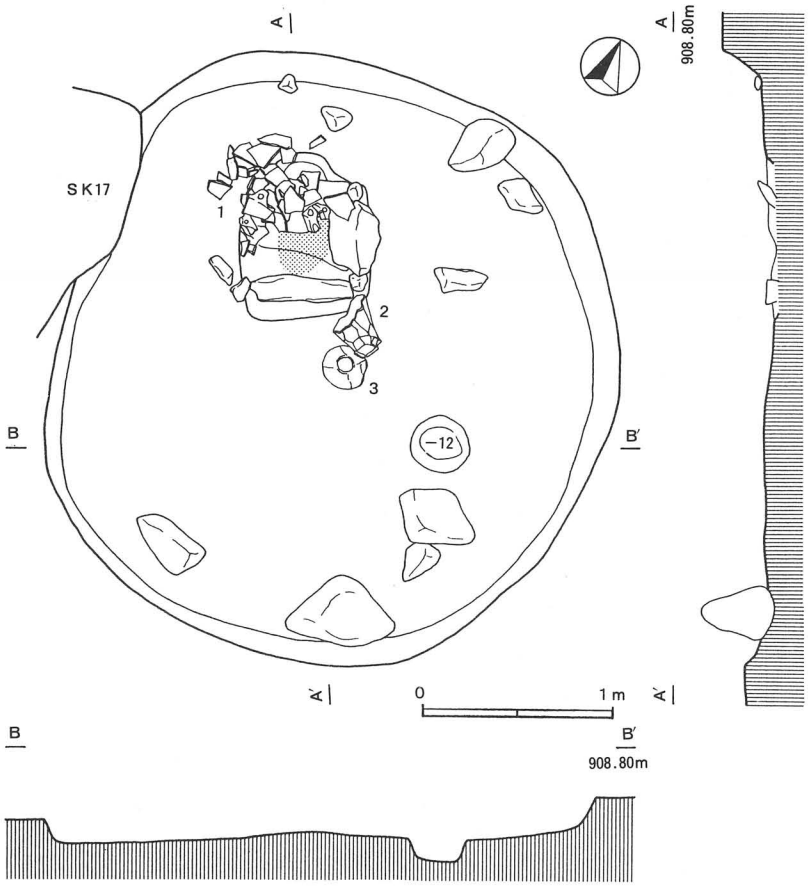
1は口縁部に粘土紐を2本弧状に貼り付けたものである。口縁部には4単位の突起が見られる。口縁部1／2，胴部1／3残存。2はやや大型の深鉢である。内面には比較的良好な状態で炭化物が付着している。3は大型の浅鉢である。口縁部を若干欠損する他はほぼ完存している。外面は単節RLをランダムに施文している。内面のヘラミガキは粗雑である。6は異形台付土器の脚台部である。1／6残存。7は大型の深鉢である。口縁部1／6，胴部1／3の大型の破片である。11は小型の鉢で，外面には単節RLの細縄文が施文されている。13は小型の深鉢の破片で，蛇行懸垂文が見られる。22は打製石斧の断欠である。53.9gを計る。23は投弾状石器である。やや偏平な球形を呈する。使用痕は認められない。125gを計る。

SB04（第23，24図）

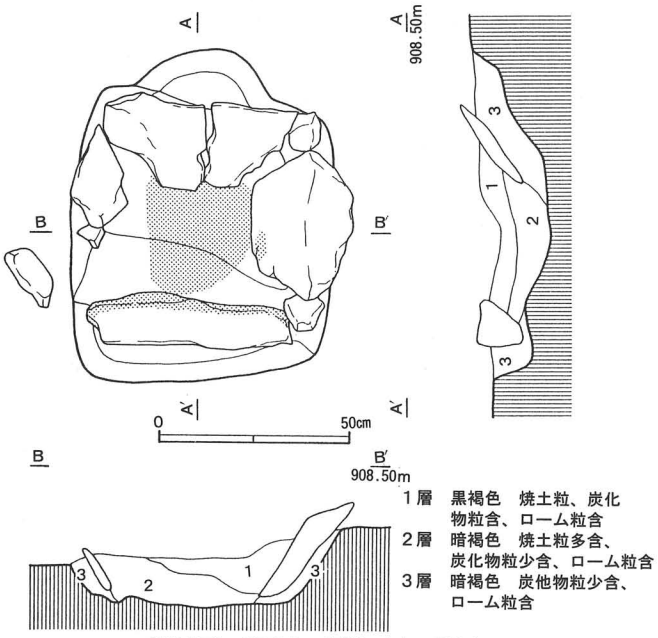
C－５区に位置し，北 1.5ｍにSB06，南西12ｍにSB07が存在。

重機による表土除去の際，田圃の苦土の直下から落ち込みを検出。部分的に暗褐色土が残りプランが明確につかめなかった。精査の結果直径３ｍ程の円形プランが明確になった。

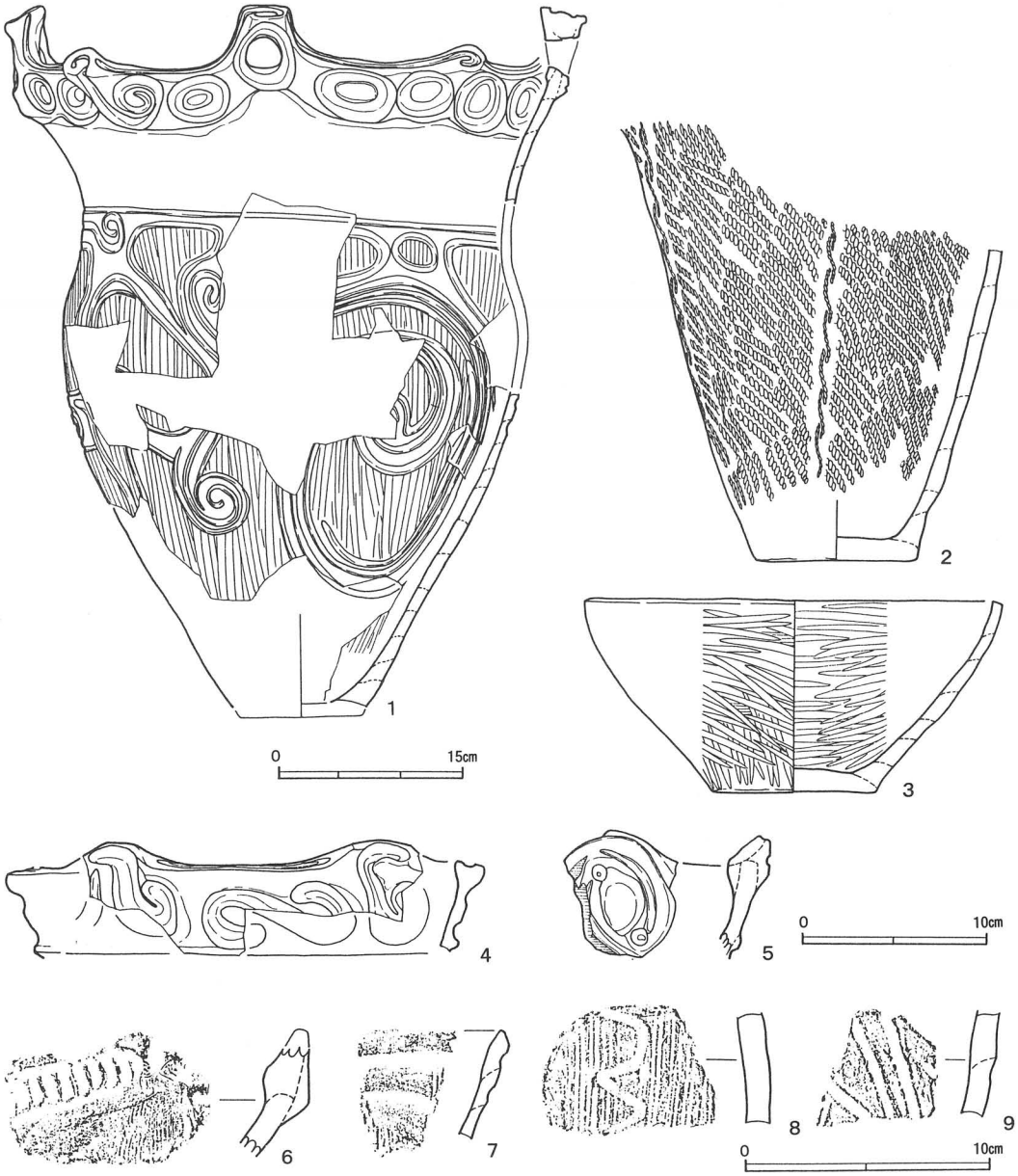
形態　ほぼ円形プラン。　**規模**　長軸3.14ｍと短軸2.80ｍを測る。壁面は最も残りの良い北側でも19 cmを測るに過ぎない。　**主軸**　N－16°－W。　**覆土**　ローム粒子，炭化物粒子を少量含む土層で，その混入の度合いで２層に分けられる。水平堆積。　**床面**　ソフトローム中に構築される，凹凸が多く軟弱である。　**周構**　なし。　**炉**　住居北側に偏して80 cm×70 cm，深さ15 cmを測る方形の石囲い炉が検出された。北東コーナーと南東コーナーには拳大の礫が配置されていた。南側の炉石はSB03同様偏平な柱状の礫を用いている。　**ピット**　住居址南東部から１本だけ検出されている。形態，規模から主柱穴とは考え難い。　**埋甕**　なし。　**遺物出土状況**　１は炉の北側の床直～覆土上面から多数の破片と



第23図　SB04（１／40）



第24図　SB04　炉址（１／20）



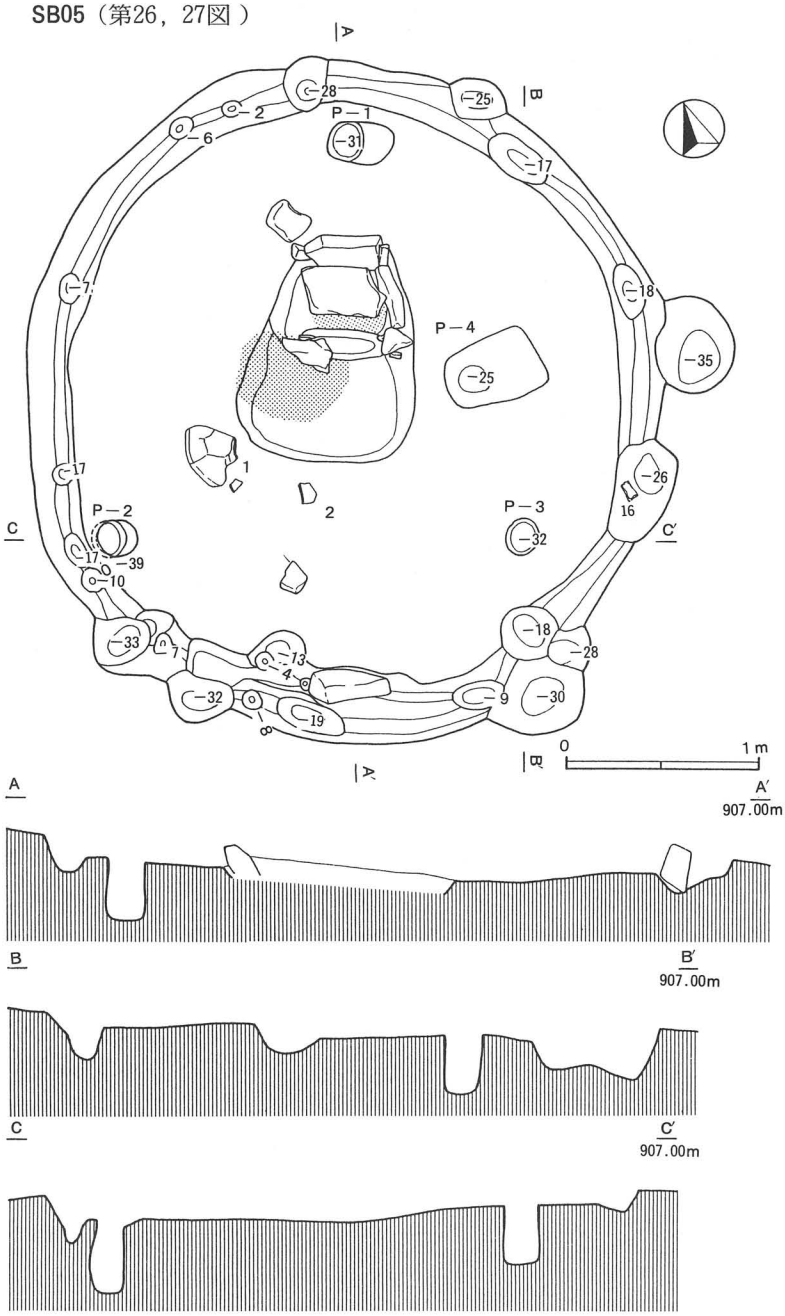
第25図　SB04　出土遺物（1は1／6、2～5は1／4、6～9は1／3）

なって出土。2，3は炉の南側床直から出土している。2は横転，3は逆位で出土した。2，3は使用状態を，1も住居廃絶後の二次的な廃棄ではなく，住居廃棄時の一次的な遺棄と考えたい。

遺物（第25図）

1は口径45 cm，残存高56 cmを測る大型の深鉢である。口縁部に4単位の突起をもつ。頸部無文帯。口縁部完存。胴部約1／2残存。2は中型の深鉢で胴部に単節RL施文後5本の縦位の結節縄文で区割する。胴部以下ほぼ完存。3は浅鉢である。口径22.6 cm，底径 8.8 cmを測る。円外面共丁寧にヘラミガキされる。完存。

SB05（第26，27図）



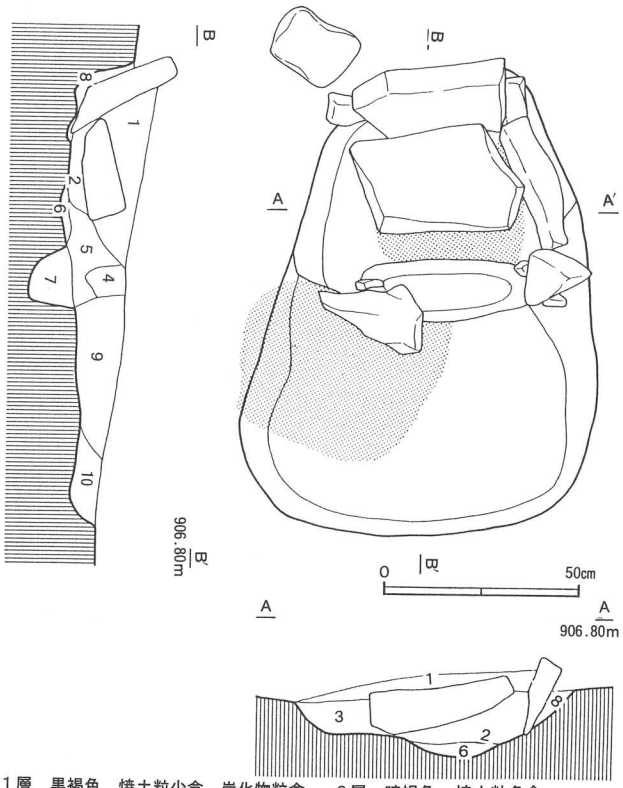
第26図　SB05（1／40）

G－6区に位置し，北11mにSB07，東29mにSB03が存在する。

重機による表土除去後の確認作業中に直径3mほどの落ち込みを確認。精査の結果円形プランが明確になった。

形態　ほぼ正円形プラン。　**規模**　長軸3.60m，短軸3.28mを測る。壁高は最も残りの良い部分でも11cmを測るに過ぎない。　**主軸**　N－30°－E。　**覆土**　炭化物粒子少量とローム粒子を含んだ暗褐色土である。壁際にはローム粒子を多量に包含した褐色土の三角堆積が見られた。　**床面**　ソフトローム中に構築されている。全体に軟弱であり，特に炉の南側で顕著である。　**周構**　全周する。住居南側で二重となり改修が行なわれたことが窺える。周構中からは多数の小ピットが検出されている。この内，住居南側の住居プランからはみ出したもの，及び周構中の小ピットは住居の入口施設に附随するものであろう。また，これと共に住居南側の周構中に板状の石が立てられており，入口施設に伴ったものと考えられる。　**炉**　住居の北側に偏して70cm×65cmの方形の石囲い炉が検出された。深さは20cmを測る。炉石は南側と西側のものが動かされていた。残った石との位置関係

から，炉の中央に置かれた石は西側の炉石であった可能性が高い。炉のコーナー部には各々の石の固定のためであろうか細長い石が縦に差し込まれていた。また，この炉の南側に接して浅い掘り込みがある。他山の被熱も認められるが，炉としての機能よりもむしろ形態，規模から考えると炉の焚き口としての機能を想定した方が妥当であろう。　**ピット**　4本検出されている。内P－1～3が主柱穴で，いづれも直径20cm程度で，深さは30～40cmを測る。埋土は黒褐色土で炭化物粒子，ローム粒子を含むものであった。　**埋甕**　なし。　**遺物出土状況**　使用状態を示すものは存在しない。1は床直から表を上にして出土している。

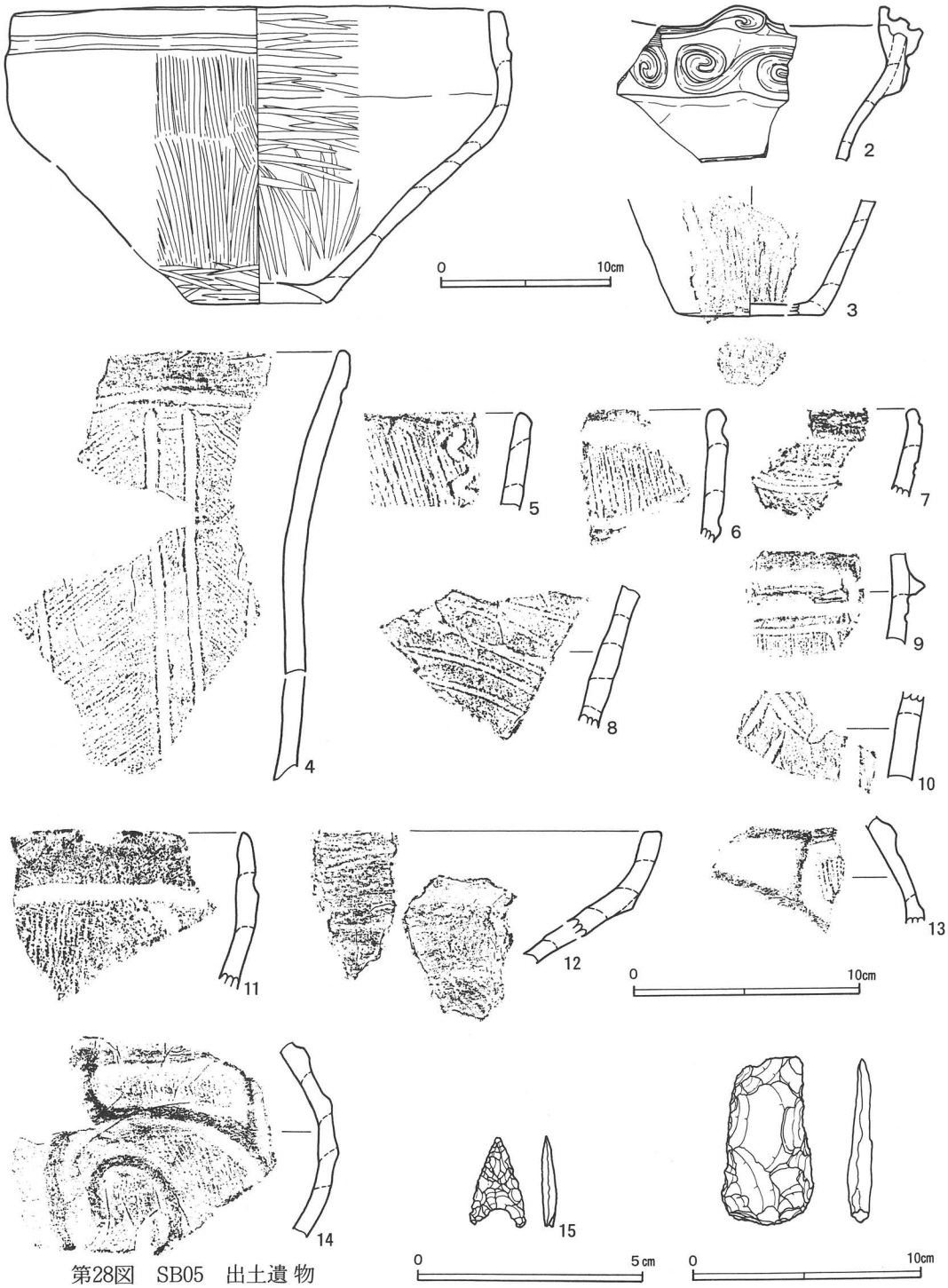


1層	黒褐色	焼土粒少含、炭化物粒含	6層	暗褐色	焼土粒多含
2層	黒褐色	焼土粒含、炭化物粒含	7層	暗褐色	焼土粒含、炭化物粒含
3層	暗褐色	炭化物粒少含、ローム粒含	8層	暗褐色	ローム粒少含
4層	黒褐色	焼土粒少含、炭化物粒少含	9層	暗褐色	焼土粒少含、炭化物粒少含
5層	暗褐色	焼土粒含、炭化物粒含	10層	暗褐色	焼土粒少含、ローム粒少含

第27図　SB05　炉址（1／20）

遺物（第28図）

1は推定口径28.8cm，器高17.9cmを測る浅鉢である。口縁下には沈線が1条巡る。胴部外面の縦位の条線は一次調整として施されたものであろう。内面はヘラミガキが丁寧に施される。また，内面には煮沸による炭化物の付着が見られる。ほぼ1／2残存する。2は頸部無文帯の中型の深鉢の破片である。口縁部には横S字状モチーフの沈線が連続する。床直から出土している。4は周溝内から出土した中型の深鉢の破片である。地文の斜行する条線の上に2本1単位の縦位の沈線が施文される。5は蛇行懸垂文の見られる単純口線の中型の深鉢の口縁部片である。6，7は口縁部に弧状の沈線を巡らす深鉢である。7は小型のものである。8は斜位に粗い条線を施す。10は連続するハの字文の見られる深鉢である。11は蛇行懸垂文の見られる深鉢である。地文は縦位の条線である。器面は被熱赤変しており荒れている。12は浅鉢の破片である。内外面共雑にヘラミガキされる。13，14は広口壷の同一個体である。地文は縦位の細かい条線で内面は丁寧にヘラミガキされる。15は床直から出土した石鏃である。黒曜石製で0.5gを計る。16は周溝の上面から出土している。27.4gを計る。



第28図　SB05　出土遺物

（1～3は1／4、4～14は1／3、15は2／3、16は1／3）

第29図　SB06（1／40）

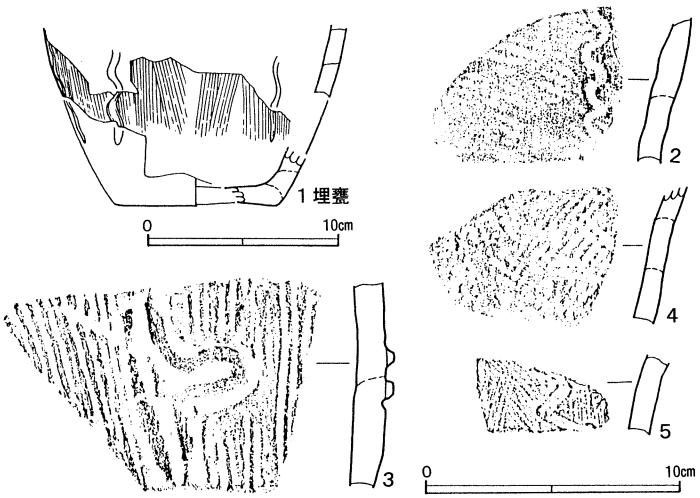
SB06（第29図）

B，C－５，６区に位置し，南 1.5mにSB04，南16mにSB07が存在する。重機による 表土除去に際し苦土直下から埋甕を検出，単独の埋甕と考えられた。また田普請時の段切りにより，これより北側には遺構が残存しないものと考えられたが，周辺を精査したところ，数本のピットが検出された。まだ北側にもピットの存在することが予想されたため，部分的に拡張を行なった結果，炉址になるであろう落ち込み，数本のピットが検出され住居址として認定された。

形態　田普請時の段切りにより床面以下まで完全に削平されており詳細は不明であるが，ピットの配列や炉址の位置から考えると形態，規模共にSB02に類似したものが想定できよう 。**規模**　長軸5.36m以上，短軸4.52m以上が想定される。　**主軸**　ピット,炉の配列からN―０°―Wが想定できる。　**覆土**　不明。　**床面**　不明。　**周溝**　不明。　**炉**　ピットの配列から住居の北側に偏して構築されたものと考えられる。現存部で95 cm×100 cm を測る。深さは27 cm を測る。他の住居址の炉の形態との比較から方形プランの石囲い炉であったのはまちがいなかろう。石がどの段階で抜き取られたか土層の観察からもよく解らなかった。炉底部はわずかに被熱し赤変していた。　**ピット**　合計11本検出されている。P－１，３～９が主柱穴となるであろう。ピットの配列から建て直し，あるいは重複の可能性が指適できる。　**埋甕**　正位。底部打ち欠き。　**その他の施設**　炉址の東45 cmにもう一ケ所，ごく浅い方形プランの落ち込みがある。規模は70 cm×80 cm，深さは10 cmを測るだけである。底部は比較的良く焼けた面が広がっており炉としての機能が想定できるが，この住居のピットの配列，炉址との位置関係，主軸方位のズレ等を考えるとこの住居址との関連は想定し難い。むしろ上面の削平されていることを考えると別の遺構（住居址）の存在したことを想定した方が妥当であろう。遺物の出土は全くない。　**遺物出土状況**　遺物は床面以下まで完全に削平されているため，埋甕と炉址から出土したものだけである。炉址から出土したもの（２～５）は破片のみで，苦土の直下で炉址が検出されたことを考えると住居址に伴った遺物とは必ずしも言いきれない。

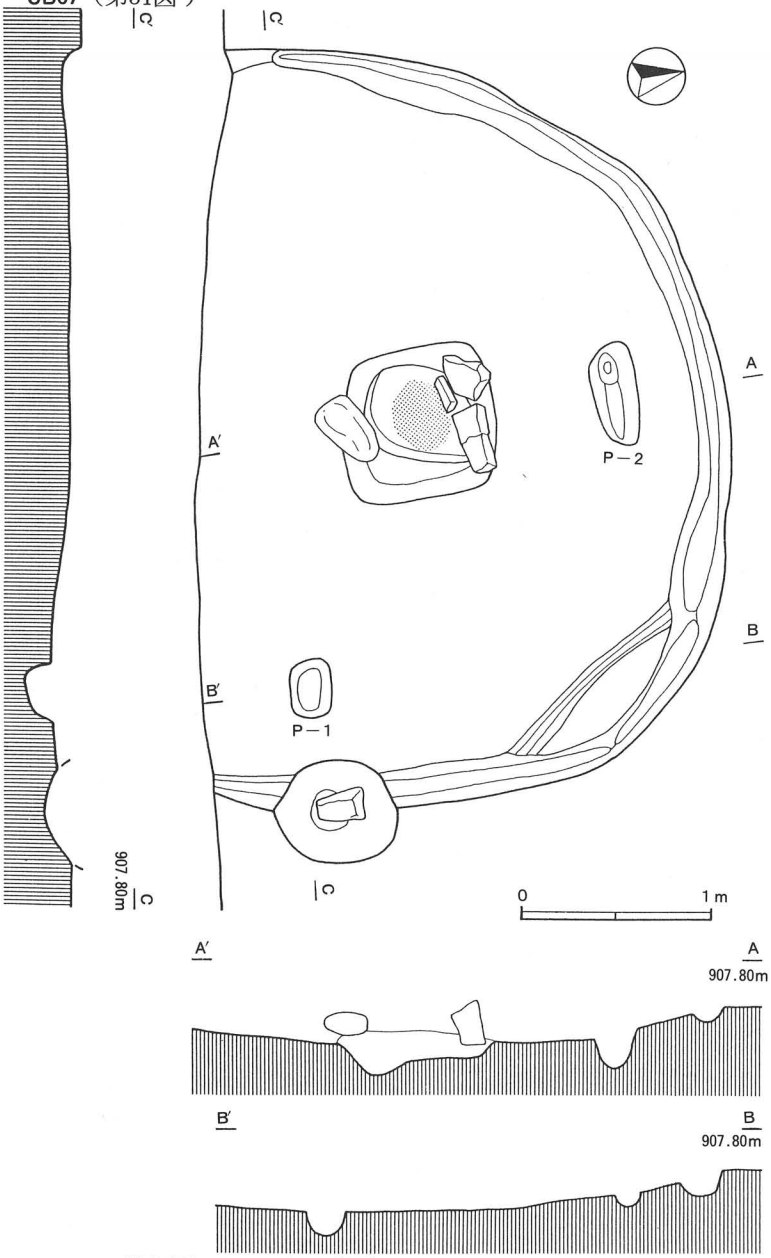
遺物（第30図）

１は埋甕で，中型の深鉢である。胴部には沈線による蛇行懸垂文が見られる。内面には煮沸による炭化物の付着が見られる。２の地文は単節RLで蛇行懸垂文が見られる。４は縦位の羽状の縄文が見られる。



第30図　SB06　出土遺物（１は１／４、２～５は１／３）

SB07（第31図）



第31図　SB07（1／40）

D－6区に位置し，北12mにSB04，北16mにSB06，南11mにSB05が存在する。

本調査終了後の立合い調査で検出されたものである。

形態　田普請時の段切りにより住居南半を削平されているため詳細は不明である。炉の位置等から考えてほぼ楕円形のプランを呈するものであろう。　**規模**　現存部で長軸2.82m，短軸4.01mを測る。壁高は7cmを測る。

主軸　N－13°－W。

覆土　暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量包含。

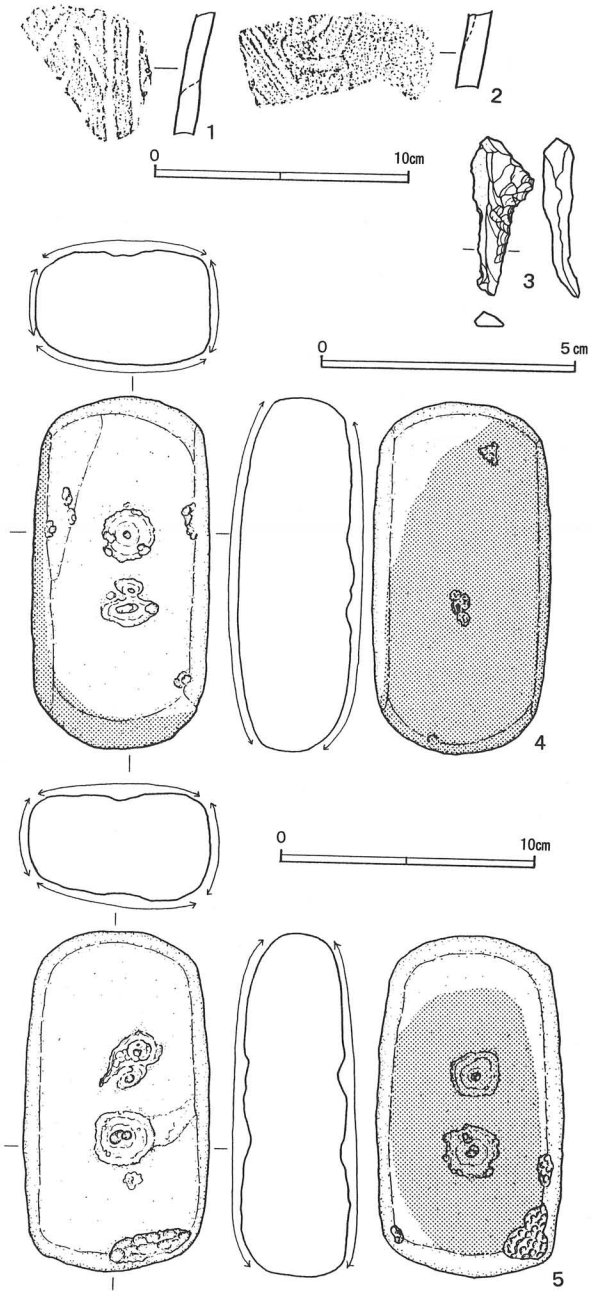
床面　ハードローム上面に構築されている。凹凸が多く軟弱である。また床面からは多数の拳大の礫が検出されているがほとんどが地山に包含される礫であった。　**周溝**　現存部で住居西側で断絶する他は全周している。また北東コーナー付近で部分的に二重になるが新旧関係は不明である。全体に浅く幅広である。

炉　住居の北側に偏して構築されている。規模は80cm×80cmを測り，深さは20cmを測る。プランは方形を呈し，石囲い炉であったと思われる。炉の北側と南側から炉のプランに合わせて炉石状に配された石が出土しているが炉の掘り方から浮いて検出されており疑問を残す。覆土は暗褐色を呈し，焼土粒子，炭化物粒子を少量包含している。炉底部は僅かに被熱し赤変して

いる。　**ピット**　2本検出されている。いずれも形態，規模から考えて主柱穴とはし難い。　**埋甕**　不明。　**その他の施設**　住居北壁近くに長楕円形のピットが検出されている。これは炉の北辺と軸が同じで，その規模は長軸75 cm，短軸24 cmを測る。深さは20 cmを測る。覆土は炭化物粒子を少量含み，暗褐色を呈する。このピットはSB02のP－5やSB03のP－4と同様の性格を持ったものであろうか。　**遺物出土状況**　住居東半の覆土中から遺物が少量出土している。

遺物（第32図）

1はハの字文を縦位の沈線で区割したものである。2は蛇行懸垂文の見られるもので地文は斜行条線である。3は黒曜石製の石錐である。重量は 1.5g を計る。4，5は磨石である。共に使用面の中央に凹みがあり，凹石としても使用されていたことが解る。4は上面精査中の出土で本址に帰属するか疑問を残す。使用面は4面観察され，各面共比較的平滑である。また被熱しており煤の附着が見られる。重量 730gを計る。5も使用面は4面である。重量は 690gを計る。



第32図　SB07　出土遺物（1・2は1／3、3は2／3、4・5は1／3）

2　配石遺構とその遺物

調査の段階ではそれぞれ礫群，集石，土壙群として扱ったもので，整理の段階で新たに配石遺構として番号を振り直したものである。以下その番号順に記述を進める。

1号配石（第33図）

C－2区に位置する。重機による表土除去の際30～50 cm大の石が数点出土したため精査したところ，配列の不明確な礫群を検出した。遺構の性格を把握するためサブトレンチを入れて調査したがその性格を把握するには至らなかった。その後周囲をソフトロームまで下げながら精査したところ，不明確だった礫群の範囲が大きく2つに分かれるものであることが判明，それぞれをA群，B群の2つの集石遺構として調査を進めた。石除去後，遺り方のラインに沿って掘り下げ下部遺構の調査をしたところ多数のピットが切り合って存在することを確認。これらは各独立した集石とは考え難くA群，B群の2つの礫群からなる一つの配石遺構として理解し1号配石として報告する。

A群は大小13個の礫と，ほぼ完形の土器2個体，大型の土器破片1片から構成されている。この内，礫数点は被熱していた。また土器の出土状況を見ると1は礫と同レベルで横転し，2は石で蓋をされた形で出土しているが，いずれも破片が散り，石の上下から出土している。また3は礫の下から出土している。このような状況からこの礫群は下部の土壙の埋没のある段階でこれらの土器と礫がほぼ同時に遺棄されたものと理解される。またこれらの出土状況から下部の土壙の掘削の時期はそれほど時間的に差がなかったものと判断される。

B群は30～40 cm大の礫7個で構成される。これらは対応する下部の土壙も比較的明確である。この内，5個の礫はSK19の上から重なって出土しており，集石土壙的な要素もあるが，ここでは全体をA群と対をなす礫群として考える。

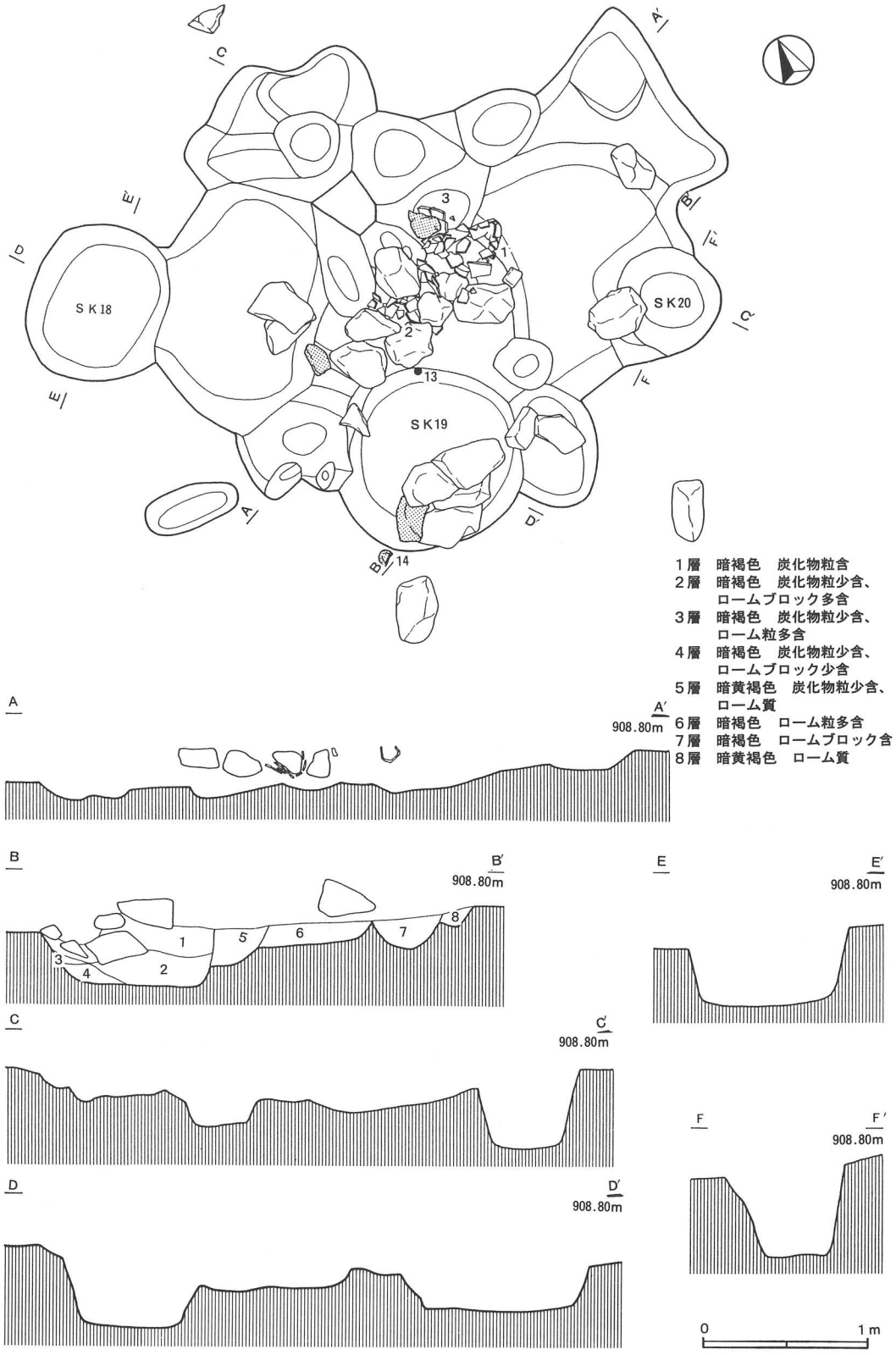
下部の遺構について見ていくと掘り込みのしっかりした土壙が3基ある。（SK18，19，20）他の土壙は不整形で浅いものが多い。配石のレベルや土器の出土状況からこれらの内にはしっかりした土壙となるものがいくつかあったものと思われるが，今回の調査ではそれを明らかにすることができなかった。

下部の土壙について個々に見ていくとSK18はN－60°－Eを主軸とする長軸99 cm，短軸83 cmを測る楕円形プランの土壙で，深さは42 cmを測る。覆土は単一層で炭化物粒子，ロームブロックを含んだ暗褐色土であった。SK19は直径約110 cm,深さ35 cmを測るほぼ円形プランの土壙である。また，北西部の壁面に貼り付いてヒスイの珠が出土している。SK20は直径約65 cm，深さ52 cmを測る円形プランの土壙である。覆土はほぼ単一層でハードロームブロックを含む暗褐色土層である。

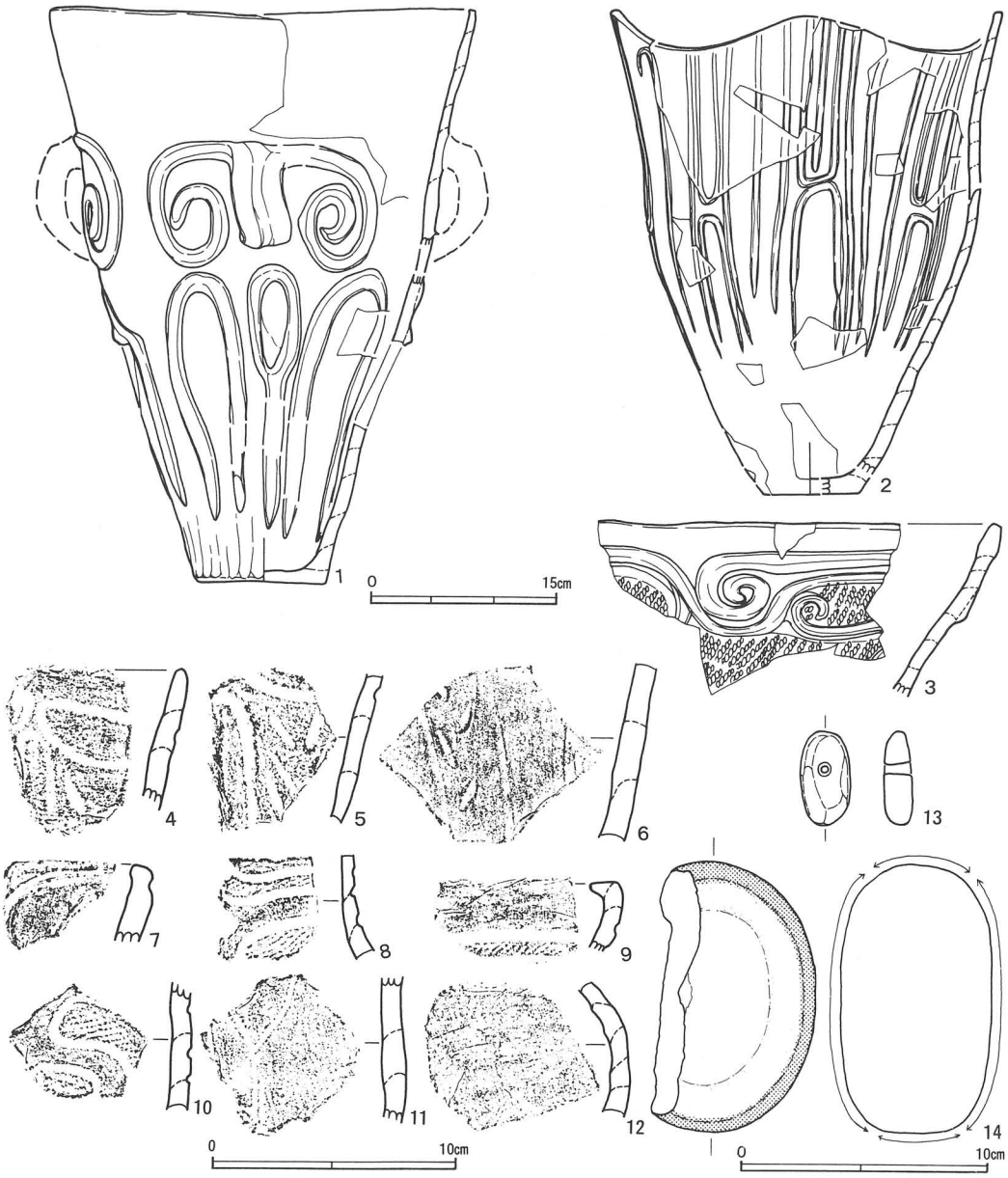
これら一連の土壙は礫や遺物の出土状況から墓壙として考えられる。

遺物（第34図）

1は口径35 cm，器高46 cmを測る大型の深鉢である。文様は隆帯のみで構成され，そのモチー



第33図　1号配石（1／40）



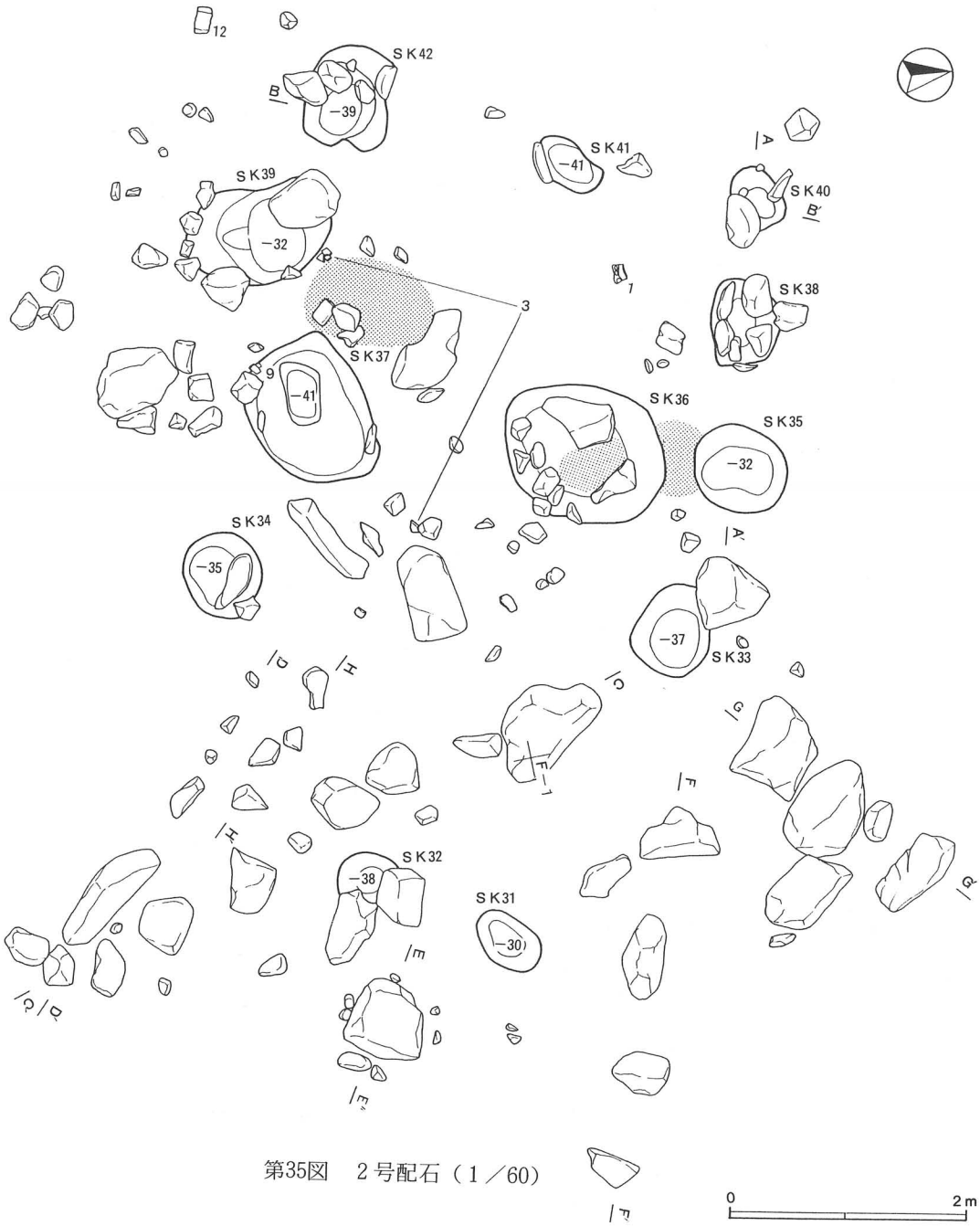
第34図　1号配石出土遺物（1～3は1／6、4～14は1／3）

フは人面と思われる。文様は4単位見られる。また煮沸の痕跡がなく当初より葬送儀礼用に製作された土器である可能性が高い。底部完存。胴上半～口縁部1／2欠損。2は口径32 cm，器高39 cmを測る。口縁部は4単位の波状口縁で，文様は沈線のみで構成される。煮沸の痕跡が認められる。1／3欠損。3は大型の深鉢の口縁部片である。復原口径は60 cm近い数値になる。地文は単節LRが施されている。4・5は同一個体の破片である。ハの字文が見られる。13はヒスイの珠である。長軸 3.8 cm，短軸2.0 cm を測る。重さは16.3 g を計る。14は磨石の断欠である。焼成を受け一部赤変している。重量は 645 g を計る。

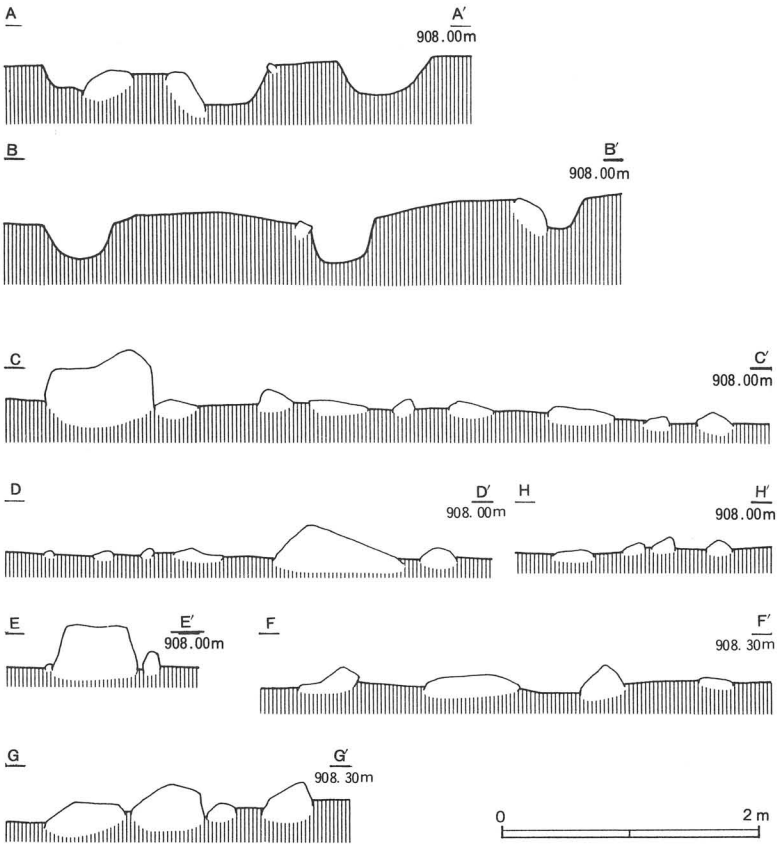
2号配石（第35，36図）

F，G－1，2区に位置する。

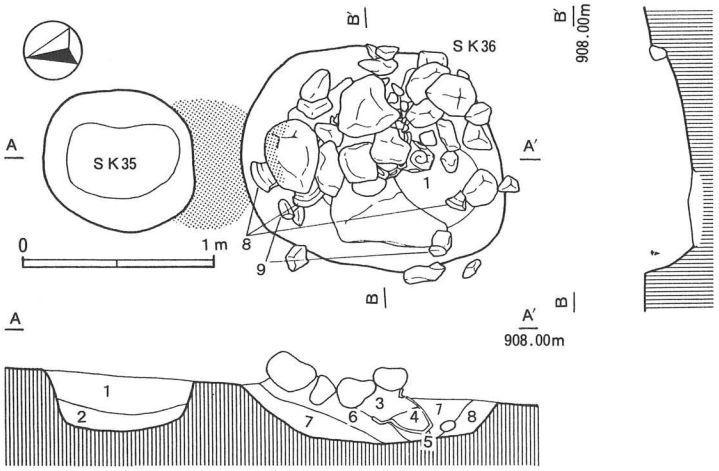
表土除去後の確認作業でF，G－2区から多量の土器が出土。また不整形の落ち込みが検出されたため，ベルトを設定して掘り下げて見たところ，ローム上面で多量の礫と地山の被熱赤変部分を検出。住居址の地床炉となる可能性があったので面で広げて見たが予想に反して大小



第35図　2号配石（1／60）



第36図　2号配石エレベーション（1／60）



1層　暗茶褐色　炭化物粒少含、ローム粒含
2層　茶褐色　スコリア含
3層　黒褐色　炭化物粒含
4層　暗褐色　炭化物粒少含
5層　暗褐色　炭化物粒含、スコリア含
6層　黒褐色　炭化物粒含、ローム粒含
7層　暗褐色　ローム粒含
8層　茶褐色　スコリア含

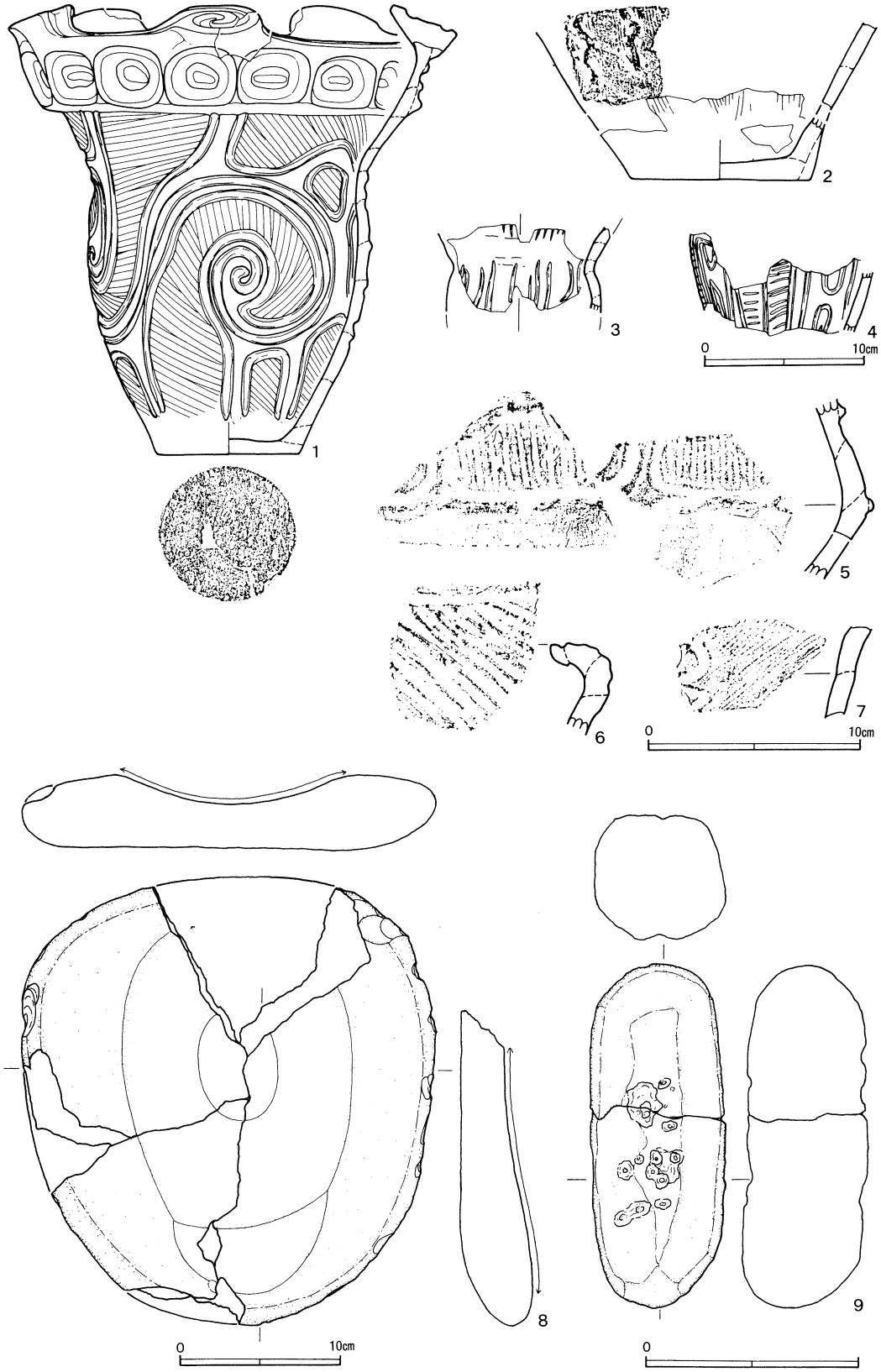
第37図　SK35・36（1／40）

の土壙が検出されただけであった。そこでベルトを外し，周囲を広くローム上面まで下げながら精査したところ，これらの土壙はF，G－2区を中心に多数密集しており，礫はF，G－1区にまで及んでいることが判明した。これらの土壙群と礫群を一連のものと捉え，ここでは2号配石として報告する。

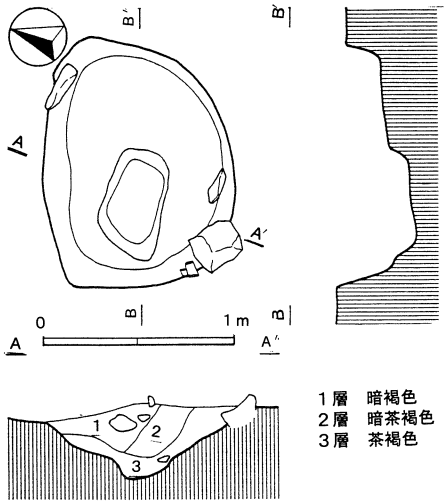
2号配石の規模は南北約6m，東西約10mを測り，この配石は大きく東側の礫群と西側の土壙群に分けることができる。

東側の礫群は1mを越すような地山の巨石の周りに拳大～人頭大の礫を雑に配したものである。遺物の出土は少ない。これらの礫群の間にSK31・SK32が穿たれている。

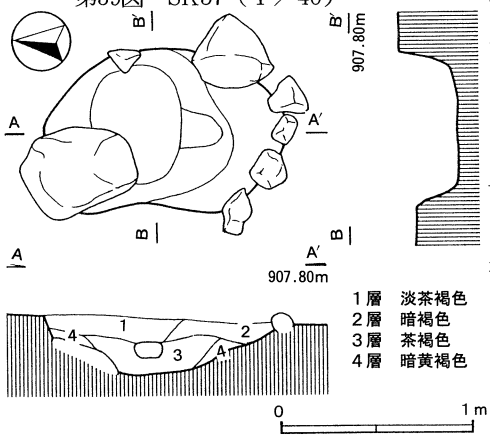
西側の土壙群についてはその配列に比較的規則性を認めることができるが，SK35・36・37・39が比較的規模が大きく，他は直径50～80cm程度の小型の土壙であり機能的には必ずしも一律ではないものと予想される。これらの小型の土壙の



第38図　SK36出土遺物（1～4は1／4、5～7は1／3、8は1／4、9は1／3）



第39図　SK37（1／40）



第40図　SK39（1／40）

覆土はほとんどが単一層で茶褐色～暗褐色を呈し，焼土粒子，炭化物粒子を微量に含んでいた。また多くのものが小礫を包含していた。

他の土壙について個々に見ていく。

SK35（第37図）

SK35は直径80 cm弱のほぼ円形プランの土壙である。深さは30 cmを測る。覆土は2層に分かれほぼ水平堆積であった。規模的には他の小型の土壙と大差ないが，形態的にはほぼ正円形であり掘り込みもしっかりしていた。

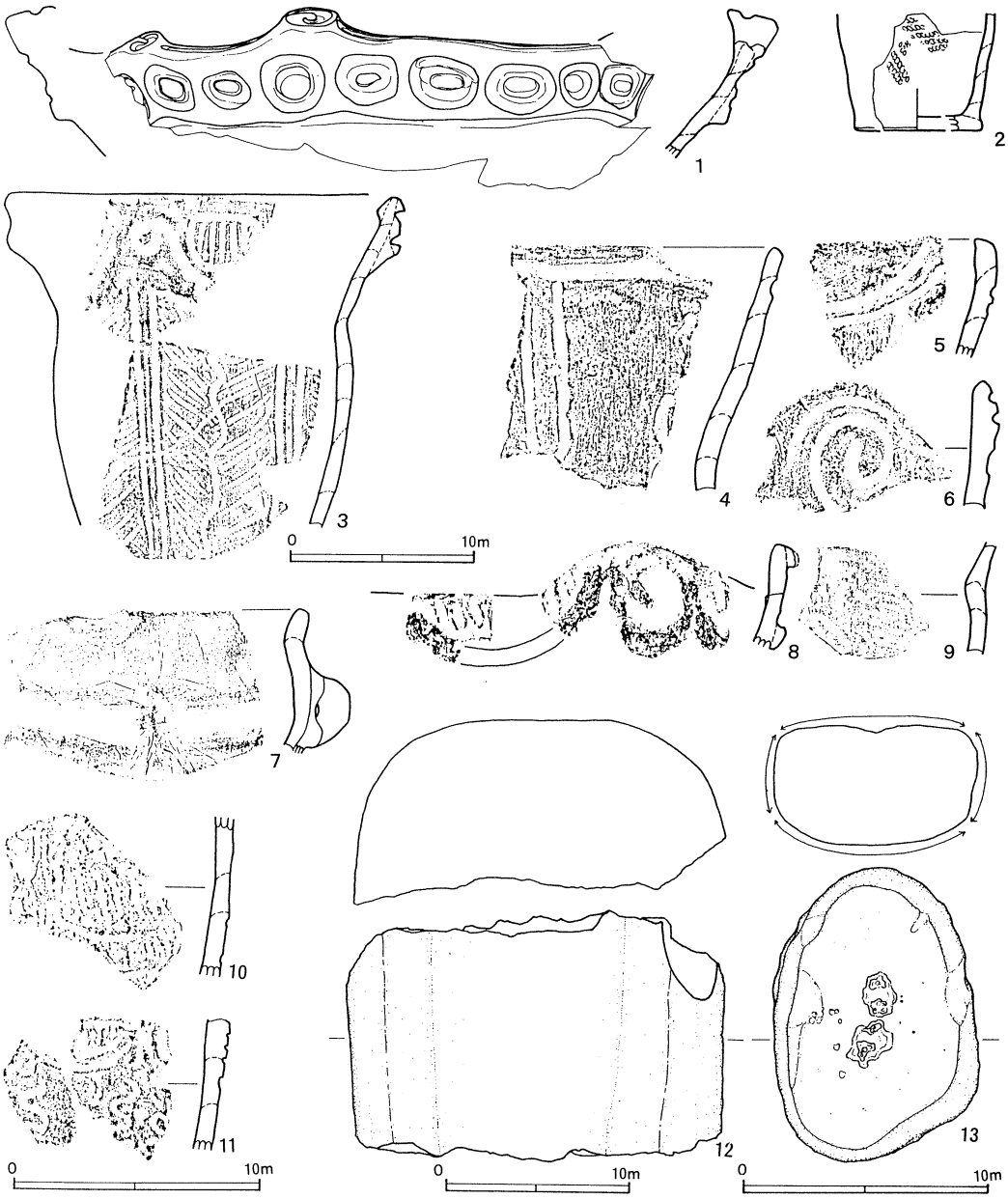
SK36（第37図）

SK36は長軸139 cm,短軸119 を測る。深さは28 cmを測る。土器を埋納した墓壙的性格の強い土壙である。土壙の上部には多量の拳大～人頭大の礫が投入されていた。土壙内からは被熱し，打ち欠かれた石皿と磨石が出土しており当時の習俗を知る上で貴重な手がかりとなろう。またSK35との間では地山の被熱赤変が認められ，ここで火の燃やされたことがわかる。

遺物（第38図）

埋納された土器の他に上層から多少の土器が出土しているが，本址に伴った遺物といえるのは1の土器と8の石皿，9の磨石だけである。

1は埋納されていた土器で口径28.0 cm，器高28.1 cmを測る中型の深鉢である。口縁部には5単位の突起があり，連続楕円文が施されている。胴部には横S字状モチーフの文様が2単位見られる。地文は条線が充塡されているが部分的に単節LRが施文されている。器面には煮沸の痕跡が見られる。遺存状態は良好で口頸部を一部欠損する他は完存している。底部には穿孔は見られない。2は隆帯による蛇行懸垂文の見られるやや大型の深鉢である。地文は縦位の条線である。底部約1／2残存。3，4は小型の深鉢の破片である。いずれも沈線のみによって文様が施される。3は棒状工具で縦位に沈線を施す。4はささら状の工具で器厚の半分にも達する深さで文様が施されている。5は鉢の破片である。8は推定長軸28.3 cm，短軸25.6 cmを測る石皿である。重さは3900 gを計る。被熱し，打ち欠かれて土壙内から3片に分かれて出土している。内2片は土器の上に投入された礫と一緒に，もう一片は土壙底部付近から出土している。このことから土器の埋納と礫の投入はほとんど時間差がなかったものと推定される。9は長径



第41図　2号配石出土遺物（1～3は1／4、4～11は1／3、12は1／4、13は1／3）

16.1 cm，短径6.2 cm を測る磨石で 765 g を計る。これも打ち欠かれた状態で土壙底部付近から出土している。

SK37（第39図）

SK37は長軸 126 cm，短軸101 cm を測り，深さは38 cmを測るやや不正の楕円形プランの土壙である。土壙底部には長軸55 cm，短軸30 cmを測る小ピットが穿たれている。またSK39との間には地山の被熱赤変部分が見られ，ここで火の燃やされたことが解る。遺物は土壙外周上面か

ら深鉢の破片（第41図－９）が出土している。

SK39（第40図）

SK39は長軸 130 cm，短軸81 cmを測る不整楕円形のプランを呈する。深さは３cmを測る。土壙外周上に拳大～人頭大の礫を配し，また地山の巨石をそのまま利用して配石墓的外観を呈している。遺物は出土していない。

これら土壙群の性格については小型の土壙は不明と言わざるをえないが，他のSK35，36，37，39の各土壙は墓壙的な性格が強い。またこの配石は礫群と土壙群との位置関係や，焼土の分布等から単なる墓域としてだけでなく，何らかの祭祀の場としての機能をも持っていたものと考えられる。

遺物（第41図）

多量の遺物が上層から配石面にかけて出土しているが，ここでは調査が配石面に至った以降の遺物のみをこの配石遺構に帰属する遺物として取り上げる。

１は復原口径41.6 cmを測る大型の深鉢の口縁部片である。連続楕円文が施される。突起の単位は不明。頸部は無文帯である。２は小型の深鉢の破片である。胴部には単節RLが施されるが，施文後撫で消されている。３は復原口径21.2 cmを測る中型の深鉢の破片である。胴部には２本１単位の縦位の沈線によって区割された中に蛇行懸垂文が施される。地文は斜行条線が羽状に入っている。地文を含め，文様は全て棒状工具による。４は深鉢というより壷に近い形態を呈する。横位の沈線とU字状の縦位の沈線，蛇行懸垂文が見られる。いづれも棒状工具による。器面は内外面とも丁寧にヘラミガキされている。７は鉢の口縁片である。器面は内外面とも丁寧にヘラミガキされている。内面の一部には赤彩の痕跡が残っている。11は小型の深鉢の破片である。地文はない。12は石棒の断欠である。花崗岩質で重量は4000ｇを計る。13は磨石である。中央には凹みが２ケ所見られ凹石としても使用されていたことが解る。重量は 540ｇを計る。

３号配石（第42図）

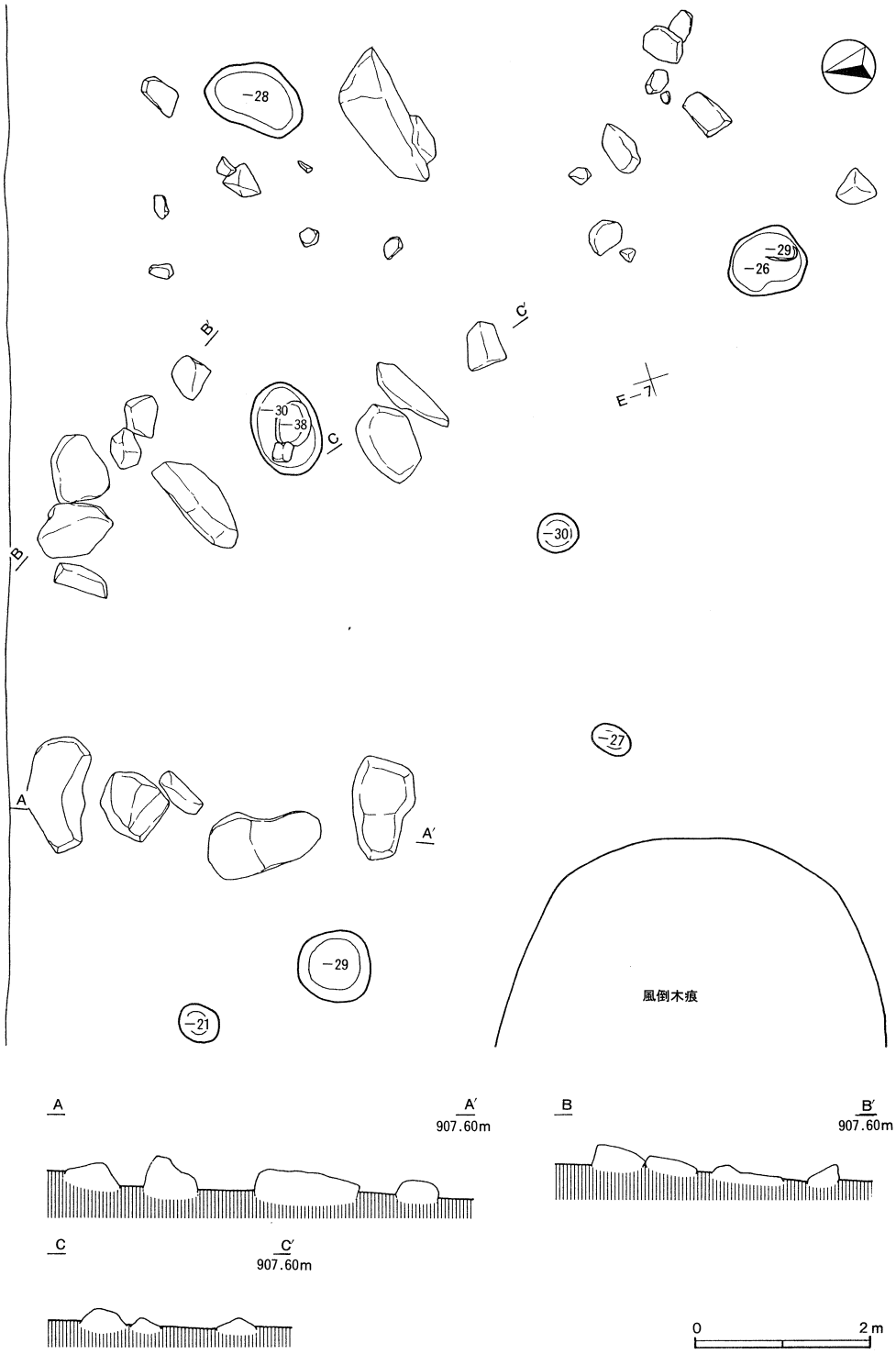
E，F－６，７区に位置する。

調査の段階では礫群として扱ったものであるが，この中に若干の人為的な配列が見られるためここでは新たに番号を振り直し３号配石として報告する。

この配石は地山の巨石の周辺に小児頭大～人頭大の礫を配したものである。形態的には北側で調査区域外（排土の都合で調査不能）となり不明な点を残すが南側に向かって開いた馬蹄形ないしは八の字形を呈する。開口部の両脇には小ピットが２本穿たれている。この他にもピットが合計５本穿たれている。

遺物

本址に帰属する遺物は全くない。



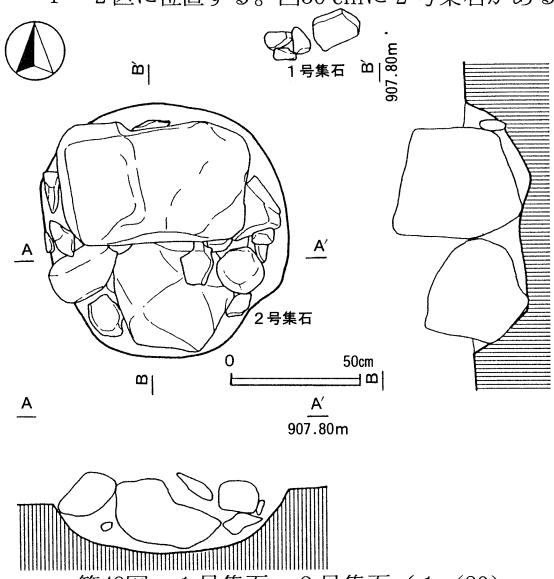
第42図　3号配石（1／80）

3　集石遺構とその遺物

調査段階で配石遺構との混乱があり，ここでは新たに番号を振り直して報告する。

1号集石（第43図）

F－2区に位置する。西30 cmに2号集石がある。この集石は4個の礫から構成され，下部に掘り込みは見られなかった。遺物はない。



第43図　1号集石・2号集石（1／30）

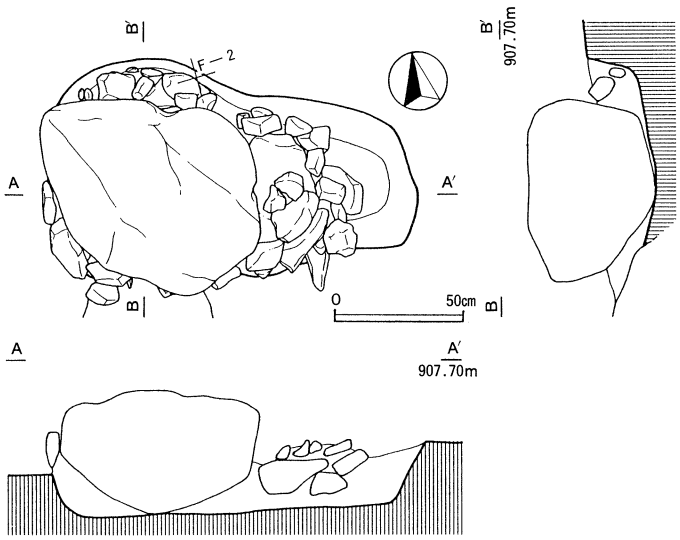
2号集石（第43図）

F－2区に位置する。直径ほぼ95 cmの円形プランの土壙中に2個の巨石を据え，その周りに多数の拳大～人頭大の礫を配したものである。焼成を受けた礫は見られなかった。覆土は暗褐色を呈するしまりの弱い土層で，微量の炭化物粒子を含む。

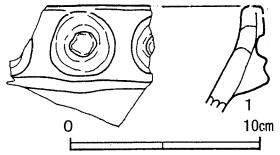
3号集石（第44図）

F，G－2，3区に位置する。長軸147 cm，短軸89 cmの不整形の土壙中に90 cmを越す巨石を据え，それを中心に多量の拳大～人頭大の礫を配したものである。焼成を受けた礫は見られない。覆土は暗褐色を呈するしまりの弱い土層で炭化物粒子を少量含む。遺物は土器片が2片出土しているが，図化できたのは第45図に示した1片だけである。

この集石は2号集石と同様の性格をもつものと考えられるが，その内容については従来言われてきた屋外炉，墓壙，祭祀に係わる遺構等では説明し難い。これらの位置付けについては今後の類例の増加を待たねばならない。



第44図　3号集石（1／30）



第45図　3号集石出土遺物（1／4）

4　土壙とその遺物

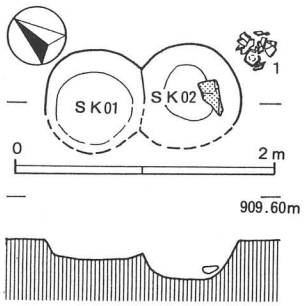
調査の段階で欠番としたものや，整理の過程で欠番にしたものなどが多く，ここでは新たに土壙番号を振り直して記述を進める。

SK01（第46図）

C―２区に位置する。SK02 と切り合う。（先後関係不明）直径約80 cmの円形プランの土壙で，深さは20 cmを測る。遺物はない。

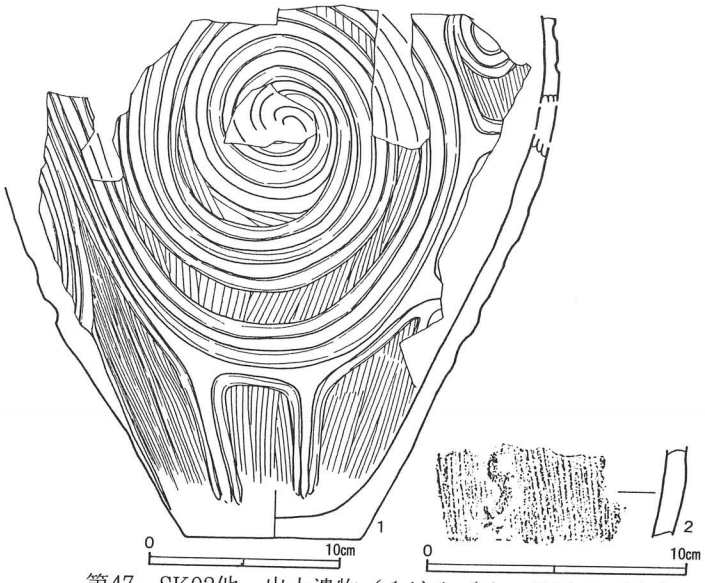
SK02（第46図）

C―２区に位置する。直径約80 cmの円形プランの土壙で，覆土中から焼成を受けた礫が検出されている。



第46図　SK01・02
（１／60）

遺物は隆帯による蛇行懸垂文の見られる深鉢の胴部片（第47図―2）が出土している。また，この土壙の東側20 cmほどの所からやや大きめの深鉢（第47図―１）が出土している。これは上面確認中の遺物とも接合関係が見られ，土壙等の遺構が存在したことが想定できる。底径 9.1 cm，残存高28.2 cmを測る。底部完存，胴部１／２欠損。



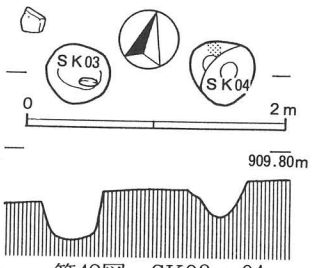
第47　SK02他　出土遺物（１は１／４、２は１／３）

SK03（第48図）

C―２区に位置する。直径50 cmほどの小ピットである。深さは35 cmを測る。覆土中から拳大の礫が検出されている。他に遺物は出土していない。

SK04（第48図）

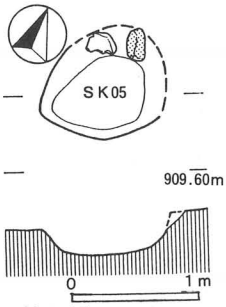
C―１区に位置する。直径50 cmほどの小ピットである。北西部にテラスを設ける。深さは30 cmを測る。覆土上層には焼土ブロックを包合していた。遺物はない。



第48図　SK03・04
（１／60）

SK05（第49図）

C―２区に位置する。攪乱により正確な数値は出ないが長軸90 cm前後，短軸85 cm前後の不整円形のプランの土拡である。深さは30 cmを測る。覆土中からは焼成を受けた礫が出土している。覆土は炭化物粒子，焼土粒子を含み暗褐色を呈する。遺物はない。



第49図　SK05
（1／60）

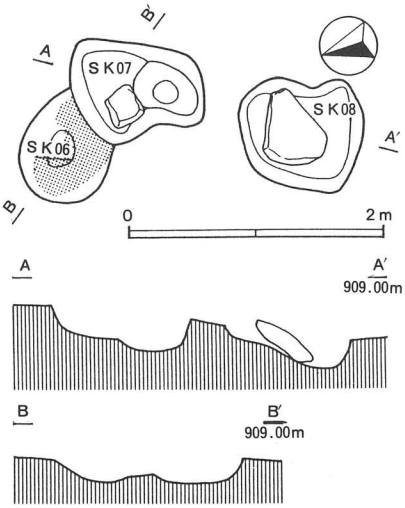
SK06（第50図）

D—2区に位置する。SK07により切られている。残存部で長軸70 cm，短軸43 cmを測る。深さは20 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，上層では多量の焼土粒子を包含する。遺物はない。

SK07（第50図）

D—2区に位置する。北側でSK06を切り，南測でSK08と切り合うがその先後関係は不明である。長軸 102 cm，知軸80 cmを測る。形態から考えて，2基の土壙であった可能性がある。覆土中からは小児頭大の礫が出土している。覆土は暗褐色を呈し，焼土粒子，炭化物粒子を少量含む。

遺物は覆土中から土器片が4片出さしている。1.2 は中型の深鉢の口縁部片である。1は外面に縦位の条線が見られる。2は無文でヘラナデのみが見られる。3は大型の深鉢の破片であろうか。橋状の把手が見られる。地文は縦位の条線で，器内面はヘラミガキされる。4はやや大型の深鉢の破片であろう。外面には低隆帯と沈線によって渦状文が施される。地文は縦位の条線である。



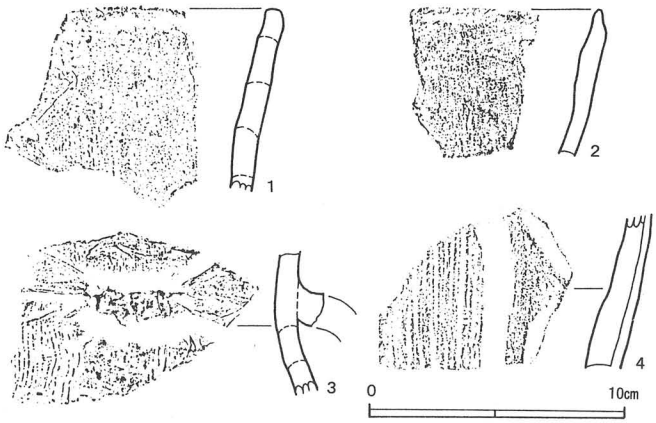
第50図　SK06・09・08(1／60)

SK08（第50図）

D—2区に位置する。長軸98 cm，短軸90 cmを測る不整形プランを呈する土壙である。中央部には60 cmを越す石が投げ込まれていた。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

SK09（第52図）

D—3区に位置する。長軸79 cm，短軸62 cmを測る楕円形プランの土拡である。深さは20 cmを測る。覆土は炭化物粒子を少量含み暗褐色を呈する。壙底より5 cmほど浮いた状態で深鉢（第53図—1.2） が出土している。



第51図　SK07　出土遺物（1／3）

遺物としては第53図に示したものが出土している。1.2 は同一個体で，外面胴下半及び内面上半は雑にヘラミガキされている。ハの字文を縦位の沈線で区割したものであるが，口縁部には沈線により楕円形の区割をし，中に単節RLを充塡している。3は口縁部に沈線で弧状に区

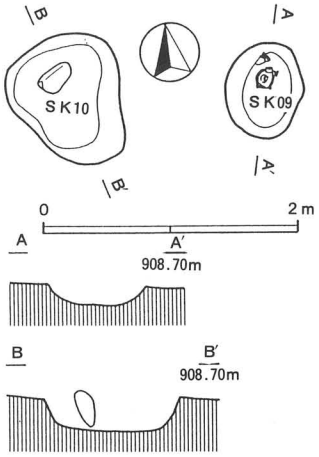
割したもので，縦位の条線が充填されている。

SK10（第52図）

10—3区に位置し，長軸 109 cm，短軸92 cmを測る不整形プランの土壙である。深さは30 cmを測る。土壙底部から若干浮いて拳大の礫が出土している。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

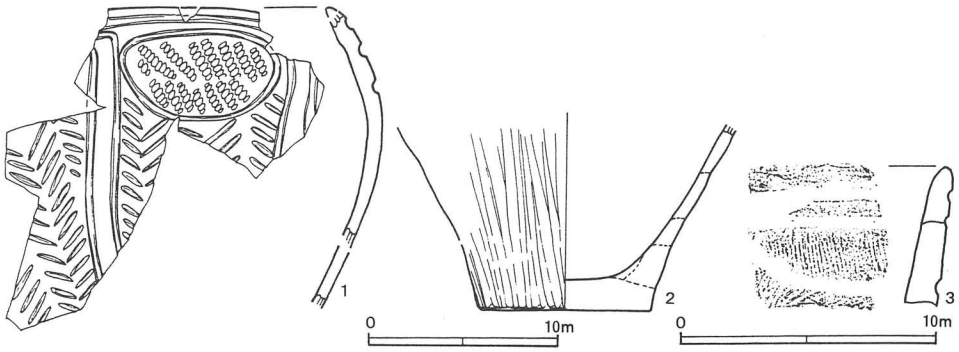
SK11（第54図）

C—3区に位置する。直径約80 cmほどの不整円形のプランを呈する。深さは56 cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、炭化物粒子を含む。遺物は出土していない。



第52図　SK09・10

（1／60）



第53図　SK09　出土遺物（1・2は1／4、3は1／3）

SK12（第54図）

C—3.4 区に位置する。長軸 126 cm，短軸80 cmを測る隅丸の長方形プランを呈する。深さは31 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

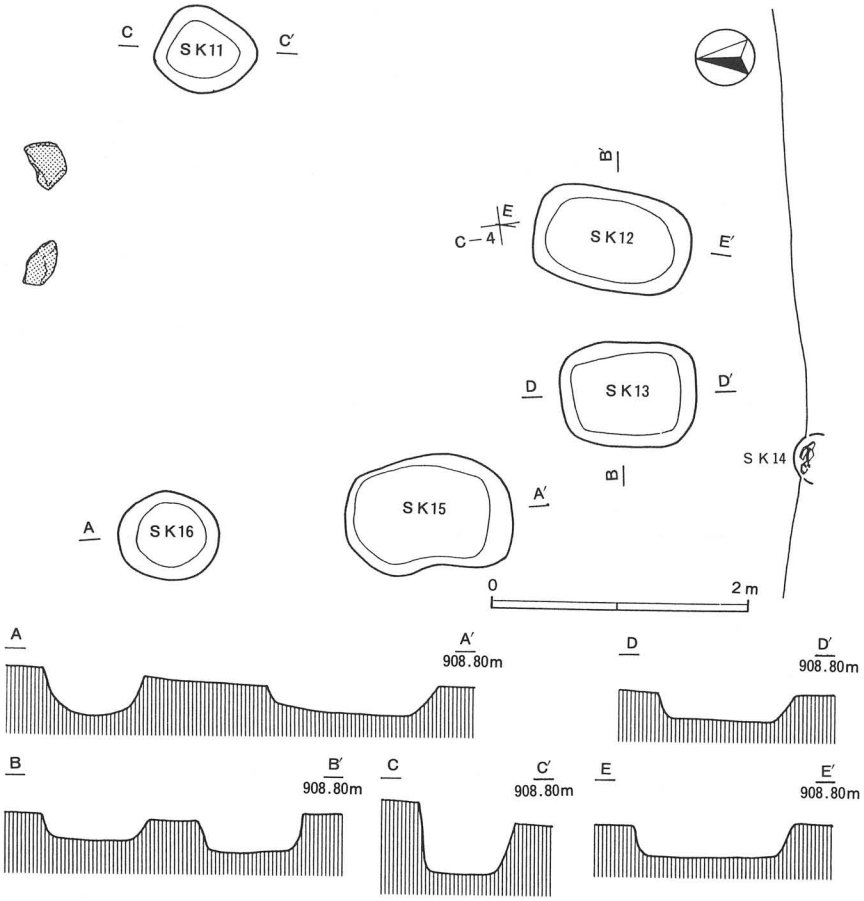
SK13（第54図）

D—4区に位置する。長軸 109 cm，短軸85 cmを測る隅丸の長方形プランの土壙である。深さは20 cmを測る。覆土は暗褐色をし，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

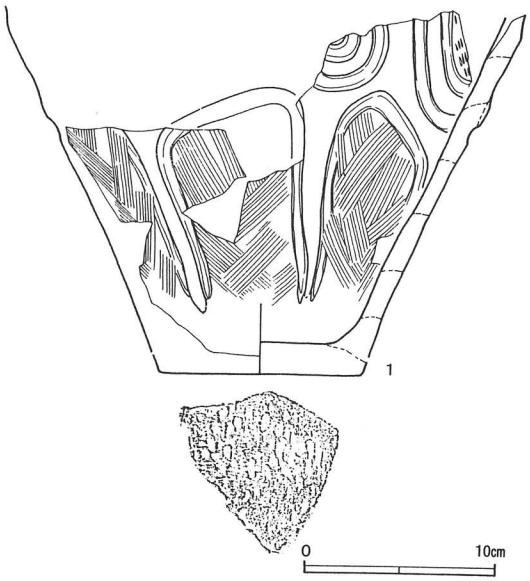
SK14（第54図）

D—4区に位置する。調査区域外にかかって検出されたものである。田普請時の段切りによりその大半を破壊されている。覆土は暗褐色を呈し，少量の炭化物粒子を含む。覆土中からは深鉢が正位で検出されている。底部はほぼ完存しているが,胴部は1／3のみの残存である。田普請時に破壊されたものであろう。不明な点が多いが屋外の単独の埋甕であった可能性が高い。

土器（第55図）の外面には低隆帯と沈線による区割文が見られ，その区割の中に胴下半では斜行の条線が，胴中位では櫛状工具による刺突が見られる。内面はヘラナデが施され，底部には網代痕が明瞭に残っている。



第54図　SK11・12・13・14・15・16（1／60）



第55図　SK14　出土遺物（1／4）

SK15（第54図）

C―4区に位置する。長軸 132 cm，短軸90 cmを測るやや不整の楕円形プランを呈し，深さは25 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

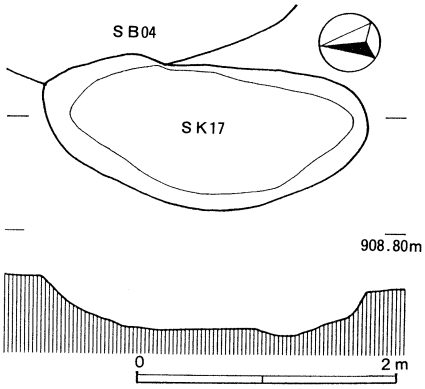
SK16（第54図）

C―4区に位置する。直径約80 cmを測る円形プランの土拡で，深さは35 cmを測る。覆土は黒褐色を呈し，炭化物粒子を包含する。遺物は出土していない。

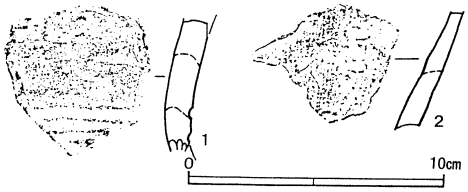
SK17（第56図）

C—5区に位置する。SB04と切り合うが先後関係は不明である。長軸 254 cm，短軸 115 cmを測る不整の楕円形プランの土拡である。深さは40 cmを測る。覆土は黒褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。

遺物は小片のみで図化できたのは第57図の2点のみである。1は深鉢の頸部破片である。2本の沈線が巡り，外面は雑にヘラミガキされている。2は深鉢の胴部片で，地文縦位の条線の中に沈線で蛇行懸垂文が施される。



第56図　SK17（1／60）



第57図　SK17　出土遺物（1／3）

SK18～20は1号配石参照

SK21（第58図）

E—3区に位置し，SK22と切り合うが先後関係は不明である。また，東1.7 mにSK23が存在する。長軸は 107 cm，短軸は80 cmを測るやや不整な楕円形のプランである。深さは12 cmとごく浅い。土壙座部は凹凸が多い。東側に偏して直径約30 cmの小ピットが穿たれている。

遺物（第59図—1～4）

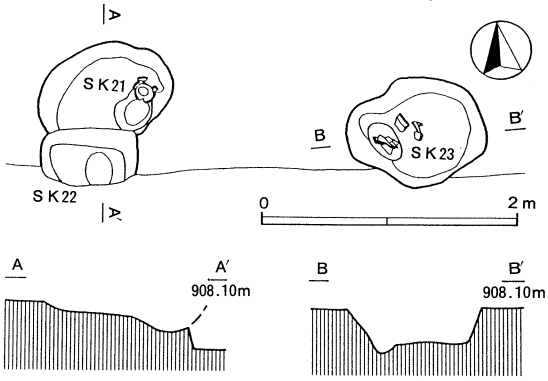
1は土壙底部に密着して出土したものである。外面には低隆帯の貼り付けが見られる。地文はささら状工具による縦位の沈線文である。器面は内外面共雑にヘラナデされ凹凸が目立つ。底部には網代痕が明瞭に残っている。2～4は沈線で区割された中に縄文を充塡したものである。11はいわゆる「J」字状文が施されたものである。3.4 についても同様な文様を構成するものであろう。また2～4の遺物は覆土中の出土であり，土壙の深さを考えると，その帰属については疑問を残す。

SK22（第58図）

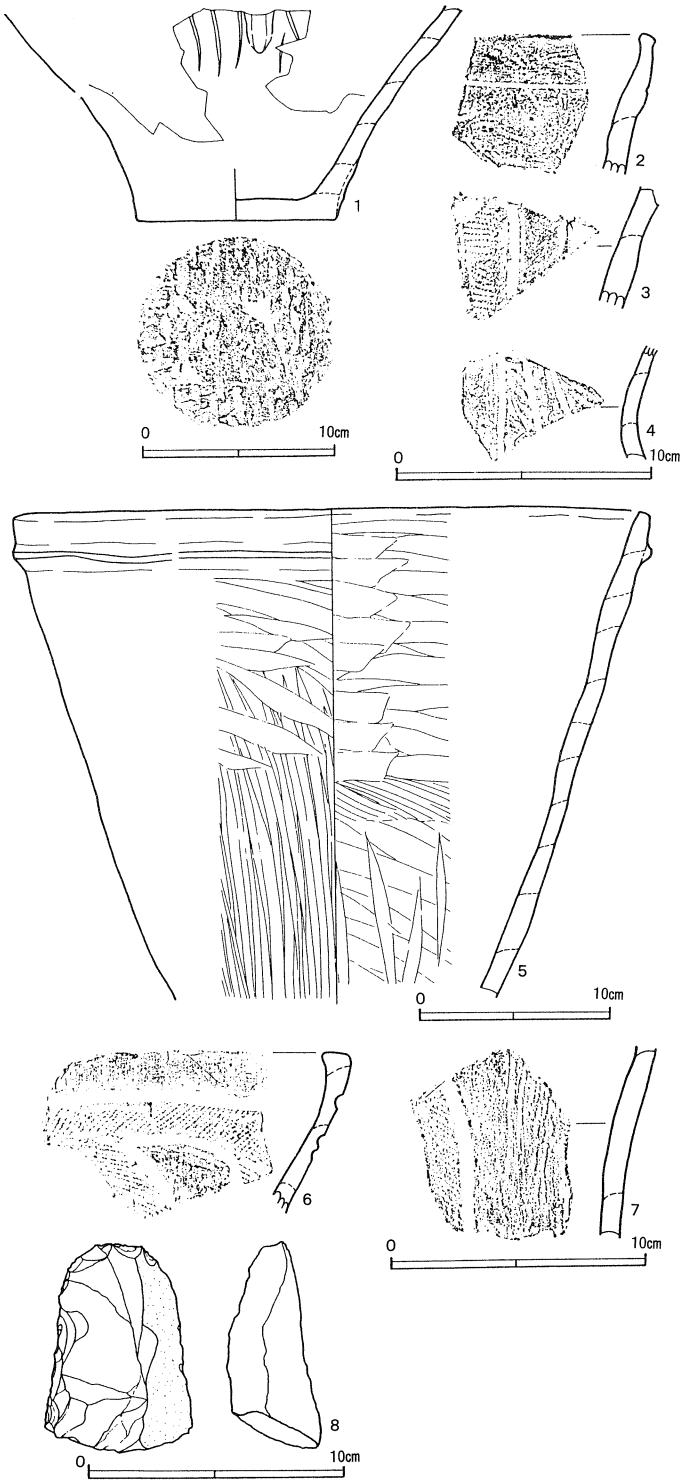
E—3区に位置する。南半を試掘トレンチにより消失している。現存長で長軸76 cm，短軸44 cmを測る。覆土は黒褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

SK23（第58図）

E—2区に位置する。長軸 107 cm，短軸87 cmを測る。西側が突出した不整楕円形プランを呈し，深さは30 cmを測る。また，土壙底部の西側に偏して小ピットが穿たれている。遺物が数点出土しているが，全て覆土中からの出土である。



第58図　SK21・22・23（1／60）



第59図　SK21・23　出土遺物

（1、5は1／4、2～4、6～8は1／3）

遺物（第59図―5～8）

5は口縁部1／3，胴部若干の残存する深鉢である。胎土は直径3～5mm大の赤色2コリアを多量に含む特徴的なもので，本遺跡で同様の胎土の土器は全く存在しない。口縁部下には粘土紐の貼り付けが見られる。外面胴下半の雑なヘラミガキの後，上半の粗いケズリに近いヘラナデが施される。内面は胴中位の粗い条線の後，胴下半は左上ヘラナデの後，縦位ヘラナデ，胴上半ヨコヘラナデが施される。6は沈線区割の中に縄文を充塡したもので，「J」字状の文様を構成するものである。口縁部外面から円面は雑にヘラミガキされる。7も6と同様の文様を構成するものであろう。8は打製石斧の断欠で，153gを計る。一部に原石面を残す。

SK24（第60図）

F―2区に位置する。長軸179cm，短軸123cmを測る楕円形プランの土壙で，深さは20cmと浅い。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量包含する。

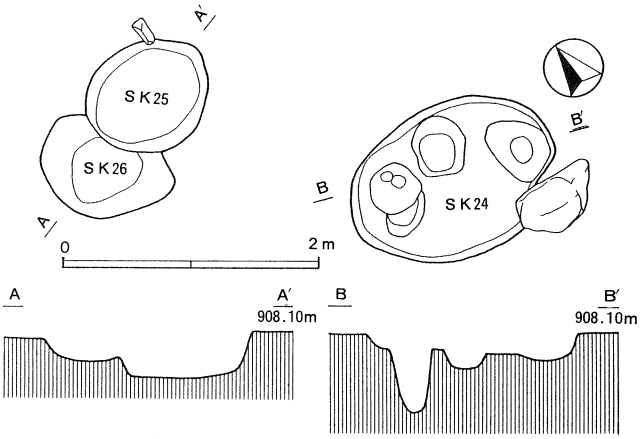
遺物は小片のみで，図化し得たのは第61国に示した2片だけである。1は浅鉢もしくは小型の深鉢の口縁部片で，内外面共丁寧にヘラミガキされる。2は深鉢の胴部片で，地文斜位の粗い条線の上に2本1単位の地文と同一原体による縦区割が見られる。下半は雑にヘラミガキが施されている。

SK25（第60図）

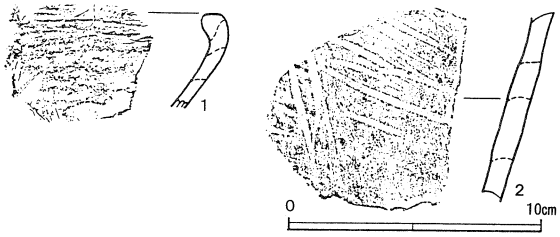
E—2区に位置し，SK26に南西部を切られている。長軸101 cm，短軸86 cmを測る楕円形プランの土壙で，深さは34 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。遺物は出土していない。

SK26（第60図）

F—2区に位置し，SK25の南西部を切り込んで構築されている。長軸105 cm，短軸72 cmを測る楕円形プランの土壙で，深さは19 cmを測り，皿形の断面図を呈する。覆土は黒褐色を呈し，炭化物粒子を含む。遺物は出土していない。



第60図　SK24・25・26（1／60）



第61図　SK24　出土遺物（1／3）

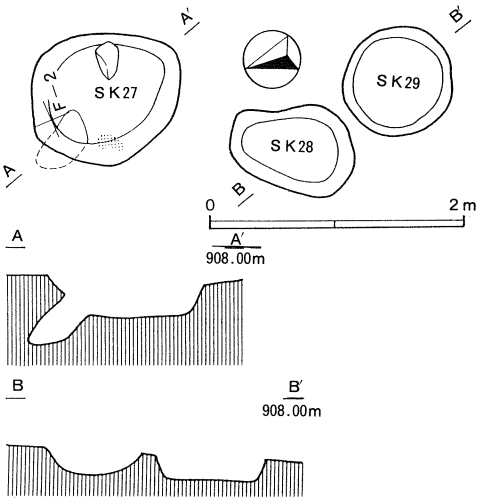
SK27（第62図）

13・14—2.3区に位置する。長軸128 cm，短軸106 cmを測る。楕円形プランを呈し，深さは32 cmを測る。壁は北側でやや緩やかに，南側で急に立上る。また，北側には斜め外方に向かって小ピットが穿たれている。覆土は暗褐色を呈する。焼土粒子を多く含み，炭化物粒子を含む。上層には焼土ブロックが含まれていた。

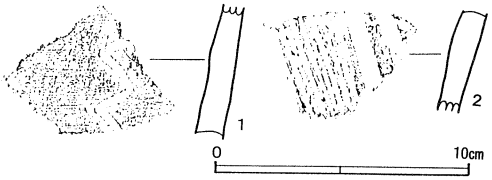
遺物は小片のみで，図化できたのは第63図の2点だけである。1は地文横位の細条線の上に蛇行懸垂文を施したものである。2は低隆帯と沈線で区割したもので，地文は斜位の条線である。

SK28（第62図）

F—3区に位置する。長軸101 cm，短軸71 cmを測る不整楕円形プランの土壙で，深さは18 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，焼土粒子を少量，炭化物粒子を多量に含む。遺物は出土していない。



第62図　SK27・28・29（1／60）



第63図　SK27　出土遺物（1／3）

SK29（第62図）

14—3区に位置する。直径約85 cmの円形プランの土壙で，深さは18 cmを測る。覆土は暗褐色を呈

し，焼土粒子少量，炭化物粒子を多量に含む。遺物は出土していない。

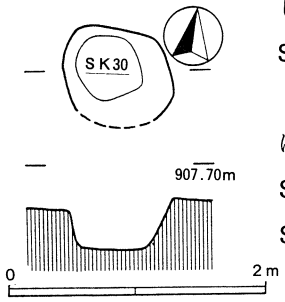
SK30（第46図）

F—3区に位置する。直径約80 cmの不整円形プランの土壙で，深さは42 cmを測る。覆土は暗褐色を呈する。遺物は出土していない。

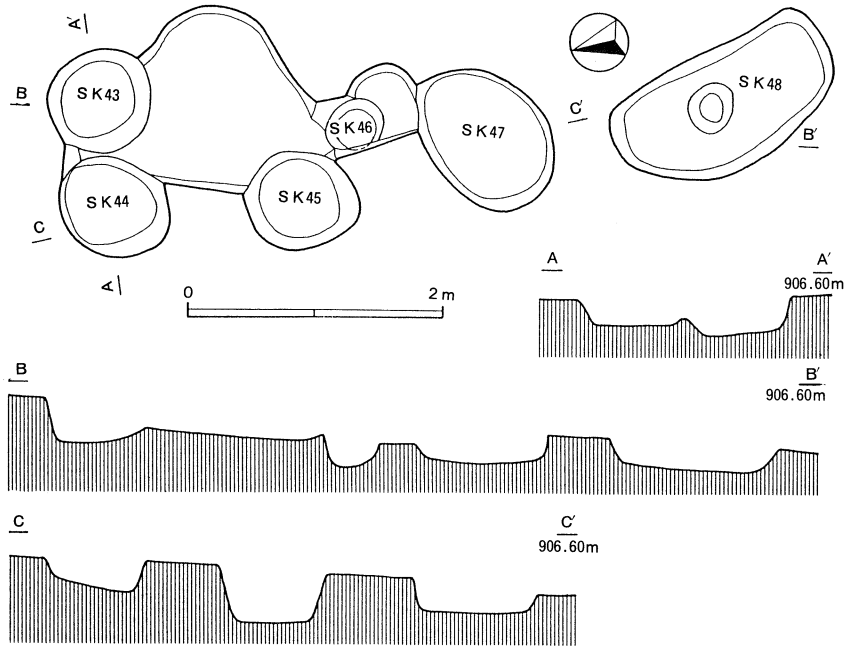
SK31～42は2号配石参照

SK43（第65図）

G-5区に位置する。直径約85 cm，深さ約31 cmを測る円形プランの土壙で、覆土は暗褐色を呈する。壁の立上りは比較的急である。遺物は出土していない。



第64図　SK30(1／60)



第65図　SK43・44・45・46・47・48（1／60）

SK44（第65図）

G—5区に位置する。直径約90 cmを測る円形プランの土壙で，深さは23 cmを測る。覆土は黒褐色を呈し，炭化物粒子，焼土粒子を含む。遺物は出土していない。

SK45（第65図）

G—5区に位置する。直径約90 cmを測る円形プランの土壙で，深さは43 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し炭化物粒子を含む。遺物は出土していない。

SK46（第65図）

G—5区に位置する。直径約43 cmの円形プランの土壙で、深さは22 cmを測る。覆土は暗褐色を呈する。遺物は出土していない。

SK47（第65図）

G—5区に位置する。長軸 123 cm，短軸93 cmを測る楕円形プランの土壙で，深さは24 cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む。

SK43～47は不整形の落ち込みの中に構築されているが各々の土壙は切り合わずに存在する。

SK48（第65図）

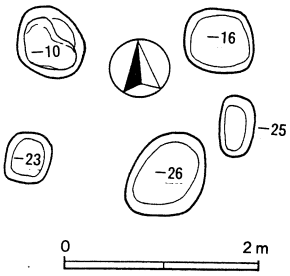
G—5区に位置する。主軸N—1°—W を指す。長軸184 cm,短軸97 cmを測る不整楕円形プランで，深さは20 cmを測る。底部には直径約35 cmの小ピットが穿たれる。置物は出土していない。

以下では地点毎にある程度まとまりのあるものについてピット群として記述を進める。また，少数ではあるが遺物を出土しているものもあり，それについては別に土壙番号を振り記述していく。

C—6区ピット群（第66図）

C—6区に位置する。北2mにSB06，東1.5mにSK17が存在する。

このピット群は5本のピットで構成されている。規模は50cm～90cmを測るもので，いづれも堀り込みが明確ではなく浅い。

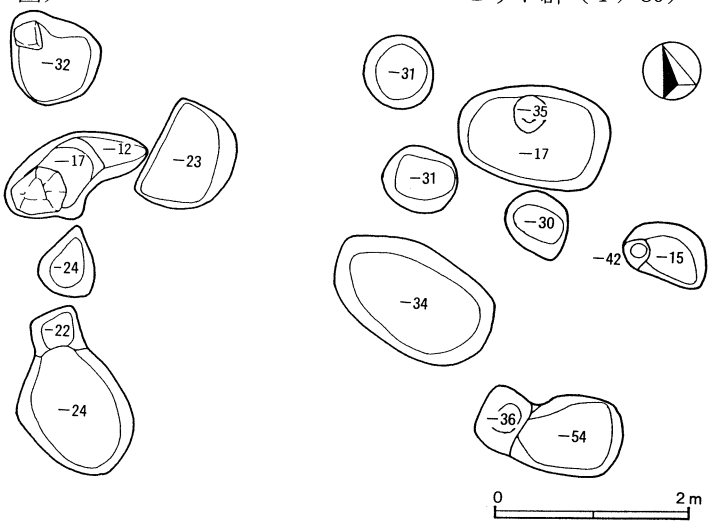


第66図　C—5区ピット群（1／80）

B．C—6．7区ピット群（第67図）

B．C-6.7区グリッド杭周辺に位置する。C-6区ピット群とは4mほど離れて存在する。

不整型のピットが多く，また，規模もバラバラである。堀り込みはいづれも明確でなく，底面が不整面を呈するものが多い。また，浅いものが多い。覆土中に礫を包含していたものもあるが，被熱した礫は見られなかった。遺物は出土していない。



第67図　B．C—6・7区ピット群（1／80）

E．F—4～6区ピット群（第68図）

E．F—4～6区に亘って展開している。西側に近接してSB05，3号配石が位置し，南側には風倒木痕が4ケ所検出されている。このピット群の斜面上部に位置するものは，田普請時の段切りによる削平の影響で遺存状態の良くないものが多い。

ピットは不整形を呈するものが多く，規模にはバラつきが見られる。ほとんどのピットは堀り込みが明確ではなく，底面が不整面を呈するものが多い。また，浅いものが多い。覆土はほとんどが暗褐色～黒褐色を呈する単一層であった。混入物としては多くのものに炭化物粒子とローム粒子が少量包含されていた他，稀に焼土粒子を包含したものも存在した。覆土中に礫を包含したピットも少数ではあるが認められているが，それらの礫の中に被熱したものは認められなかった。

遺物を出土したピットはSK49～52の4基だけである。個々に詳述する。

SK49　F—5区に位置する。地山の80cmを越す巨石の東端に堀削されている。長軸38cm，短軸19cmを測るだけの楕円形プランの小ピットである。深さは17cmで測る。覆土は黒褐色を呈し炭化物粒子，ローム粒子の混入が見られた。遺物は被片となって上層から出土している。

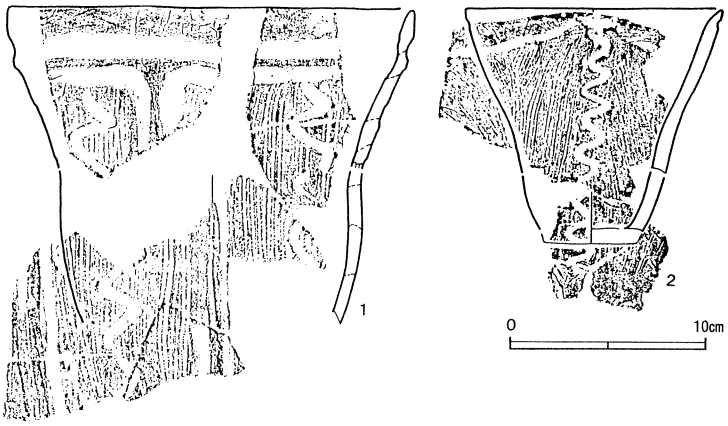
第68図　E・F—4・5・6区ピット群（1／80）

遺物は第69図に示した2点が出土している。1は推定口径20.6cmを測る中型の深鉢である。現存高は16.2cmを測る。低隆帯とユビナデによる区割の中に棒状工具による蛇行懸垂文が見られる。2は推定口径13.2cm，残存高11.3cmを測る小型の深鉢である。口縁部にはささら状工具により弧状の沈線が施される。胴部には同一の原体で蛇行懸垂文が施されている。また，弧状沈線の基部には指で小突起をつまみ出している。煮沸の痕跡が認められる。

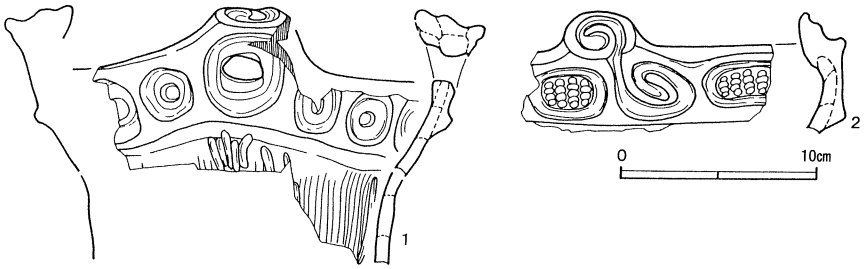
SK50　F—5区に位置する。地山の60cmを越す石の東端に接して構築されている。長軸50cmを測るやや不整の楕円形を呈する。深さは28cmを測る。覆土は暗褐色を呈し，炭化物粒子を少量含む単一層である。

遺物は第70図に示した２点が出土している。共に破片となって上層から出土している。いづれも口縁部片のみの出土で，胴部片は全く出土していない。意図的に埋納したものであろうか。

１は頸部に棒状工具による沈線が施されている。内面はヘラナデが施されている。２は口縁部の楕円文の中に単節RLが施されたものである。内面は丁寧にヘラミガキが施されている。

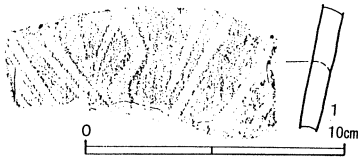


第69図　SK49　出土遺物（１／４）



第70図　SK50　出土遺物（１／４）

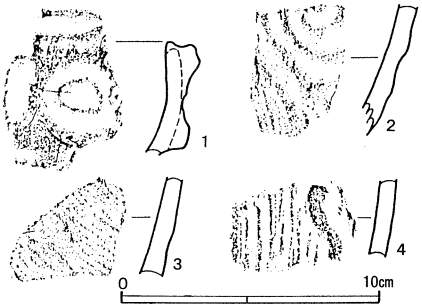
SK51　E－５区に位置する。長軸 118 cm，短軸106 cm を測る楕円形プランを呈し，深さは27 cmを測る。堀り込みはあまり明確ではないが，断面形は円柱状を呈している。覆土は暗褐色を呈する単一層で，炭化物粒子，焼土粒子を包含している。また，覆土中から礫が出土しているが，被熱は認められない。



第71図　SK51　出土遺物（１／３）

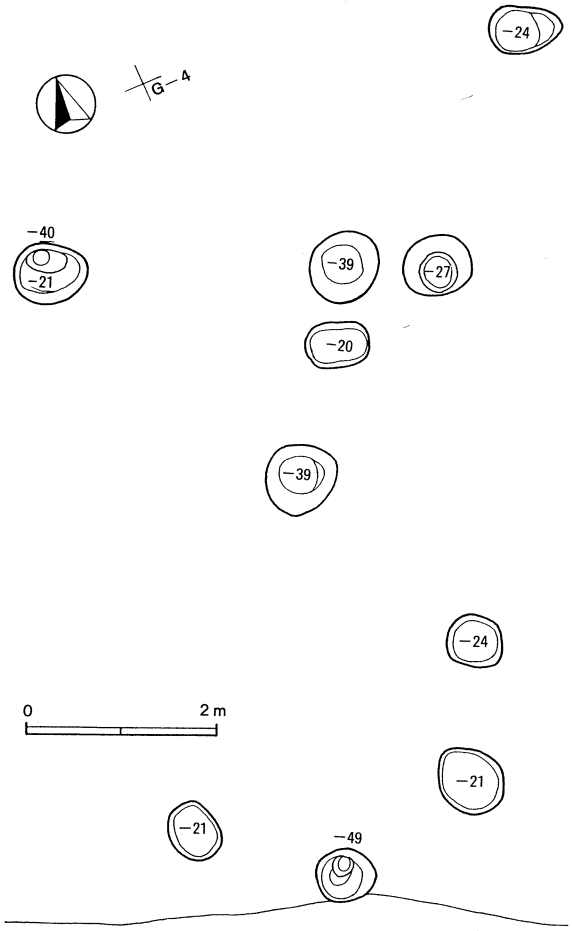
遺物は第71図に示した１片だけが覆土中から出土している。外面には半截竹管による蛇行懸垂文が見られる。地文は棒状工具による浅い斜行沈線文が施されている。

SK52　F－５区に位置する。長軸 134 cm，短軸 126 cm を測る不整形プランの土拡で，深さは35 cmを測る。直径約30 cmの小ピットと切り合うが先後関係は不明。また，底部には小ピットが穿たれている。覆土は暗褐色を呈する単一層で，ローム粒子の混入が見られた。



第72図　SK52　出土遺物(1／3）

遺物はいづれも小破片のみで，図化し得たのは第72図に示した４片だけである。１は楕円文の見られる口縁部片である。２は低隆帯により渦状文の施される小型の深鉢の破片である。地文は縦位の条線である。３は外面に単節RLを横位に施文したものである。４は隆帯による蛇行懸垂文の見られる深鉢で，地文は縦位の条線である。



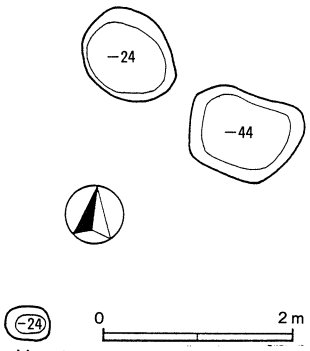
第73図　G—4・5区ピット群（1／80）

G—4．5区ピット群（第73図）

G—4．5区に位置する。西側に近接してSK43～48が構築されている。ピットの規模は直径60 cm～80 cmを測り，比較的まとまりがある。プランも円形あるいは楕円形で不整形を呈するものはない。堀り込みも全体にしっかりしており，断面形も円柱状あるいは鍋底状を呈するものがほとんどである。覆土はいずれも単一層で黒褐色～暗褐色を呈する。混入物として炭化物粒子，ローム粒子を包含し，稀に焼土粒子の混入も見られる。覆土中からの遺物は，礫等を含めても全くない。

G—5区ピット群（第74図）

G—5区に位置し，東側に近接してSK43～48が構築されている。ピットは3基であるが内2基は長軸1m を越すもので、1基は長軸50 cmを測るだけである。プランはやや不整のものであるが楕円形で，堀り込みは不明確である。覆土は炭化物粒子を微量含んだ暗褐色土層である。遺物は出土していない。

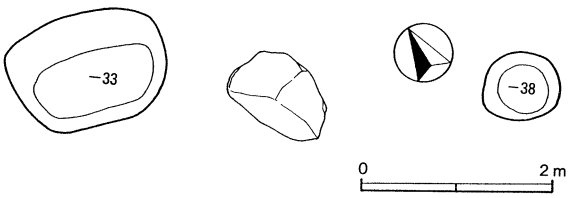


第74図　G—5区ピット群（1／80）

F—6区ピット群（第75図）

F—6区に位置する。地山の巨石を挟んで2基のピットが構築されている。東側のものは直径80 cmほどの円形プランを呈し，西側のものは長軸 160 cm，短軸118 cm を測る不整楕円形プランを呈する。底部はやや不整面を呈する。覆土は共に暗褐色を呈する単一層で，ローム粒子を含む。遺物は出土していない。

以上が調査された土壙，ピットの全てであるが，この他に立合い調査に伴ないE—3．4区で数基の土壙が確認されている。しかし調査の性格上時間的に手が及ばなかった。集落の空間利用を知る上で障害となっている。



第75図　F—6区ピット群（1／80）

5　遺構外出土の遺物

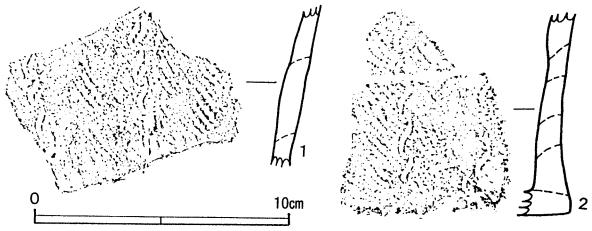
ここでは表土中の遺物，包含層中の遺物，表採資料について述べていく。

縄文土器（第76図～83図）

本遺跡からは縄文時代中期初頭（五領ケ台式）から後期前葉（堀ノ内式）の土器片が出土している。これらの遺物は調査区東半からやや集中して出土しているが，調査区南西部についてはほとんど見られず，その分布にバラツキが見られる。

1　中期初頭（第76図）

中期初頭に位置付けられる遺物は第76図－1．2のみである。これらは同一個体で，その破片はSB02，SK04，F－2 グリッド上面，F－3グリットと広い範囲に散っていた。施文順位は単節RL→磨り消し→縦位 S字結節文。胎土には金雲母が多量に含まれ橙褐色を呈している。焼成は良好である。



第76図　土器（1／3）

2　中期後葉（第77図～81図）

3は大型の深鉢の口縁部片である。口縁部は無文で内外面共ヘラミガキされる。頸部には沈線が巡る。4は地文LR単節，粘土紐2本が弧状に貼り付けられる。

5～11は口縁部に楕円文の見られるものである。胴部の文様について見ると5は区割文，6～9は沈線，隆帯で縦区割するものである。8．9には蛇行懸垂文が見られる。8の地文は棒状工具による羽状の沈線文である。

12～17は口縁部に1～2本の粘土紐を弧状に貼り付けたものである。12は渦巻つなぎ文が見られる。地文は12，15は斜位の条線，17は羽状の条線，他は縦位の条線が見られる。13は胴部を蛇行懸垂文のみで縦に区割するものである。

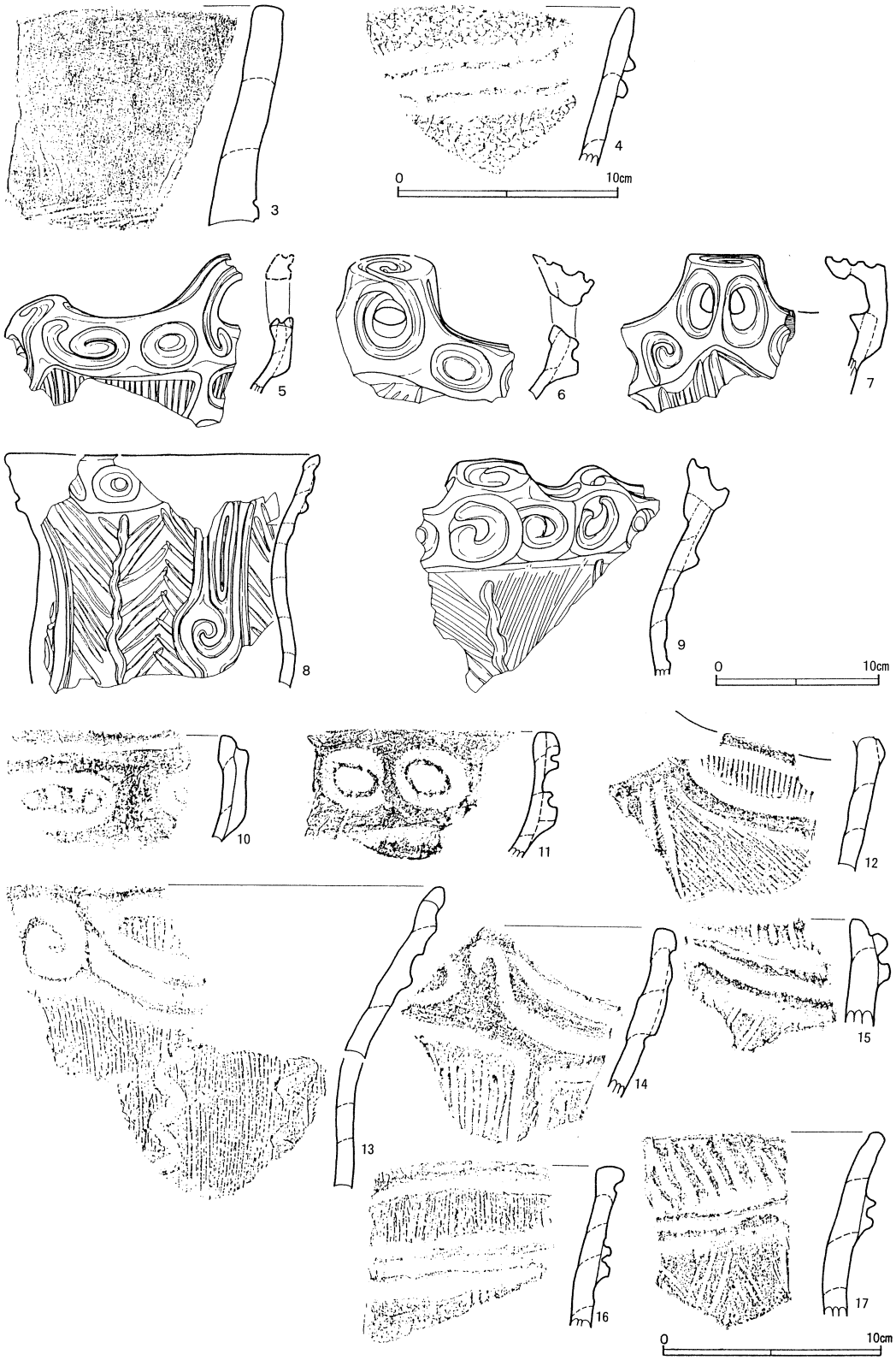
20，21は波状口縁を呈し，波状部には沈線による渦巻つなぎ文が見られる。

22～24は平口縁で口縁下に沈線の巡るものである。22は区割の中に波長の短い蛇行懸垂文が見られる。地文は斜位，縦位の条線が雑に施されている。23の地文はLR単節を上→下に施文したものである。24の地文は単節RLである。

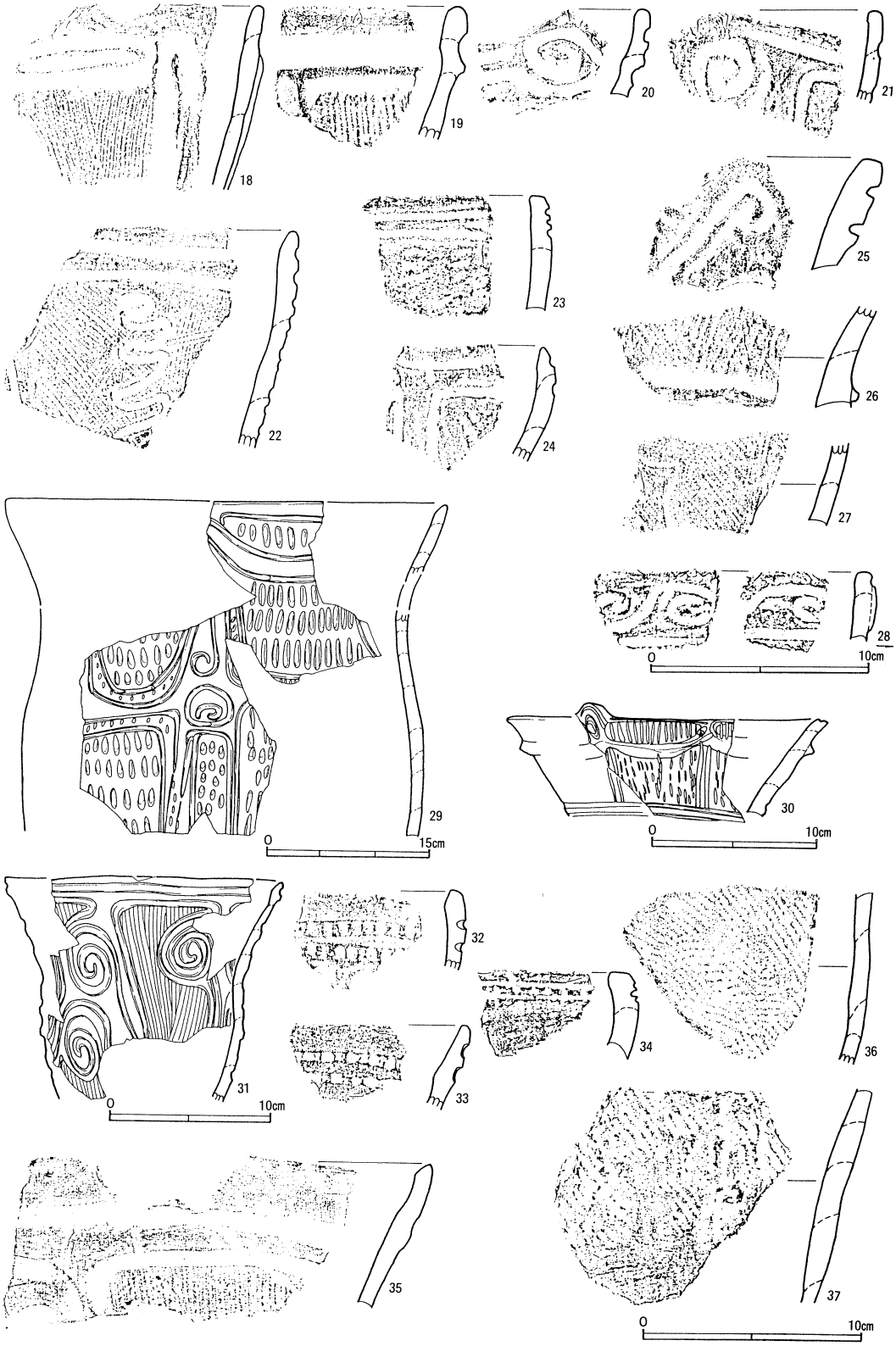
25～27は同一個体の破片である。地文は羽状の細条線で，頸部には隆帯を巡らす。胴部にはささら状工具による蛇行懸垂文が見られる。

23．30は地文に刺突文をもつものである。29は推定口径41.0 cmを測る大型の深鉢である。区割は沈線文のみによる。30は口縁部1／8の小型の深鉢の破片である。口縁部には突起が見られ，渦巻文が施される。

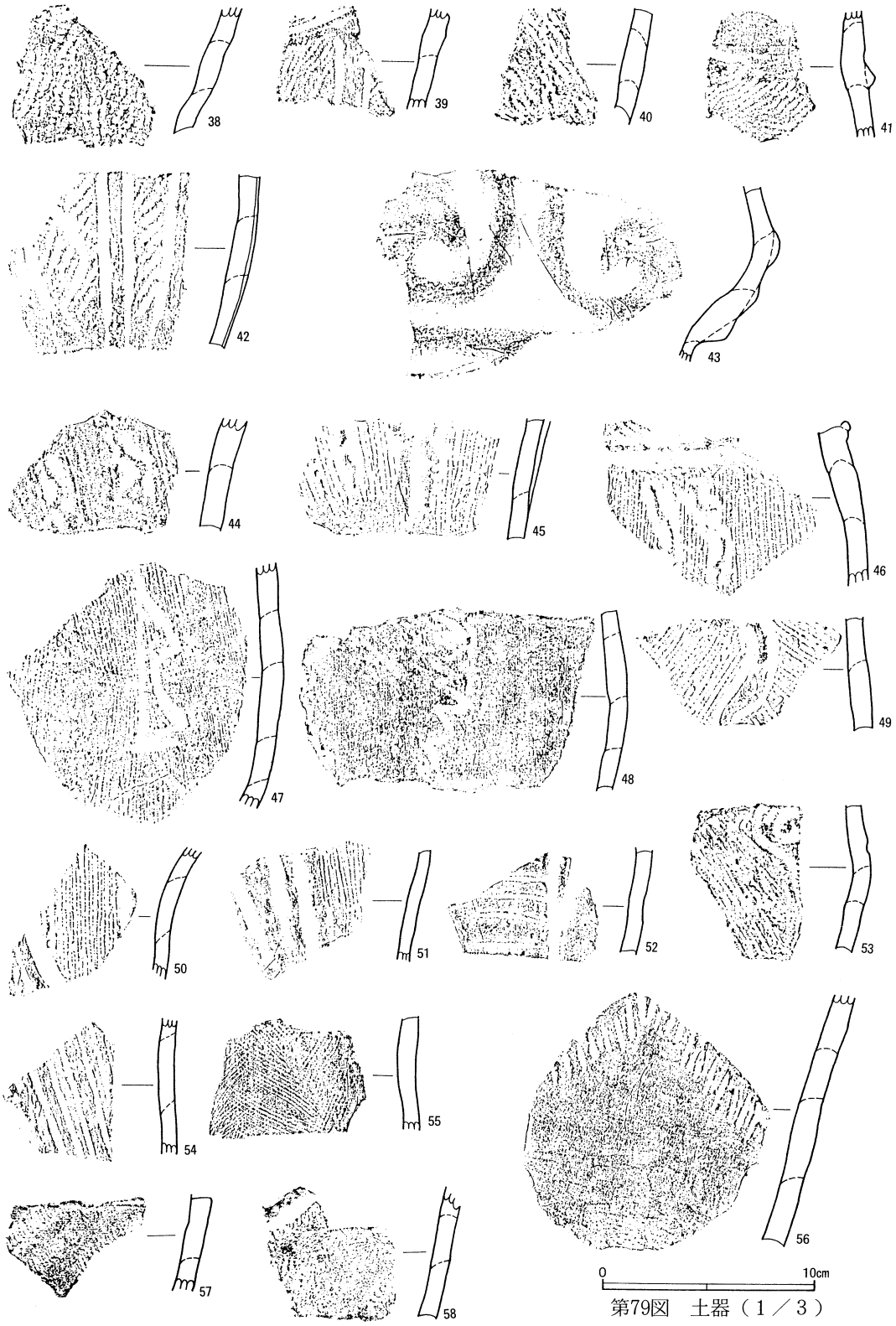
32～34は口縁下に沈線の巡る中～小型の深鉢である。32．33は半截竹管による浅い沈線の中に棒状工具で刺突を加えたものである。



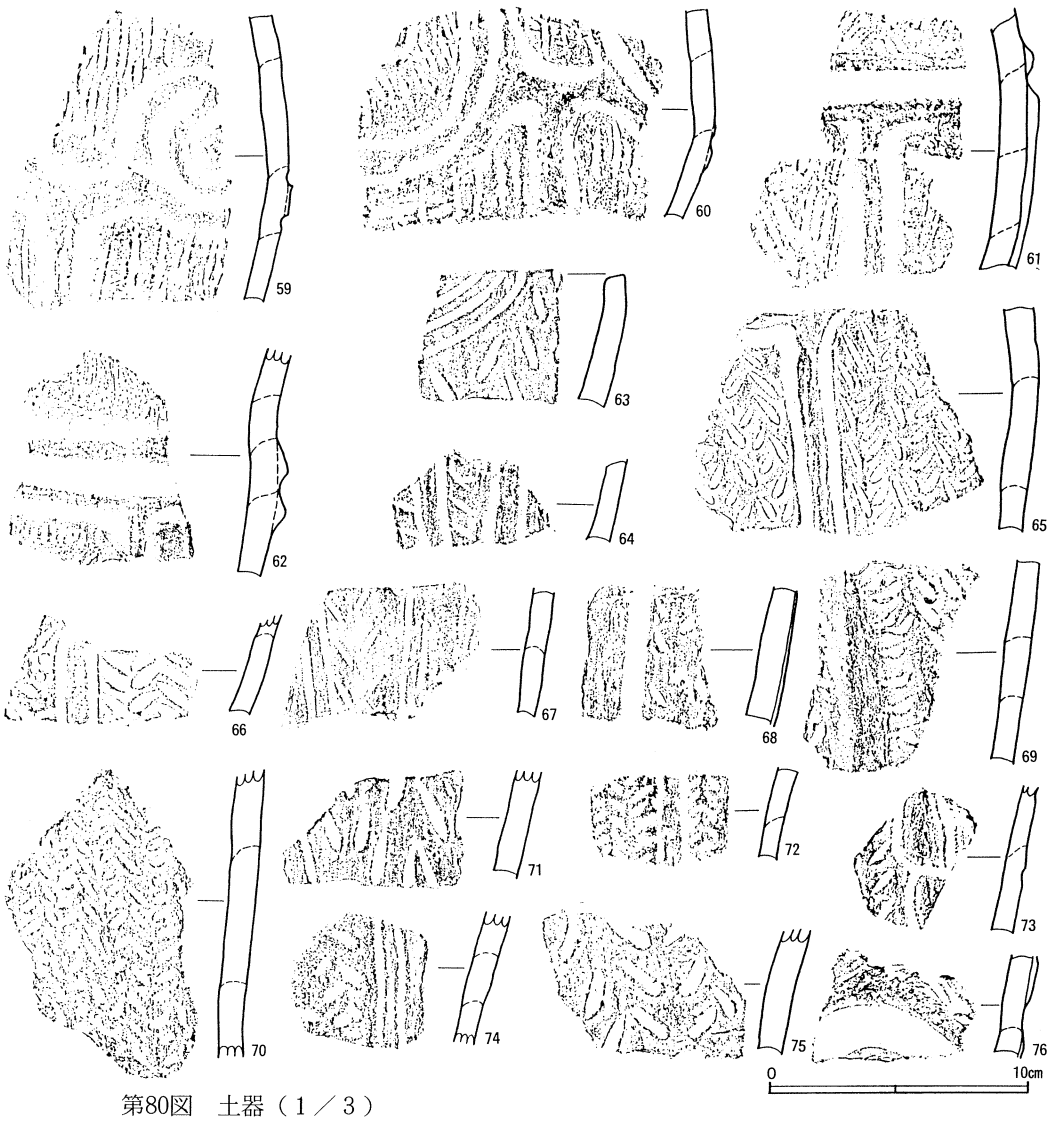
第77図　土器（3・4、10～17は1／3、5～9は1／4）



第78図　土器（18～28、32～37は１／３、29は１／６、30・31は１／４）



第79図　土器（1／3）



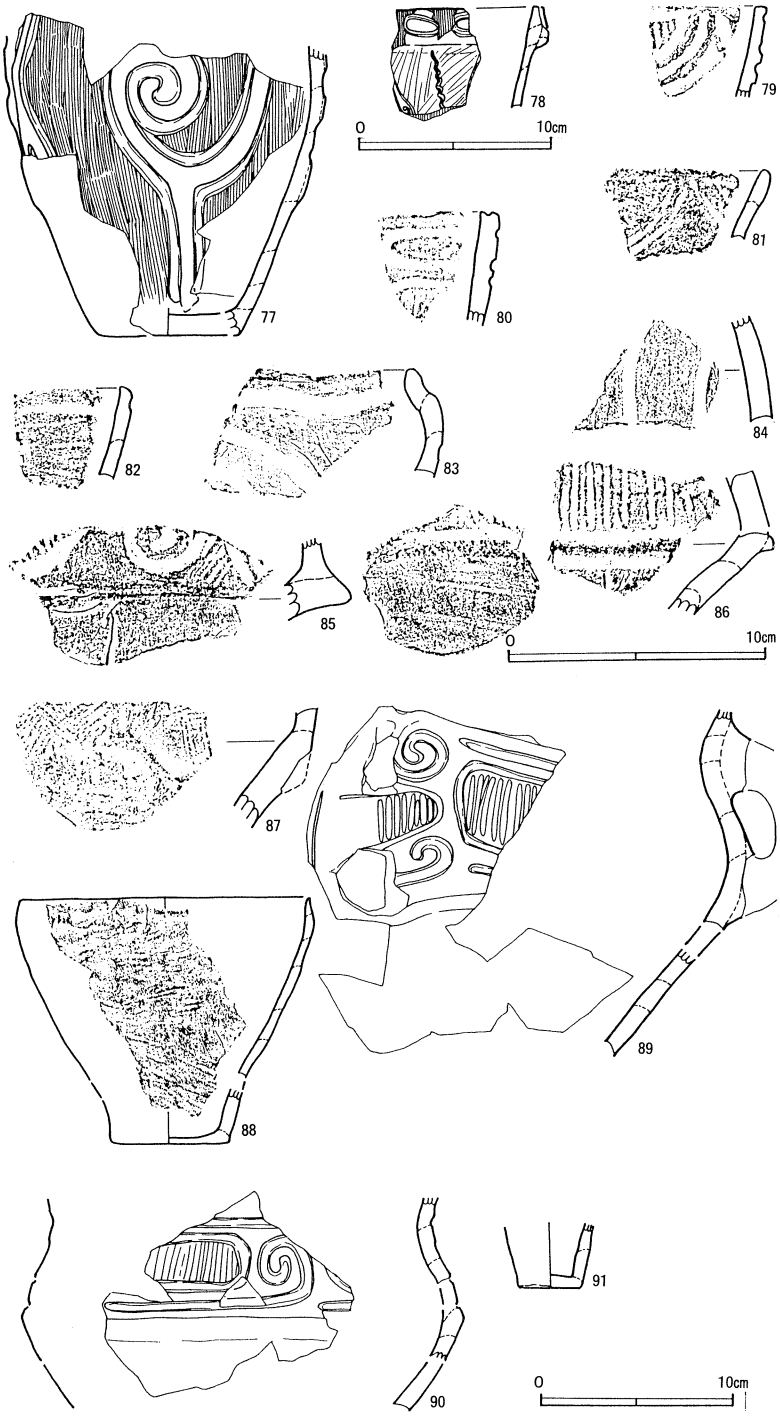
第80図　土器（１／３）

36～42は地文に縄文が施されるものである。39，42は２本の沈線によって縦位に区割される。40は縦位の15字結節，41は横位の隆帯が見られる。44～49は蛇行懸垂文の見られるものである。44～46，49は隆帯により，47．48は沈線による。地文は49が羽状の条線，48はヘラナデのみで地文が見られない。他は縦位の条線。

57．58は同一個体である。地文は櫛状工具による斜位の刺突が見られる。

63～76はハの字状文が施されるものである。63は口縁部に弧状の沈線が見られる。65は低隆帯と沈線によって，64．66～68．72～74は沈線によって，69は隆帯によって区割される。また，76には渦状の隆帯が見られる。

77は小型の深鉢である。胴部４／５，底部若干残存，胴部には太い隆帯で渦状文が施される。地文は縦位の条線である。



第81図　土器（77・78、88～91は１／４、79～87は１／３）

78～82は小型の深鉢の口縁部片である。78は複合口縁を呈し，胴部には蛇行懸垂文が見られる。82の地文は単節LRを縦位に施文したものである。

83．84は浅鉢であろうか。共に胴部には半截竹管による沈線が施される。器内外面共，丁寧にヘラミガキされる。

85～87.89.90は鉢である。85．90の器面は丁寧にヘラミガキされている。87は羽状の条線が施されたもので，下半は雑にヘラミガキされている。

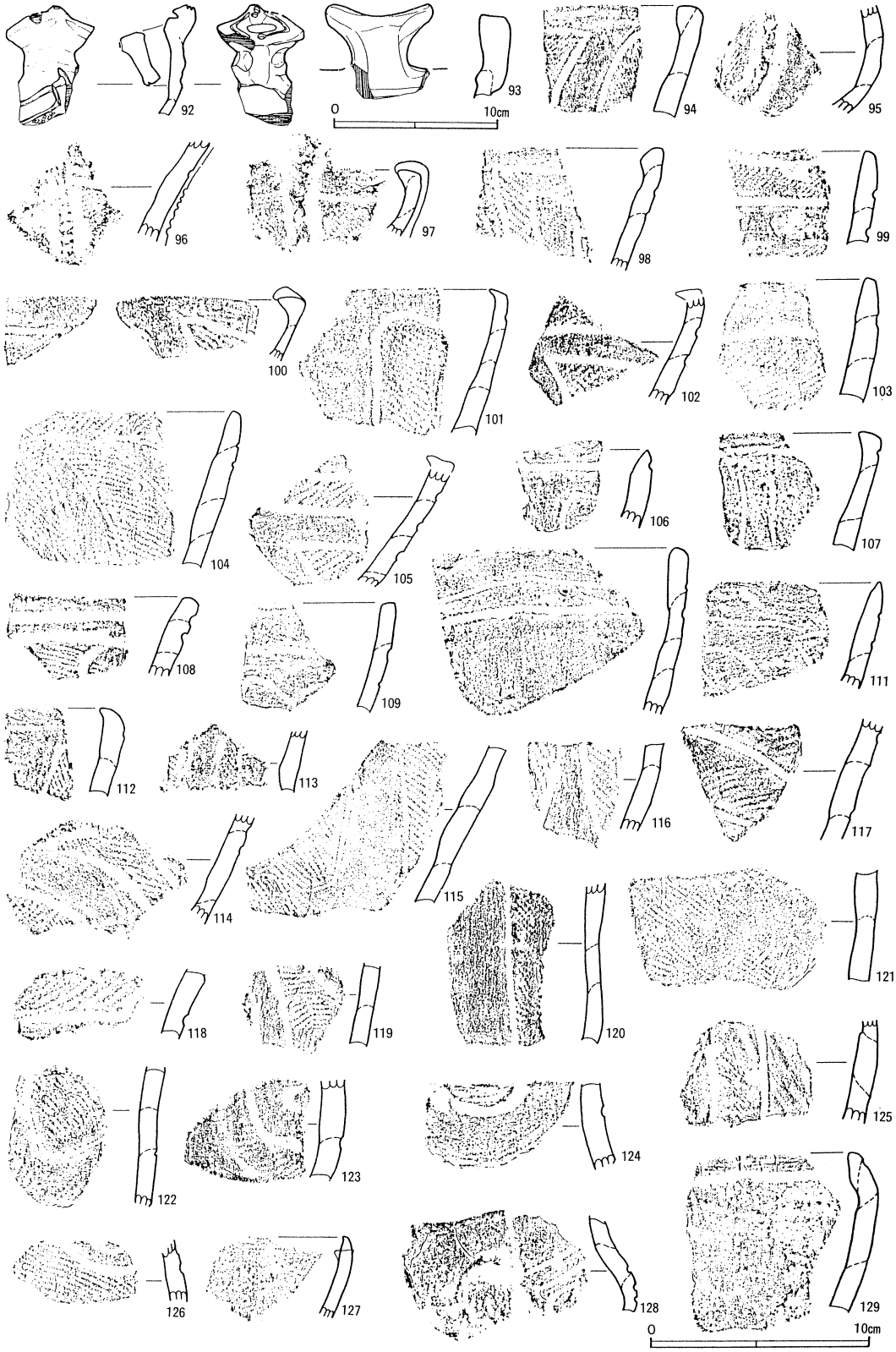
88は小型の深鉢である。地文は無節ｒが施文されている。器厚は薄く，内面は丁寧にヘラミガキされている。器外面には煤の付着が見られる。

91はミニチュア土器である。輪積み，あるいは巻き上げ成形される。

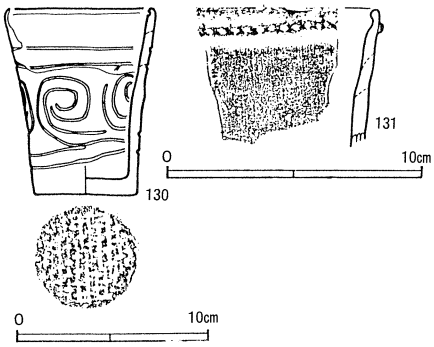
3　中期終末～後期初頭（第82図）

本遺跡では中期後葉～終末の遺物に混じって少量の後期初頭の遺物が出土している。いづれも小破片で時期決定が困難であるので，ここでは一括して記述する。

92～126 は深鉢である。92．93は口縁の突起部である。92は沈線で区割された中に単節LRが充塡される。被熱しており，器形に歪みを生じている。93は T字状の突起で，内外面共ヘラ



第82図　土器（92・93は１／４、94～129 は１／３）



第83図　土　器
（130 は１／４、131 は１／３）

ミガキされる。

95～97は粘土紐の貼り付けの見られるもので，各々の隆帯にはキザミが見られる。

94．98～105，108．112 ～126 は縄文＋沈線文で文様が構成され，他は沈線文のみで文様が構成されている。

94.98.102.104.105.112. 114～117，121.125は「７」字状もしくは「J」字状の文様を構成するものである。施文順位は概ね沈線区割→縄文充塡→無文部へラミガキであるが，121 は沈線区割を無視して縄文が施文されている。

127.129 は浅鉢である。127 は口唇部に指頭による押捺が見られる。器面はケズリに近いヘラナデが施されている。129 は口縁下に沈線が巡る。器面は雑にヘラミガキされる。

128 は鉢である。把手の剥落が見られる。胴部中央に３条の沈線が巡る。

4　後期前葉（第83図）

後期前葉の遺物として，本遺跡からは第83図に示した２個体のみが出土した。

130は口径 7.8 cm，器高 9.8 cmを測るコップ形の土器である。胴部には上下２本ずつの沈線間に渦巻文が連続する。原体は全て同一で，ささら状の工具が用いられている。器内面はヘラナデが施される。底部には網代痕が明瞭に残っている。

131 は深鉢の口縁片である。口縁下には細い隆帯が付され，その上にはヘラ状工具による刻みが見られる。内面には口縁下に浅い沈線が巡る。内外面共に雑なヘラミガキが見られる。

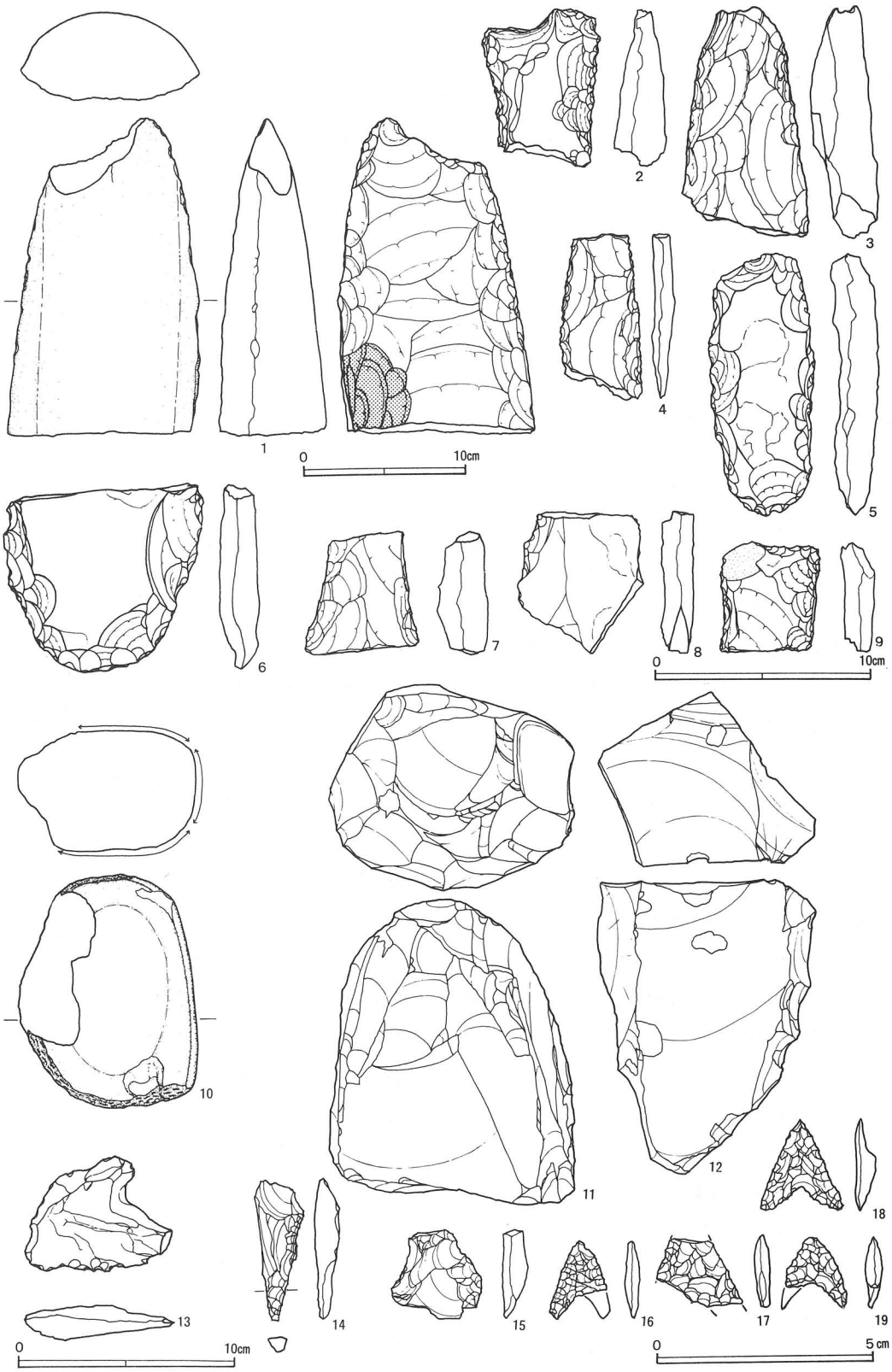
石器（第84図）

本遺跡からの石器出土は極めて少なくここに提示したものが石器として認定し得たもののほとんどである。

１は石棒転用の両刃器である。1865ｇを計る。一部焼成を受け赤変している。２～９は打製石斧である。完形品は５のみで他は断欠。３は 167.5ｇ，４は32.0ｇ，５は 132.5ｇ，６は 150.0 ｇを計る。10は磨石である。周囲には敲打痕が見られる。重量 750ｇを計る。11,12 は黒曜石の石核である。重量は11が 200ｇ，12が98.6ｇを計る。本遺跡からは同様の黒曜石製の石核が他に数点出土している。13は石匙である。本遺跡唯一のものである。37.9ｇを計る。14は黒曜石製の石錐である。1.1 ｇを計る。15～18は黒曜石製の石鏃である。19はチャート製である。重量は15は 1.1ｇ，16は 0.4ｇ，17は 0.8ｇ，18は 0.4ｇ，19は 0.8ｇを計る。

その他

本遺跡からは中・近世の陶器片が数点出土しているが，いづれも小片で資料化できるものはなかった。



第84図　石器（1は1／4、2～10、13は1／3、11・12・14～19は2／3）

Ⅵ まとめ

今回の方城第１遺跡の調査では幸運にも縄文時代中期後葉の小集落のほぼ全容を摑むことができた。これは全県的に見てもほとんど例のないことである。調査に際しては十分手の行き届かない部分があったが，ここではその中で気のついたことを若干述べてまとめとする。

方城第１遺跡の縄文集落は多数の湧水によって開析された標高 905～ 910mを測る痩せ尾根の西側斜面を中心に展開しており，その領域は東西70m，南北60m程度を測る狭いものであった。その形態は環状もしくは馬蹄形を呈するものであるが，これは当初より計画的に住居を配列したものとは考え難く，初めは無秩序に建てられた２～３軒の住居が結果的にこういった形態を取るに至ったものであろう。

集落の空間の利用を見ると，外側より土壙，配石遺構－住居址－土壙，配石遺構－遺構空白（厳密な意味ではなく，土壙等いくつか見られるだけの空間）という遺構の配置が見られる。このことから集落の外周上に居住域，配石遺構等の祭祀の場が設けられ，集落の内側には墓壙的な性格を帯びた土壙がそれほど密集することなく展開していることが解る。また今回の調査では祭祀遺構を中心とした広場的空間、土器留り等の廃棄の場は確認できなかった。

個々の遺構を見ていくと今回の調査で注目されるものとしてSB02の奥壁部の特殊な石組 遺構が挙げられる。これは炉の石組を利用したもので，下部に他の主柱穴とは明らかに異なった規模の大きい土壙が伴なっている。同様な遺構がSB03にも存在した可能性については遺構 の記載中にも述べた通りである。また，他の住居址（SB01，SB07）についても炉と奥壁の 間にピットが存在し，必ずしも石組遺構を伴なわなくとも同様の機能（内容については検討を要するが）がこの空間に存在したことは想像に難くない。

近隣の調査例を見ると，長坂町柳坪，頭無の両遺跡にその類例が見られる。石組を伴なったものとして柳坪A地区８号住居址，同10号住居址，柳坪B地区16号住居址が挙げられる。この内A地区10号住居址はピットを伴なわないものである。また，柱穴，あるいは単に土壙として報告されたもので他の柱穴の規模，形態と異なり特殊性が指摘し得るもの，あるいは炉との位置関係から柱穴として考え難いものは柳坪遺跡B地区１号住居址，同７号住居址，同10号住居址，同24号住居址，頭無遺跡９号住居址，同12号住居址，同14号住居址等が挙げられる。他の柱穴の規模，形態と大して違わないものについては，その類例はかなりの数に上る。これらについても単に柱穴とせず，土層や住居の構造を十分検討して見ればSB02，SB03と同様な 機能をもったものが抽出できるであろう。予想としては当地域の該期の集落ではかなりの普遍性が認められると思われる。

また，今回の調査では住居址の大きさにはある程度まとまりがあることに気が付く，すなわち大型の住居址としてSB02，SB03，SB06，小型の住居址としてSB01，SB04，SB05 ，中間に位置づけられるものとしてSB07が考えられる。大型の住居址としたものには特に規 格

性が強く認められ，柱穴の位置，炉址の形態までその規格性が認められる。

次に遺物について見ていくと，石器の極めて少ないのに気がつく。

近隣の同時期の遺跡を見ていくと1住居址あたりの石器の数量は4～6個であるのに対し，方城第1遺跡からは1住居址平均 1.4個しか出土していない。また，その内訳を見ると，他の遺跡ではかなりの高い比率で凹石，磨石が出土しているのに対し，本遺跡からは住居址から2点，遺構外を含めても7点しか出土していない。これを比率に直すと住居址出土の20％，遺構外出土を含めた石器総数の20.6％となっている。昨年調査された姥神遺跡を見ると住居出土石器総数の46.3％，また長坂町柳坪遺跡，頭無遺跡でも同様の数値が得られており，今回の例とは大きな隔りがある。

石器組成はその集落における生業，生活を知る上で重要な手がかりとなる。今回の調査では石器出土数が極めて少なく，その内容も磨石，凹石の比率が20％程度という他の遺跡の約半分の比率しか占めないという興味深い結果が出た。これが該期の大集落と小集落の差として一般化できるのか，それとも本遺跡例だけなのか，今後の資料の増加を待たねばならない。また，縄文時代中期後葉は当地域にあっては遺跡の数が飛躍的に伸びる時期である。この様な中で，この時期に既に集落間における分業が存在した可能性が指摘されており，今回の調査の結果はこの問題についても重要な示唆を与えてくれるものであろう。

次に使用された石材について見ると，石鏃，石錘の製品，あるいは石核，剥片を見るとほとんどが黒曜石製であり，チャート製は第84図－19に示した石鏃がたった1点あるのみである。これは石核，剥片の全くないことから製品としてこの集落に入ったことが明らかである。（必ずしも交易等の結果としてではなく，ある時期この集落のまわりが狩猟の場であった可能性がある。）該期の近隣の集落では比率的にはそれほど高くないにしろ普遍的に見られる石材であることを考えるとこれは極めて興味深い結果といえよう。

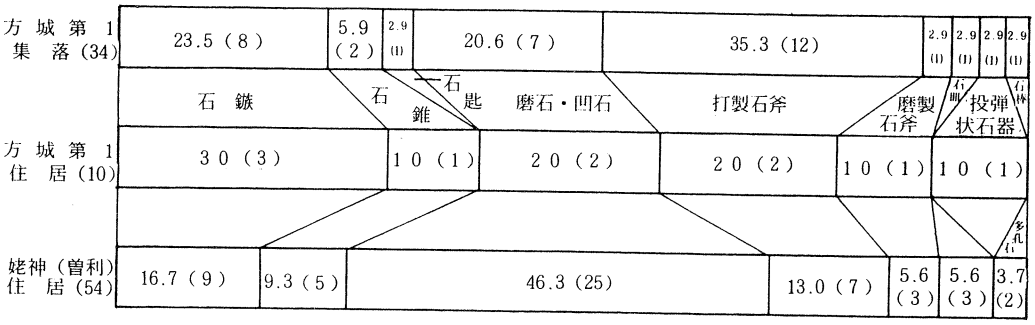


表1　出土石器組成表　　（上は％、（ ）内は資料数）

また，遺物の性格について見ると，祭祀遺物の欠落が指摘できよう。当該期の集落址からは多量の石棒，丸石，土偶といった祭祀と関連づけて説明される遺物が出土して話題となることが多いが，当遺跡からは石棒の断欠が2点出土しているのみで，丸石，土偶に至っては全く出土していない。一般に小集落からは，これらの祭祀遺物の出土は少ない傾向にあるが，これ

	一の沢遺跡（井戸尻～曽利Ⅰ　12軒）		頭無遺跡（曽利Ⅱ～Ⅴ　14軒）		柳坪遺跡Ａ（曽利Ⅰ～Ⅳ　11軒）		柳坪遺跡Ｂ（曽利Ⅱ～Ⅴ　17軒）	
	総　数	1軒あたりの数	総　数	1軒あたりの数	総　数	1軒あたりの数	総　数	1軒あたりの数
凹　石	25	2.08	152	10.86	35	3.18	33	1.94
打製石斧	95	7.92	104	7.43	36	3.27	23	1.35
磨製石斧	23	1.92	12	0.86	6	0.55	6	0.35
石　皿	3	0.25	17	1.21	4	0.36	3	0.17
石　棒	1	0.08	3	0.21	0	－	1	0.06
多孔石	1	0.08	39	2.79	3	0.27	1	0.06
磨　石	18	1.50	11	0.79	5	0.45	5	0.29
石　匙	17	1.42	5	0.36	3	0.27	4	0.24
石　鏃	7	0.58	3	0.21	12	1.09	10	0.59
軽　石	1	0.08	9	0.64	1	0.09	1	0.06

表２　縄文時代中期後半の集落遺跡における石器出土数　（米田 1986 より転載）

は何に起因するのであろうか。特に今回の調査例では遺物は少ないながら配石遺構の存在が認められ，この集落独自の祭祀の行なわれたことが判明している。にもかかわらず祭祀遺物の欠落が見られるのである。今後検討していかなければならない問題である。

以上，今回の調査の成果から導き出された問題点，疑問点について述べてきたが，結果的には該期集落を研究する上で従来から指摘されてきた問題点を追認したに過ぎない。今後の課題とするには問題が大きすぎるが，一つ一つを確実に位置付けるよう研究を進めて行かねばならない。

〔引用参考文献〕

櫛原功一　1986　『豆生田第３遺跡』

櫛原功一　1987　『姥神遺跡』

末木　健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査－北巨摩郡長坂，明野，韮崎地内』

末木　健　1986　「縄文時代集落の継続性」『山梨考古学論集Ⅰ』

末木　健　1987　「縄文時代集落の継続性（Ⅱ）－縄文中期八ケ岳山麓の石器組成より－」『山梨県考古学協会誌』創刊号

戸沢充則　1986　「縄文時代の地域と文化－八ケ岳山麓の縄文時代文化を例に－」『岩波講座日本考古学５』

長崎元広　1977　「中部地方の縄文時代集落」『考古学研究』23－４

新津　健他　1980　「山梨県金生遺跡」『日本考古学年報』33

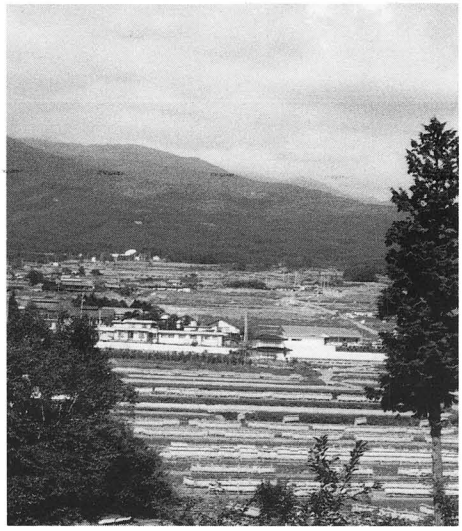
平野　修　1985　『根古屋遺跡』

武藤雄六他　1978　『曽利』

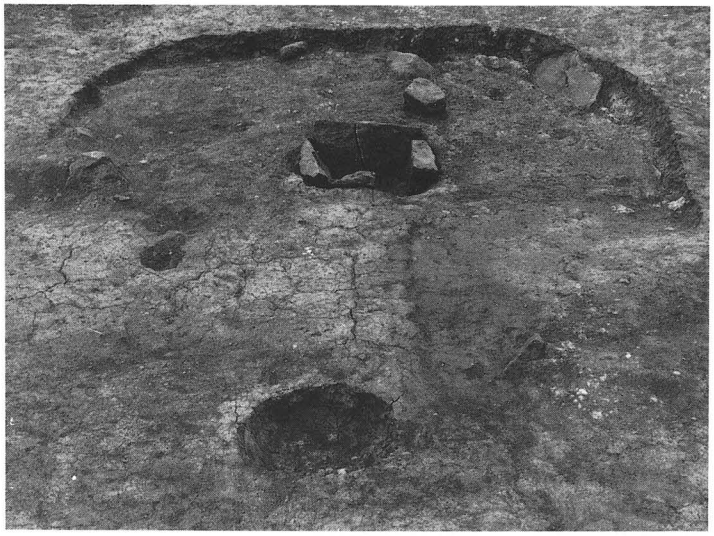
米田明訓　1986　『柳坪遺跡』山梨県教育委員会

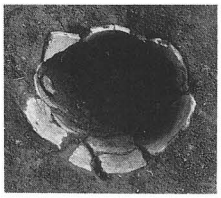
図　　版

図 版 1

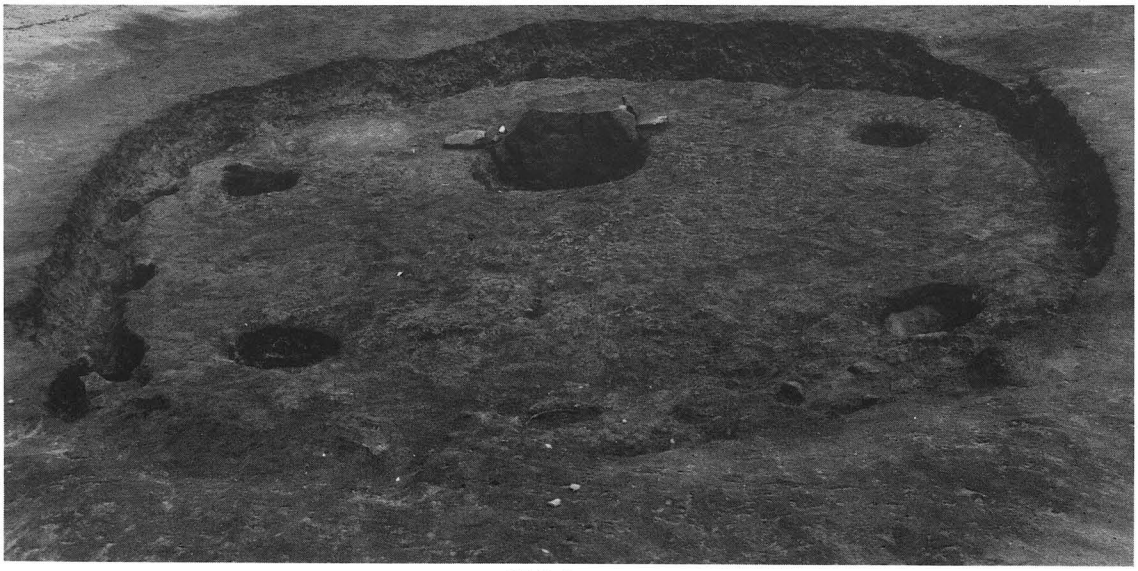


遺 跡 遠 景



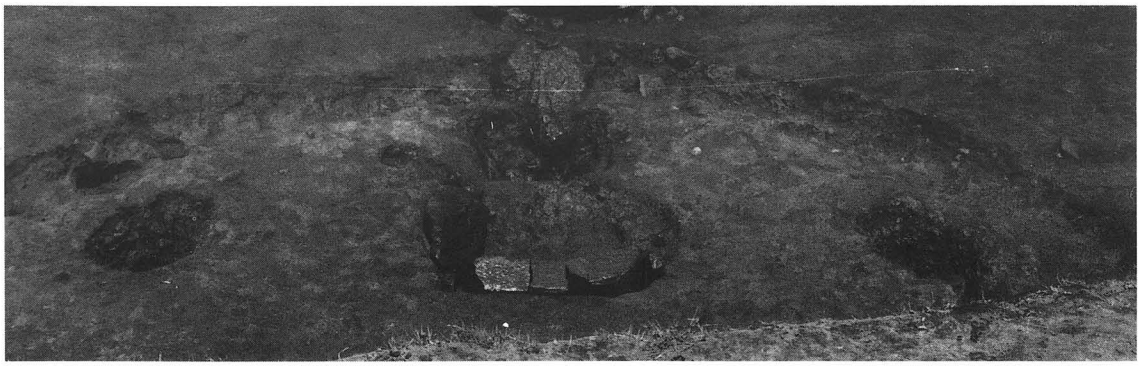


SB 0 1



SB 0 2

SB０２



SB０３

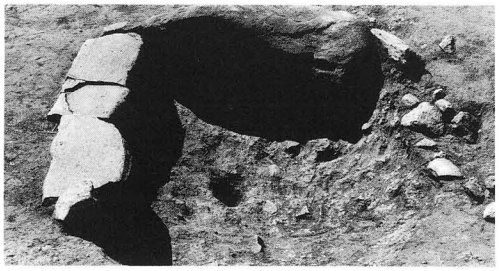
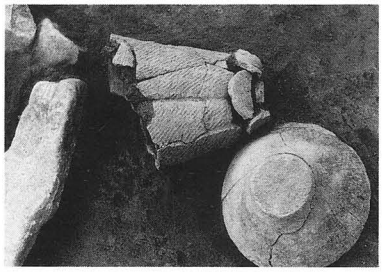
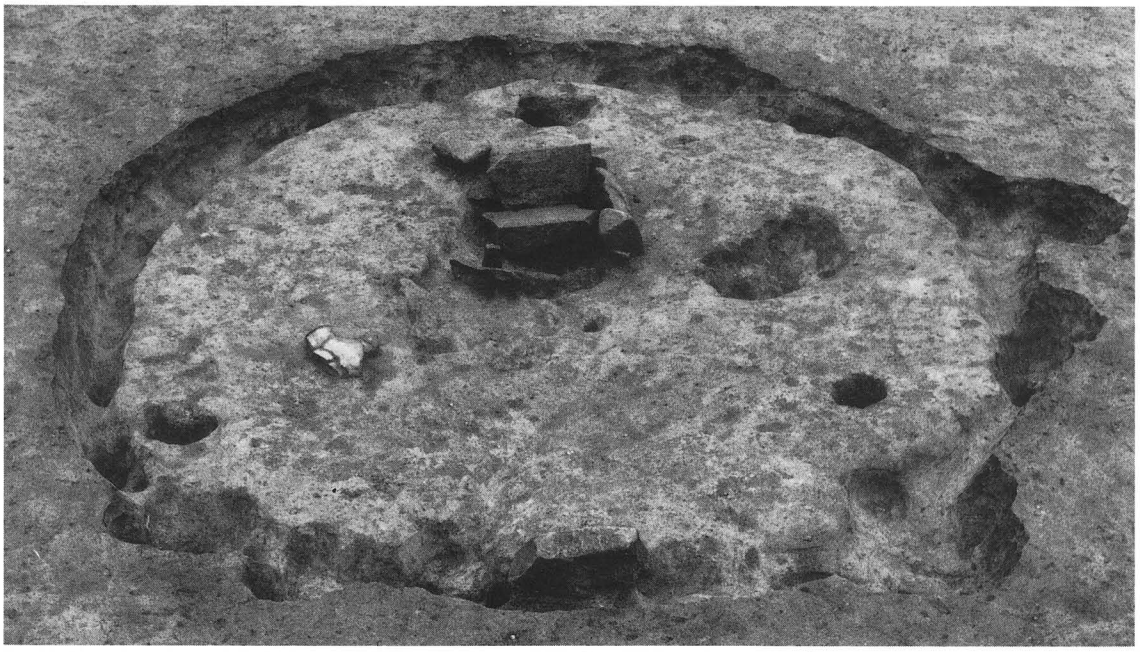


図 版 3

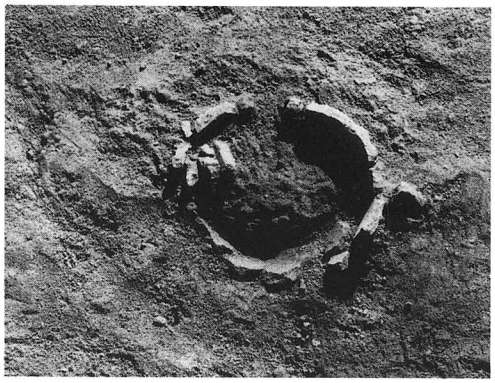


SB０４

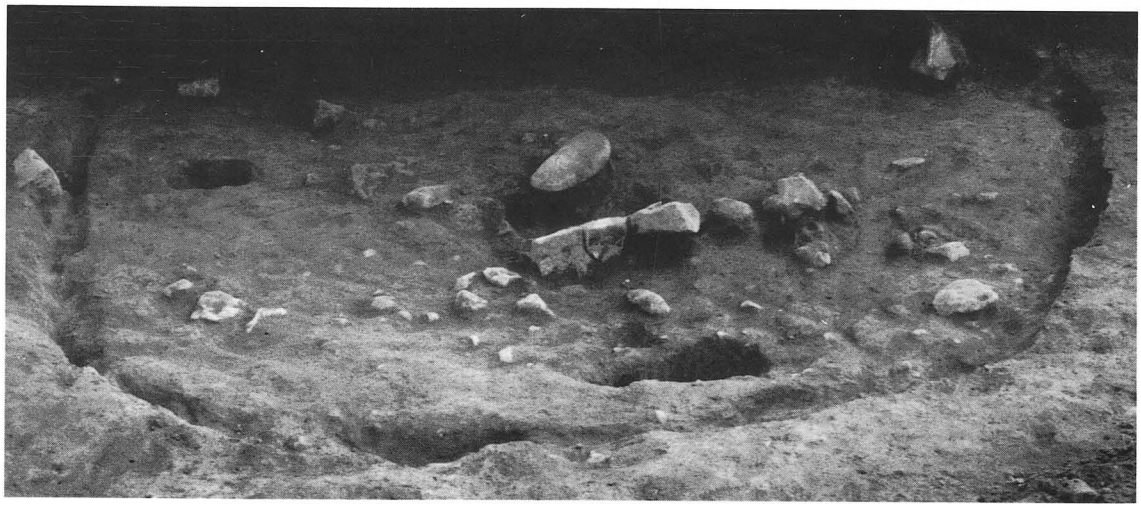


SB０５

SB０５

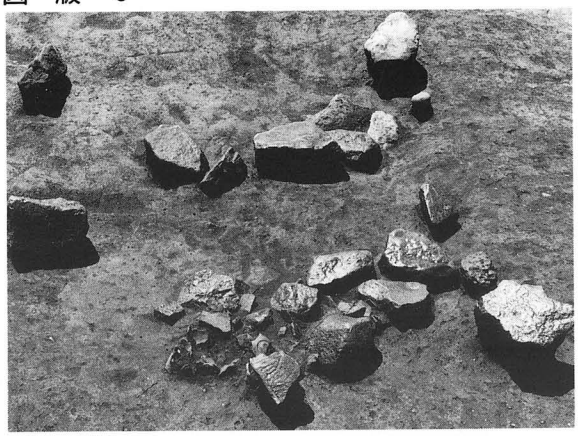


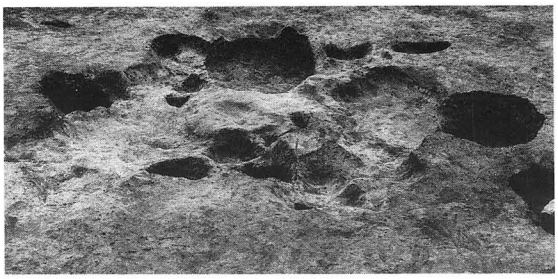
SB０６

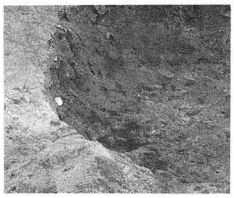


SB０７

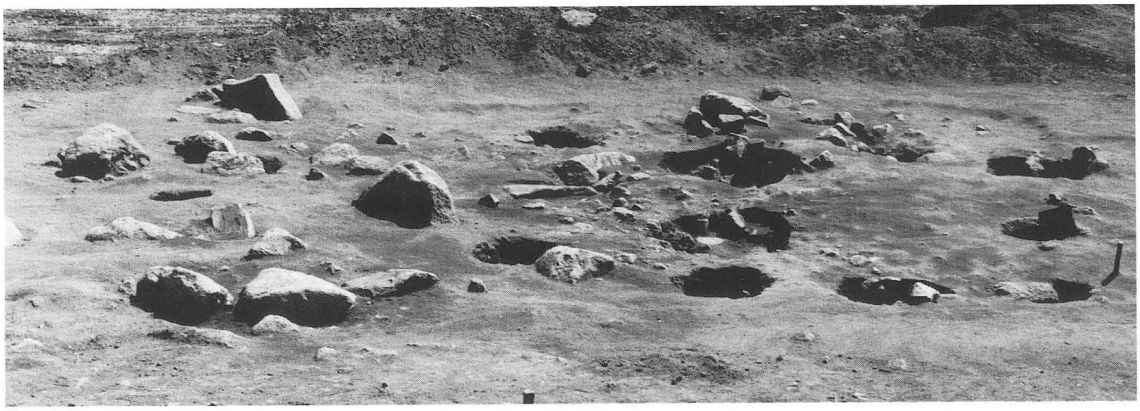
図 版 5



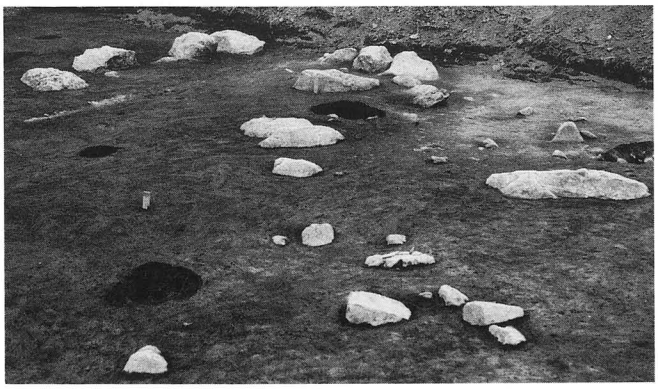




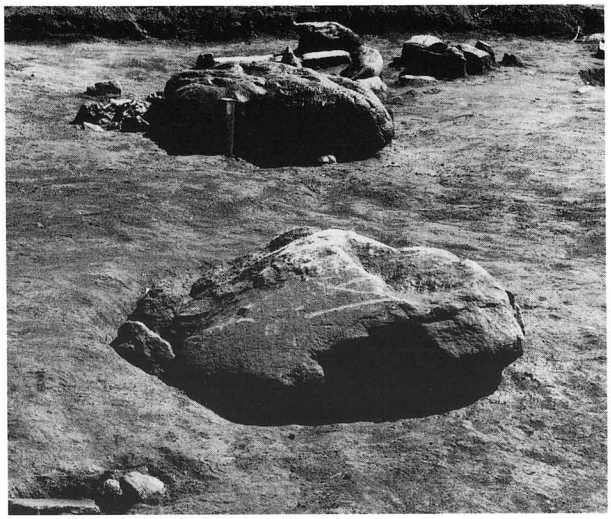
1 号 配 石



2 号 配 石

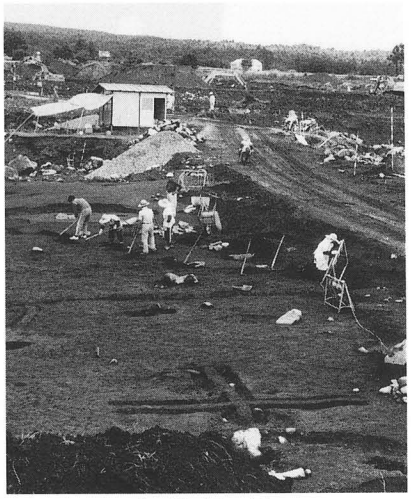


3 号 配 石

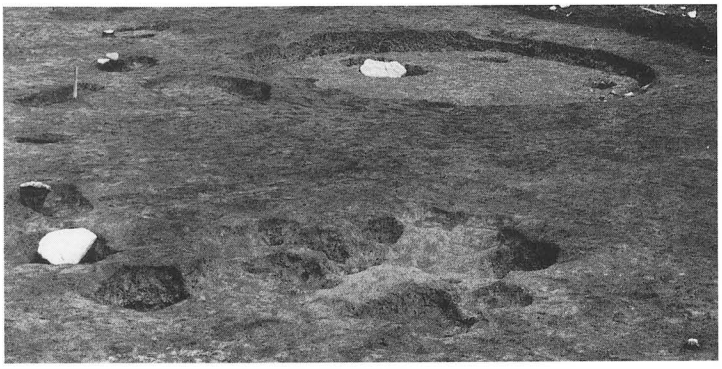


1 ～ 3 号集石

SK43～48



作 業 風 景

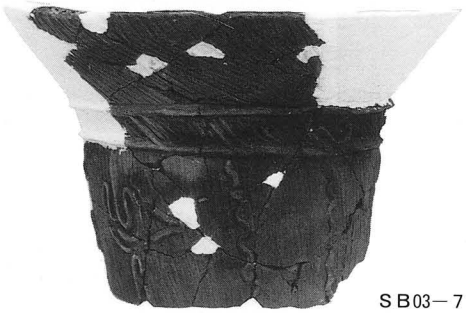


遺 跡 近 景

図 版 7

ＳＢ02－１

ＳＢ02－２



ＳＢ03－７

ＳＢ04－１

１号配石－１

１号配石－２

SB01－1

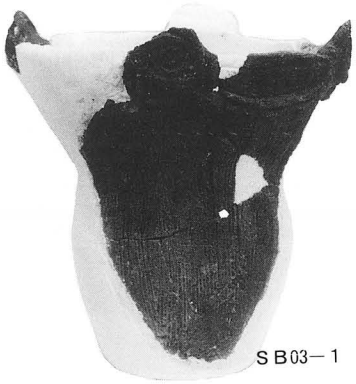
SB02－19

SB02－15

SB02－9

SB02－7

SB02－8


SB03－1

SB04－2

SK36－1

SB02－24

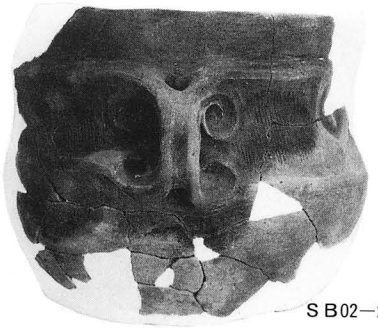
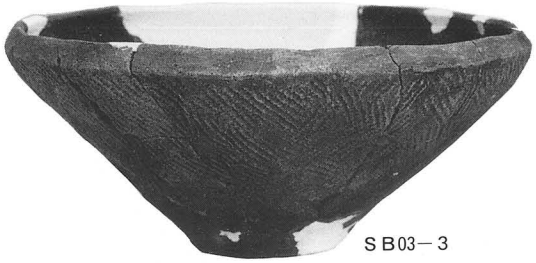

SB02－23

図 版 9

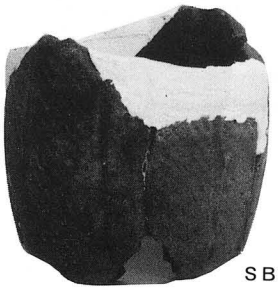

SB03－3

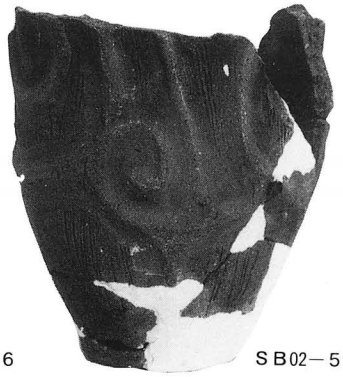
SB05－1

SB02－21

SB04－3

SB01－4


SB01－6


SB02－5

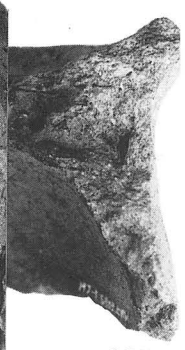
SB02－3

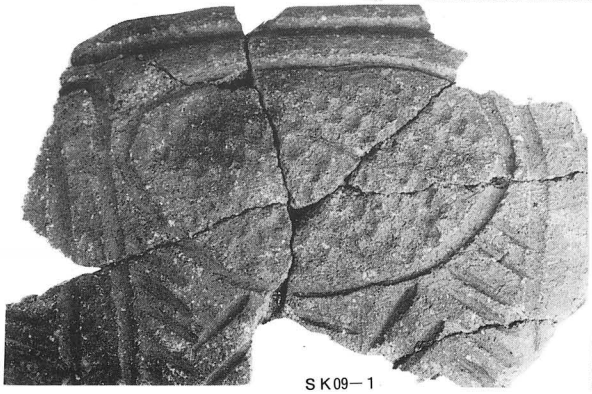
81図－77

83図－130

83図—130

SK21—1


SB03—6


SK09—1

79図—42

SB02—49

84図—3

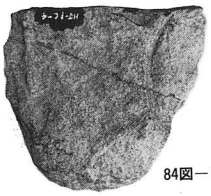
84図—5

SB07—5

SB07—4

SK36—9

SK23—8


84図—6

SB03—22

SB05—15

SB01—20

84図—16

84図—18

84図—19

84図—17

SB01—21

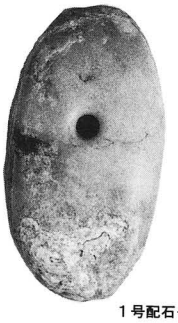
84図—15

84図—14

SB07—3

84図—12

84図—11


1号配石—13

昭和62年３月31日発行
大泉村埋蔵文化財調査報告書　６集

編　集
発　行　大泉村教育委員会
〒 409―15
山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025
TEL　0551―38―3115
印　刷　峡北印刷株式会社
〒 408
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条
TEL　0551―32―3245